

人間文化研究

第 21 号

論 文

- ジョフロア = サンチレールの生物学思想：
「プランの一致」の歴史的意義 松 永 俊 男 (1)
- 大正教養主義の二世たち
——安倍能成と野上彌生子 その2——
..... 高 田 里 恵 子 (37)
- Second Language Acquisition in Virtual Reality:
A Trial of AI-augmented English Learning
..... WAGNER Adrian (69)
..... ONO Michiko
- 韓国の選挙演説におけるディスコース・ストラテジー
——談話を作り上げる言語的・非言語的な手がかりを中心に——
..... 韓 娥 凜 (105)

研究ノート

- 単位修得不足傾向の学生が抱く
大学の授業に対する意識に関する調査 三 井 規 裕 (129)
前 川 明

翻 訳

- 朝鮮漢文短編小説集 (Ⅲ)
致富篇 (下) 梅 山 秀 幸 (145)

2024年10月

桃山学院大学 総合研究所

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想： 「プランの一致」の歴史的意義

松 永 俊 男

1. はじめに

本稿は、動物学者エチエンヌ・ジョフロア＝サンチレール (Étienne Geoffroy Saint-Hilaire, 1772-1844) の業績を追跡し、その歴史的意義を考察するものである¹⁾。

ジョフロアについてはアペル (Toby A. Appel) による1987年刊の詳細な研究²⁾があり、本稿でも多くを同書によっている。しかしジョフロアの科学思想についての同書の解釈には疑問があり、それが本稿の中心的な論点になっている。

1998年刊のギアダ (Hervé Le Guyader) による著書³⁾にはジョフロアの生涯と業績が簡潔にまとめられているが、それ以上にジョフロアの著作を多数、転載していることが大きな特徴になっている。したがって同書の英訳版⁴⁾は英訳ジョフロア論集として有用である。

フランス語の原典については、すべて電子図書館を利用した。原則としてGallica (フランス国立図書館の電子図書館) を利用しており、その場合は図書館名の記載を略している。BHL (The Biodiversity Heritage

キーワード：ジョフロア＝サンチレール，プランの一致，アナログ理論，
キュヴィエ，アカデミー論争

Library) など, 他の電子図書館を利用した場合は図書館名を付記した。

本稿の構成について述べておくと, 次の第2章ではジョフロアの生涯を簡潔にたどった。第3章から第5章までは, ジョフロアの初期から1820年代までの解剖理論の展開を追った。第6章では生物進化についてのジョフロアの記述をたどり, その特徴をまとめた。第7章ではジョフロアの編著『動物哲学原理』に基づいてキュヴィエとの1830年アカデミー論争の実態をたどった。

2. ジョフロアの生涯

1) 生い立ち

エチエンヌ・ジョフロアはパリ南郊の町エタンブ (Étampes) に生まれた⁵⁾。父親 (Jean Gérard Geoffroy, 1730-1804) はエタンブの法廷弁護士 (avocat) であった。「サンチレール」は少年エチエンヌのあだ名であったが, 彼が長じた後にファミリーネームに取り込んだのである⁶⁾。

ジョフロアは地元の学校を卒業すると, 聖職者になるため1788年にパリのコレージュ・ド・ナヴァロ (Collège de Navarre) に奨学生として入学した。しかし革命のため聖職への道を放棄し, 弁護士になるため1790年にコレージュ・デュ・カルディナル・ルモアーヌ (Collège du Cardinal-Lemoine) に入学し, 同年末までに法学の学士号も取得した。しかし法律家に魅力を感じなかったジョフロアは医師への進路変更を父に願い, 同コレージュの医学部に入学した。

このコレージュの宿舎に結晶学の父アユイ (René Just Haüy, 1743-1822) が居住し, コレージュでラテン語を教えていた。ジョフロアはアユイと親しくなって鉱物学者になることを夢見るようになり, 医学の学習を放棄した。一般向けに無料の公開講座を開くコレージュ・ド・フランスではドーバントン (Louis Jean-Marie Daubenton, 1716-1800) の鉱物学を

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

聴講し、王立植物園ではフルクロア (Antoine François Fourcroy, 1755-1809) の化学を聴講した。

アユイもドーバントンの講義を聴いて結晶学に導かれ、1784年の『結晶構造論』(*Essai d'une théorie sur la structure des cristaux*)で、結晶が微小な単位構造の繰り返しでできているという説を提唱した。

ジョフロアは1792年にアユイの宿舎での非公式な会合に参加できるようになり、ラグランジュ (Joseph Louis Lagrange), ラヴォアジエ (Antoine-Laurent de Lavoisier), ラプラス (Pierre Simon Laplace), ベルトレ (Claude Louis Berthollet) といった物理学の巨人たちと親しく接することになった (Appel, p.20)。

革命の進行に伴い、聖職者でもあったアユイは1792年8月に投獄されてしまった。ジョフロアはドーバントンらとアユイ救出に尽力し、アユイ釈放に成功した。それは1792年9月大虐殺の寸前であった。アユイはドーバントンにジョフロアを引き立てるよう要請した (Vie, p.19)。

2) 国立自然史博物館教授に就任

王立植物園の拡大に努めたデュフォン (Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707-1788) 亡き後、ドーバントンがこの組織のリーダーシップを担っていた。王立植物園は1793年6月に国立自然史博物館に改組されるが、植物園の12人の専門職員は改組後も博物館の12の教授職に横滑りすることになった。動物学教授職には、標本館付き国王植物学者という地位にあったラマルク (Jean Baptiste de Lamarck, 1744-1829) と、標本館管理者ドーバントンの補佐役であったラセペード (Bernard-Germain de Lacépède, 1756-1825) が就任するはずであった。ところがラセペードは革命政府による迫害を恐れて1793年3月にパリを去り、5月に植物園の役職を辞任した。ドーバントンがその枠にジョフロア青年を据えたのである (Appel,

pp.16-19)。同年7月にラセペードがパリにもどってくると、翌1794年に動物学教授の席が増設され、ラセペードが就任した (Appel, p.22)。

3人の動物学教授の分担は、ラマルクが「昆虫、蠕虫、顕微鏡の動物」、ジョフロアが「哺乳類、鳥類」、ラセペードが「爬虫類、魚類」となっていた (Appel, p.238)。ラセペードはこの分野に実績があったが、ラマルクとジョフロアはそれぞれの分野で実績がなかった。それでもラマルクは植物学に実績があり、貝類や昆虫に関心を抱いていた。新たな分野への進出はラマルク自身が望んだことでもあった。ジョフロアは鉱物学者になることを目指してドーバントンらに学んだだけであり、動物学は未知の世界であった。革命の混乱期でなければ考えられない人事といえよう。

博物館の動物学教授に就任したジョフロアは1年後、教授に課せられている40回の一般向け講演をこなさなければならなかった。その初回は1794年5月6日であり、内容は哺乳類と鳥類の自然史をドーバントンの分類方式に則って解説するものであった (Vie, p.40)。ジョフロアの最初の論文「齧歯目の四足獣の新たな属について」は1794年12月1日にパリ自然史学会で発表された。こうして、動物学の門外漢だったジョフロア青年は、順調に動物学者としての道を歩みだしたのである。

3) キュヴィエ登場

ジョフロアとは対照的に、動物学に精通しながら不遇をかこっていたのが3歳年上のキュヴィエ (Georges Cuvier, 1769-1832) であった。1788年以來、キュヴィエは生活のためノルマンディーの貴族のもとで家庭教師をしながら研究を続けていた。このキュヴィエをジョフロアに紹介したのは、ジョフロア家と親密な科学アカデミー会員の農学者テシエ (Henri-Alexandre Tessier, 1741-1837) であった。革命後の恐怖政治から逃れてノルマンディーに来ていたテシエが、この地方の農学会でキュヴィエに出

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

会い、1794年末にキュヴィエを紹介する手紙をジョフロアに送ったのである。キュヴィエはジョフロアの誘いに応じて1795年の早い時期にパリにやってきた (Appel, p.31)。

ジョフロアの斡旋により、キュヴィエは1795年7月に自然史博物館の動物解剖学教授メルトリユ (Mertrud) の代理講師に就任した (Guyader, p.12)。革命前の植物園で解剖学教授ポルタル (Antoine Portal, 1742-1832) の実験助手だったメルトリユは博物館の教授に就任したものの、教授に課せられた講演をこなす能力に欠けていた⁷⁾。当時の制度では、教授が自分の俸給の一部を割いて代理講師を雇うことができたのである。これをきっかけにキュヴィエはパリ市内の宿を引き払い、博物館内のジョフロアの宿舎に移ってきた。キュヴィエがメルトリユの宿舎に部屋を与えられるまでの数か月間、二人は共同生活を送った (Appel, p.32)。二人は1795年に5本の共著論文を発表している。

キュヴィエの学識はパリで注目され、1795年12月に科学アカデミーが再建されるとキュヴィエはその初期メンバーに選出された。後述するように、ジョフロアが科学アカデミー会員に選出されるのは12年後の1807年である。コレージュ・ド・フランスの自然史担当だったドーバントンが1800年に没すると、その後任にキュヴィエが選出された。自然史博物館の教授メルトリユが1802年に没すると、代理講師だったキュヴィエが後任となり、担当課目名は動物解剖学から比較解剖学に変更された。こうして学界におけるキュヴィエの地位はたちまちジョフロアを追い抜いてしまった。

キュヴィエの偉大な業績の一つが、動物界を四つの部門 (embranchment) に分けたことである。1812年の論文で提唱され、代表作『動物界』 (*Le Règne Animal*, 1817) に引き継がれた。動物界を「脊椎動物」、「軟体動物」、「体節動物」、および「放射動物」に分け、脊椎動物を特別視することなく他の三部門と同等とみなしたことは動物学上、画期的であった。キュヴィ

エの立場では、四部門それぞれの基本的プランは全く異なっており、異なる部門を連結する移行型など存在するはずもなかった。

キュヴィエの生物学の基本原則は「生存の条件」(les conditions d'existence)であった(Appel, p.41)。動物の諸器官はそれぞれの生活条件に適応するように形成されており、それ以外の原則を考慮する必要はないという。「生存の条件」も思弁的理論であったにもかかわらず、キュヴィエ自身は経験主義を標榜し、思弁を断って事実の収集に努めるのが科学者のなすべきことだと説いていた。生物進化論などはキュヴィエの嫌悪する思弁的理論の典型であった。このようなキュヴィエと思弁を好むジョフロアとは、いずれ衝突せざるを得なかったのである。

4) エジプト滞在

1798年、ナポレオンのエジプト遠征に同行する科学者の部隊が結成されることになった。ジョフロアとキュヴィエにも参加要請があったが、キュヴィエは即座に断り、ジョフロアは勇んで参加した。科学者たちは1798年5月にツーロンを出帆し、1801年11月にマルセイユにもどってきた。パリの学界から離れていたこの3年間のエジプト滞在はジョフロアの生涯に大きな意味を持っていた(Appel, pp.72-81)。

ジョフロアは1798年まで博物館教授としての任務である哺乳類と鳥類の分類に専念していたが、エジプトでは比較解剖学にも着手し、ワニや魚類も扱うようになった。また、エジプト各地に出かけて標本を収集した。古代の墓からジョフロアが持ち帰ったヒトや動物のミイラは後の進化論論争で大きなテーマになった。

しかしエジプト滞在の後半では地道な研究を放棄し、思弁にふけるようになった。帰国前の1801年には光、熱、電気、神経液といった不可量性流体(fluide impondérable)によって物質界のすべてを説明する理論体系

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

の構築を試みた。不可量性流体によって諸現象を説明するラプラスらの試みをジョフロアはアユイ家の会合で聞き知っていた。ジョフロアの理論の特徴はそれによって生物の諸現象までも説明することにあつた。ジョフロアの理論は稿本として残されているが、公表されなかつた。それはジョフロアにとって幸いであつたというべきであらう。

5) アナログ理論の提唱と論争

1801年に帰国した後のジョフロアは動物学の地道な研究に従事していたが、声望は上がらず、科学アカデミー会員選挙にも失敗していた。しかし1807年の一連の論文が注目され、1808年によく科学アカデミー会員に選出された。またこの年にパリ大学理学部に新設された動物学教授に就任した。

1807年の一連の論文でジョフロアは、脊椎動物4綱で骨格の基本構造が共通していることを明らかにし、比較解剖学に革命をもたらした。この成果に追隨する研究が続出したにもかかわらず、その後の10年間、ジョフロア本人は分類学に従事し、比較解剖学の論文を書いていなかった。後述する事情から1818年になって『解剖哲学』を出版し、アナログ理論と銘打った理論を説いた。

1818年の『解剖哲学』では脊椎動物だけに限って相同を指摘していたが、1820年には脊椎動物と昆虫との間でも相同が認められると主張するようになった。これは到底キュヴィエの認めるところではなく、やがて1830年に科学アカデミーでの論争になっていった。

6) 晩年

キュヴィエは1832年5月に亡くなったが、ジョフロアはそれからさらに12年、生存した。しかし動物学に寄与することのない思弁にふけるよ

うになり、学界の厄介者になってしまった (Appel, pp.178-181)。最後の著書『総合的概念』(*Notions synthétiques, historiques et physiologiques de philosophie naturelle*. 1838) では、1801年にエジプトで思いついた不可量性流体による理論体系をさらに詳細なものにした。当然のことながら同書は識者から無視され、ジョフロアを失望させた。1841年には失明し、博物館教授の席を息子のイシドール (Isidore Geoffroy Saint-Hilaire, 1805-1861) に継がせた。1844年6月19日、息を引き取った。

3. 「プランの一致」の提唱

ジョフロアは『百科雑誌』の1796年1月号にキツネザル類に関する論文を掲載した⁸⁾。グメリン (J. F. Gmelin) が編集したリンネ『自然の体系』第13版の第1巻 (1788) では哺乳綱霊長目に、ヒト (Homo), サル (Simia), キツネザル (Lemur), およびコウモリ (Vespertilio) の4属が記載されているだけであった。ジョフロアはこの論文でキツネザル類を、キツネザル (Maki. Lemur), インドリ (Indri), ロリス (Loris), ガラゴ (Galago), およびメガネザル (Tarsius) の5属に分け、形態上の類縁関係を論じた。2語から成る Maki. Lemur は属名として不適切なので Lemur の表記にもどされたが、後の4属については現在もジョフロアの命名が用いられている。このうちガラゴはこの論文でジョフロアが初めて記載したものである。この論文は原猿類に関する基礎的研究として評価されるが、ジョフロアの生物学思想を知るうえでも重要である。

論文は次の文で始まっている。「地球の大量の産物を観察してきた人にとって不変の真実とは、諸部分の間に偉大なる調和と必然的な関係性が存在するということである。自然は自らの力を一定の範囲内に止め、すべての生物を単一のプラン (un plan unique) だけによって形成してきたように思われる。〈中略〉したがって、ある目の中で科を区別する差異は、同

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義
一器官の変容によってもたらされるのである。

動物学に転じて間もない時期に、なぜジョフロアはこのような生物学思想を抱いたのだろうか。当然、考えられる要因は、アユイのもとで学んでいた鉱物学や化学、物理学の影響である。アペルは、そうした自然史博物館以前の影響を確証がないという一言で否定している (Appel, p.90)。アペルはジョフロアの思想の源泉をもっぱらビュフォンに帰している (Appel, pp.23-24)。しかし、これとて確証があるわけではない。ジョフロアの不可量性流体へのこだわりを考量すれば、アユイ邸における物理科学の影響は大きかったはずである。ギアダは「プランの一致」がアユイの結晶学に由来すると見ている (Guyader, p.105)。この件についてはジョフロアの研究歴をたどる中でさらに考察したい。

4. 主著『解剖哲学』

1) 1807年の魚類研究

ジョフロアは1807年に「魚類の研究」と題した3本の論文を立て続けに発表し、魚類の骨格と陸生の脊椎動物（爬虫類、鳥類、哺乳類）の骨格とが基本的に共通の構造を有していると説いた⁹⁾。この研究の直接の刺激となったのはキュヴィエの代表作の一つ『比較解剖学講義』 (*Leçons d'anatomie comparée*, 5 vols, 1800-1805) であった (Appel, p.85)。キュヴィエの関心はなによりも機能にあり、機能を離れた構造の共通性には注目していない。かねてから「プランの一致」を信奉していたジョフロアはこれに不満を持ち、脊椎動物における骨格の共通性を説いたのである。

「魚類の研究」の第一論文では、魚類の胸鰭と陸生脊椎動物の前肢との共通性を明らかにした。アリストテレス以来、胸鰭と前肢との対応は珍しいことではなかったが、ジョフロアは構成する諸骨を厳密に対応付けたのである。第二論文では、鳥類の叉骨に相当する骨が魚類にも存在すること

を明らかにした。第三論文では、陸生脊椎動物の胸骨に相当する骨が魚類にも存在することを明らかにした。こうしてジョフロアは、哺乳類、爬虫類、鳥類、および魚類という、生活様式を異にする脊椎動物群の体制が共通のプランに基づいていると主張したのである。前述したように、ジョフロアの論文は高く評価された。

2) 1817年の鰓蓋骨研究

1807年の論文が注目されたにもかかわらず、その後の10年間、ジョフロア本人は分類学に従事し、比較解剖学の論文を書いていなかった。ジョフロアが革新的な主張をまとめようとしなかったのは、鰓蓋骨の問題が障壁になっていたためである。ジョフロアは、脊椎動物におけるプランの一致を主張するためには魚類の鰓蓋骨に相当する骨が哺乳類にも存在しなければならぬと考えていたが、それを見いだすことができなかった。ところが1817年、突然、哺乳類の耳小骨こそ、魚類の鰓蓋骨に相当する構造であると気づき、直ちに短報を発表した。これで自信を得たジョフロアは最初の著書『解剖哲学』の執筆に向かうのであった (Appel, pp.97-98)。

ただし、1837年にドイツの発生学者ライヘルト (Karl Bogislaus Reihert) が哺乳類の耳小骨と、魚類の顎の連結部に関係した諸骨とが相同であることを発見し、ジョフロアの誤りが明らかになった (Appel, pp.206-207)。そもそも魚類の鰓蓋骨に相当する骨は哺乳類に存在しないと考えればよかつたはずだが、当時のジョフロアにはできないことだった。誤った知識が科学を推進した事例の一つと見てよいだろう。

3) 『解剖哲学』(1818): アナローグ理論の提唱

本書の本文は5章から成り、巻末の10ページに図版が収められている¹⁰⁾。第1章では鰓蓋骨の問題を詳細に論じ、第2章から第5章までに

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

1807年の三論文の内容を発展させている。

「序論」では、この新たな比較解剖学の意義について総合的に語っている。冒頭に「脊椎動物の体制は単一のタイプに還元できるであろうか」(*L'organisation des animaux vertébrés peut-elle être ramenée à un type uniforme ?* p.xv) という疑問文がイタリックで掲げられ、これが同書の課題であるという。この設問に対するナチュラリストの態度を4期に分けて語っている。

最初はナチュラリストに限らず、「単一のプラン」が直感的に認められていた。その例としてニュートン『光学』の設問31が掲げられている(p.xvi)。これがアナロジーの歴史における第一期であるという。

ニュートンは設問31の最終部分で動物の身体の斉一性を説き、これは惑星系の斉一性と同様、神の御業によるものであるという。ジョフロアはこの部分をラテン語のまま引用している。ジョフロアはニュートンを引用しているが、ビュフォンには言及していない。ジョフロアの思想の源流を示唆するものといえよう。

現代の生物学における「相同」(homologie)、および「相同器官」(homologue)に相当する概念をジョフロアはそれぞれ、「アナロジー」(analogie)、および「アナローグ」(analogue)と呼んでいたが、それをきちんと定義してはいない。

さて、自然史の発展によって生物の多様性が明らかになると、かえってアナロジーの追及が困難になった。ナチュラリストは哲学的原理を放棄し、細部の観察と記述のみに集中するようになった。これが第二期である。

さらに自然史が発展して観察結果が豊富になると、分類に携わるナチュラリストは同じ生物群における共通の要素に目を向けるようになった。これが第三期である。アナロジーへの関心が復活したともいえるが、それは無自覚のまま進行し、的確な方法論も存在しなかったという。

アナロジーを認定する方法は、「諸部分の位置と関係と相互依存」(p.xxv)であると述べ、これを「結合の原理」(le principe des connexions)と呼んでいる(p.xxviii)。ジョフロアは10年前からこの原理に基づく研究を進め、その正確性と有効性を確認してきた。その成果をまとめた本書の刊行により、第四期が始まったという。

この「結合の原理」を活用することにより、「自然哲学にとって基本的なもう一つの原理」を確認することができる。すなわち、同一のモデルによって構成されている脊椎動物では、「どの科についても、他の科に見られる生体の材料を常に発見できるという見通し」であり、これを「アナローグ理論」(*Théorie des analogues*)と名付けたという(pp.xxi-xxxii)。

この後、前肢と呼吸器について「結合の原理」の有用性を示し、最後に、解剖学における「結合の原理」は、航海における羅針盤のごとき役割があると述べて序論を締めくくっている。

4) 「自然史」と「自然哲学」

『解剖哲学』の書名に用いられている「哲学」は、単に理論を意味しているのではない。当時、「自然史」は自然を記述する学問であり、「自然哲学」は法則に基づいて自然を分析する学問とされていた¹¹⁾。自然哲学のモデルとなったのがニュートンの『自然哲学の数学的原理』であった。アユイ家における物理科学者たちとの接触によってジョフロアは自然哲学への志向が強化されたと思われる。動物学に転じた当初から「プランの一致」を説いていたのも、自然哲学としての動物学を樹立しようとしていたことの現れであろう。前述した『解剖哲学』の序論からも、ジョフロアが自然史と自然哲学との対比を意識していたことが分かる。後述するように、1830年のアカデミー論争は、個別の記述(history)に徹すべきとするキュヴィエと、普遍的理論(philosophy)を目指したジョフロアとの論争であった。

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

5) 『解剖哲学』第2巻(1822)：奇形の研究

ジョフロアが1822年に刊行した『解剖哲学，ヒトの奇形』¹²⁾は，1820年から取り組んできた奇形についての研究を集大成したものである。ジョフロアは奇形が発生時の異常によって生ずると説き，キュヴィエが支持する発生の前成説を強く否定した。さらにその立場から奇形の成因についての理論を構築し，奇形の実験にも着手した。

同書は奇形研究という新たな分野を開拓したものであったが，「奇形学」(teratologie)という名称は用いていない。「怪奇譚」の意味で用いられていた“teratologie”が「奇形学」の意味で定着するのは，エチエンヌの子イシドールの『奇形学』¹³⁾によるものであった。同書はこの分野の体系化に大きく貢献し，フランスで父親の出版物が得られなかった高い評価を得た(Appel, p.126)。同書によって奇形学は相同決定の補助手段として欠かせないものになったのである。

『解剖哲学』第2巻の「序論」(pp.xi-xxxiv)では，第1巻で説いた新たな比較解剖学の意義について語っている。本編では各種の奇形を論じているが，随所でアナログ理論に基づく解釈を提示している。その点で第1巻との連続性が認められるといえよう。なお，この「序論」の最終文では，アナログ理論を支える思想を「『有機的構成の一致』という名称」(le nom d' *Unité de composition organique*)で呼んでいる。

本編の最後の章「要約と結論」の最初の節(pp.478-499)が前成説批判に当てられている。ジョフロアは，動物には発生を正常にする力が働いているとして，これを「形成力」(*nisus formativus*)と呼んでいる¹⁴⁾。この形成力を超える力が環境から働いたときに奇形が生じるといふ。この奇形論がジョフロア進化論の基礎となるのである。

5. 昆虫・脊椎動物説

1) 1820年の昆虫論

ジョフロアは1820年の1月から2月にかけて、科学アカデミーにおいて「昆虫の体制について」という講演を3回連続で行い、昆虫と脊椎動物との「プランの一致」を説いた¹⁵⁾。この講演のきっかけとなったのは、体節動物におけるプランの一致を説いたラトレイユ (Pierre André Latreille, 1762-1833) の講演 (1819年12月27日) であった¹⁶⁾。ジョフロアは第一論文の冒頭でこのラトレイユの講演を引用し、これがきっかけで体節動物と脊椎動物とのプランの一致を考えるようになったと述べている。

ジョフロアはこの第一論文で、昆虫の外骨格と脊椎動物の脊柱が相同であると主張したのである。脊椎動物では循環系によって提供される材料により諸臓器が脊柱の外に形成されるが、心臓の無い昆虫では神経系によって提供される材料により諸臓器が脊柱の内部に形成される。「昆虫は脊椎動物である」(les insectes sont des animaux vertébrés. p.345) と宣言し、「すべての動物は脊柱の内部か外部で生きている」(tout animal habite en dedans ou en dehors de sa colonne vertébrale. p.345) という。いうまでもなく、ここでジョフロアが考察しているのは脊椎動物と体節動物だけである。頭蓋脊椎説を前提にして、昆虫の外骨格の諸部分を脊椎動物の頭蓋と脊柱の諸部分に対応させ、さらに、昆虫の気門と魚類の側線内の孔器とが相同であるという。

第二論文の前半ではラトレイユの講演の詳細を紹介し、後半ではアナログ理論と結合の法則の意義を改めて説いている。脚注(p.34)では、ジョフロアの昆虫論に対するキュヴィエの厳しい批判「昆虫と脊椎動物の間に共通点はなにも無い。絶対に無い」を紹介している。

第三論文の前半では体節動物と脊椎動物の諸部分の相同を論じ、「体節

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「ブランの一致」の歴史的意義

動物の付属肢は脊椎動物の肋骨である」という。後半では化学者に依頼した化学分析の結果を論じ、甲殻類の甲殻と脊椎動物の骨の主成分がともにリン酸カルシウムと炭酸カルシウムであるから両者が相同であることが確認されるという。形態学から逸脱した推論だが、ギアダは比較生化学の嚆矢と評価している (Guyader, p.17)。

2) 1822年の昆虫論

ジョフロアは1822年に「椎骨概説」と題した論文を発表した¹⁷⁾。ジョフロアの研究テーマが奇形に集中するようになったので、これまでの椎骨研究の成果をまとめておくというものであった。図版の無かった1820年の三論文と違って、別刷3ページ分の図版が挿入されている。論文の前半ではツノカレイの幼魚を主たる材料にして椎骨の形態を論じ、後半では1820年の「昆虫・脊椎動物説」を再論している。

その最後の部分で、「昆虫の椎骨の構造よりもはるかに重大」(p.111)とみなす事実として、体節動物の臓器の配列が脊椎動物のそれと一致していることを指摘している。甲殻類や昆虫における重要な器官と、それと同等な高等な脊椎動物の器官とが、「同一の順序、同一の関係、そして同一の配置」(p.111)であるという。さらに、イセエビ (homard) の外皮を取り去って内部を観察し、「驚嘆すべきことに、エビのすべての器官系の配列順序が哺乳類における配列順序と同じなのである」という。ゲールド(1985)以来、これがホメオボックス遺伝子を予見したものとして形態学者たちから繰り返し引用されている¹⁸⁾。しかし、これはあくまでも昆虫・脊椎動物説というトンデモ学説の一環であり、これだけを切り出してその予見性を云々するのは適切ではないだろう。

6. 進化論の提唱

ジョフロアは生物進化を体系的に論じたことはない。ジョフロアが最初に生物進化を唱えた1825年論文と1829年の2点の論文は『自然史博物館紀要』に掲載されている(Appel, pp.130-134)。キュヴィエとのアカデミー論争後に科学アカデミーで行った5回の連続講演は1831年のうちに単行本として刊行され、さらに1833年の『科学アカデミー紀要』に転載された(Appel, pp.134-136)。これに加えて、近年のジョフロア研究では1833年に雑誌『百科評論』(*Revue Encyclopédique*)に掲載された2点の論考が注目されている¹⁹⁾。順次、その内容を見ておこう。

1) 1825年論文「ガビアルの体制」

ジョフロアが生物進化に言及した最初の論考が、1825年の論文「ガビアルの体制」²⁰⁾であった。内容はほとんどワニ類の比較解剖の専門的な議論であるが、サブタイトルでは、「アジアに現生するガビアルが、大洪水以前のワニ(テレオサウルスまたはステネオサウルス)に由来するか否か」を問題としている。また、本文最後の第5章(pp.149-155)の章題「大洪水以前の動物であるテレオサウルスとステネオサウルスが、二大陸の熱帯気候に現生するワニ類の先祖である可能性について」からも、この論文のねらいが生物進化を説くことにあるのは明らかだろう。ギアダは、この論文がジョフロアとキュヴィエとの対立を決定的にしたとして重視している(Guyader, pp.88-95)。

ジョフロアがこの論文を執筆するきっかけとなったのは、キュヴィエの代表作の一つ『化石骨の研究』第2版の第5巻(1825)に掲載された論文「ワニの化石骨について」であった。キュヴィエは、ノルマンディーのカーン(Caen)で発見されたワニの化石骨と、その近辺のル・アール(Le

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

Havre) とオンフルール (Honfleur) で発見されたワニの化石骨を研究し、両者とも現生のインドガビアルと同属 (*Gavialis*) であるとした。ギアダによれば、キュヴィエが現生ガビアルと化石骨との違いを認識しながらも同属としたのは、化石骨を別の属とすると、化石骨が進化論に結びつくことを恐れたためであるという。

エジプト遠征以来、ジョフロアはワニ類の比較解剖に自信を持っていた。博物館所蔵の上記の化石骨を研究し、現生ガビアルとの違いを明確にした。カーンの化石には哺乳類の特徴も見られるとしてテレオサウルス (*Teleosaurus*) と命名し、ル・アープルとオンフルールの化石は現生ガビアルより原始的とみなしてステネオサウルス (*Steneosaurus*) と命名した。すなわち、現生ガビアルはステネオサウルスとテレオサウルスとの中間形とみなしたのである²¹⁾。

種が変化するのは奇形の誕生によるものであると主張し、結論として次のようにいう。「現生のワニ類は、今日、化石として得られる大洪水以前の種から連続的な遷移 (une succession) によって生じたのである」(pp.152-153)。ワニ類に限定しての議論になっているが、この時点でジョフロアが奇形論を基礎にした生物進化論を構想していたことは明らかだろう。

2) 1829 年論文

1828 年 12 月 8 日にジョフロアは弟子のセール (Étienne Serres, 1786-1868) との共著で、ナチュラリストの医師ルーラン (François Désiré Roulin, 1796-1874) の研究について科学アカデミーに報告した。それが翌 1829 年に『自然史博物館紀要』に掲載された²²⁾。ルーランは旧大陸から新大陸に持ち込まれた家畜が野生を取りもどしたのは環境の影響であると説いていた。

ジョフロアはルーランの説をはるかに超える結論を引き出した。形成力に対する環境の抵抗がルーランの家畜の場合よりも大きければ、大きく変化した動物が生まれるはずだとし、最後に次のようにいう。「絶滅した動物が、中断無き出生と連続的な変容によって、現生の動物の祖先となった」(p.208)。

ジョフロアの1829年第二論文²³⁾は上記の第一論文に続いて掲載されており、両者は一体であるとみてよい。まず、進化論の対抗理論である六日間の創造説と、絶滅と創造を繰り返す反復創造説とについて、「両者とも、理性の光と自然科学の慎重な思考に反している」(p.210)として退ける。進化の実例として、水生の化石爬虫類から化石哺乳類までの系列を次のように示している。“*Plesiosaurus, Pterodactylus, Mososaurus, Teleosaurus, Megalonix, Megatherium.*” (p.215)。

第一論文と同様、環境の影響による奇形の誕生を進化の要因とし、そのことを実験によって示すことができるという (p.227)。

3) 1831年アカデミー講演

キュヴィエとのアカデミー論争が1830年4月に終わり、七月革命の混乱が収まった後の1830年10月から1831年8月にかけて、ジョフロアは科学アカデミーでワニの比較解剖学と進化に関する5回の講演を行った。講演の内容は1831年のうちに単行本として刊行され、さらに1833年に『科学アカデミー紀要』にも転載された²⁴⁾。

この講演は1829年論文の主張を拡張したもので、化石ワニと現生ワニの比較解剖学の専門的な議論になっているが、1831年3月28日の講演による第4論文²⁵⁾だけは生物進化についての概説になっている。

ジョフロアは新たに発見された化石も利用して、化石ワニを現生ガビアルと同属としたキュヴィエの誤りを指摘し、化石ワニが現生ガビアルの祖

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

先である可能性を説く。進化の主要因は大気中の酸素の減少による奇形の誕生であるとして、「こうした変容が有害な結果をもたらすなら、その動物は生存できず、新しい条件に適合するように変容した他の動物にとって代わられてしまう」(p.79) という。

ジョフロアはアカデミー論争で争点にならなかった生物進化の問題を掲げて再度の論争を挑んだが、キュヴィエは応戦することなく、1832年5月に病死するのであった。

4) 1833年論文

ジョフロアは雑誌『百科評論』(*Revue Encyclopédique*)の第59巻(1833)に生物進化に関する2点の論考を掲載した。一つは「古生物誌」(*Paleontographie*)と題した論文²⁶⁾である。他の一つはビュシェ(Philippe Buchez, 1796-1865)の著書『歴史学概説』(*Introduction à la science de l'histoire ou Science du développement de l'humanité*, 1833)についての書評(pp.210-221)である。

論文「古生物誌」についてギアダは、ジョフロアの進化思想が正確にまとめられているという(Guyader, p.228)。ジョフロアによれば、大気中の酸素が減少するにつれ、より高度な生物が奇形として生まれてくる。進化を推進するのは生物自体ではなく、地球環境の変化である。しかし、どのように進化するかは予め神によって設定されている。ヒトの出現も同様であるとして、「ヒトの誕生も神のデザインによって永遠の過去から決定しているのである」(p.92)という。

ジョフロアは上述の書評においても、生物界と人間界が進歩の過程にあり、それは宇宙の法則に基づいているという(Guyader, pp.229-230)。こうして最晩年のジョフロアは、本稿第2章で述べたように、宇宙の法則に没頭するのであった。

ジョフロアは自然史博物館の先輩であるラマルクの進化論について、1825年論文と1829年第二論文では好意的に言及していた。ところが「古生物誌」では、ド・マイエ (Benoît de Maillet) の『テリアメド』(Tellamed)と同様に空疎な思弁に過ぎないとしてラマルクの進化論を退けている (p.87)。オリジナリティにこだわるジョフロアとしては、ラマルクとの違いを強調する必要があったのであろう。

事実、両者には大きな違いがある。ラマルクの場合、進化の根本的な要因は生物に内在する力であった。ジョフロアの場合、生物の変化をもたらすのはあくまでも外部環境の作用であった。

また、ラマルクは進化の事実を証明しようとしていないが、ジョフロアは化石によって進化の事実を証明しようとしていた。そのため、ジョフロアの進化論は「古生物学的進化論」とみなされることもある。しかしジョフロア進化論については「プランの一致」論との関係を重視すべきであろう。「プランの一致」は必ずしも進化論に結びつかないが、ジョフロアの場合、その進化論は「プランの一致」から導かれたと見るべきだろう。

7. 『動物哲学原理』

1830年2月から4月にかけて、科学アカデミーの集会においてジョフロアとキュヴィエとの間で有名な論争があった。ジョフロアは論争終結の直後にその経過をまとめた『動物哲学原理』を刊行した²⁷⁾。同書の内容を検討することによって、この論争の歴史的意義を考えてみたい。

1) 序論「アナローグ理論について」

本書冒頭の「序論」(pp.1-28)では、ジョフロア本人の「新しい方法」とキュヴィエの「古い方法」を対比し、哺乳類の前肢を例にして「新しい方法」の利点を説いている。

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

2) 「印刷物の必要性について」

「序論」に次ぐ「印刷物の必要性について」(pp.29-34)は「まえがき」に相当するもので、論争の経過を印刷物として公開する意義を説いている。

本文の後に本文より長文の「注」(pp.31-34)が付記され、アナログ理論と同様の思想を紹介している。まず、ドイツとエジンバラではこうした思想が当たり前になっているという。フランスにおける研究として、ミルヌ・エドヴァール (Henri Milne-Edwards) による甲殻類の口器の研究 (1830) と、サヴィニ (Jules César Savigny) による昆虫の口器の研究を紹介している。

3) 1830年2月15日、ジョフロア講演

この論争のきっかけとなったのは、科学アカデミーに送られてきた二人の無名のナチュラリスト、メーラン (Pierre Stanislas Meyranx, 1790-1832) とローランセ (Laurentet) の共著論文「軟体動物の体制についての考察」²⁸⁾であった。ジョフロアとラトレイユがこの論文についての報告を作成することになった。ラトレイユはこの報告に署名はしたが、作成したのはもっぱらジョフロアであった (Appel. p.147)。2月15日の科学アカデミー月曜集会でジョフロアが読み上げたこの報告が『動物哲学原理』に収められている (pp.35-52)。

ジョフロアは、まず、上記の経過を小さな活字で記述し、用意した原稿の一部はキュヴィエの抗議に応じてアカデミーの集会では読み上げなかったという (pp.35-36)。

メーラン論文では軟体動物の代表として頭足類のコウイカ (*Sepia officinalis*) を取り上げ、その構造を脊椎動物と比較している。結論として、脊椎動物が反りかえって首が尻にくっついたとしたら内臓の配列がコウイカと同じになるという。ジョフロアの報告 (pp.37-49) はこのメーラン論

文の主張をはるかに超えるものであった。メーランらは動物学の「新しい方法」を駆使することにより、脊椎動物と軟体動物について「構成の一致」を証明したというのである。

ジョフロアによれば、個別の記述にこだわる古い方法では一般性のある提言を得るのは偶然でしかないが、新しい方法では事実の確認とともに得ることができる (p.40)。メーラン論文は「有機的構成の一致という自然の普遍的法則」(*l'universelle loi de la nature, l'unité de composition organique*, p.49) を証明したのであるという。

『動物哲学原理』ではこの「報告」の後に、キュヴィエの抗議によってアカデミーの集会では読み上げられなかった草稿の結論部分を掲載している (pp.50-52)。まず、出典を明示することなく頭足類についてのキュヴィエの論文 (1817) から、頭足類の独自性を強調する文を引用し、そのように差異に集中して「動物界の目録」(*le Tableau du règne animal*) を作成するのは「フランスの成果」である。しかし、今日では「生物の哲学的類似性の知識」(*la connaissance de la ressemblance philosophique des êtres*) が動物学の目的になっているという。

この最初のジョフロア講演を見るだけでも、この論争の本質は個別と一般との対比であることが明らかではないだろうか。

4) 1830年2月22日、キュヴィエ第一講演

ジョフロアの最初の講演の翌週、キュヴィエは「軟体動物についての考察、とくに頭足類について」と題した講演でジョフロアに反論した。『動物哲学原理』では、講演翌日に日刊紙『論争新聞』(*Journal des Debats*) に掲載された講演要旨を転載している (pp.53-72)。

キュヴィエによれば、彼の35年間の研究により頭足類の独自性が確認されている。脊椎動物との「構成の一致」は認められない。そもそも、ジョ

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

フロアの説く「構成の一致」と「プランの一致」については厳密な定義が必要であると迫る。アリストテレス以来、動物学の基礎は「生存の条件」であったという。

キュヴィエはメーラン論文の誤りを示すために2点の図を用意していた²⁹⁾。一つは反りかえった四足獣の断面図で、他の一つはタコの断面図である。キュヴィエは豊富な知識を駆使して両者の違いを指摘し、「構成の一致」は認められないという。

結論としてキュヴィエは、動物学に法則を持ち込むのは「空しい一般化」(de ces oiseuses généralisés, p.72) であると決めつけている。

なお、『動物哲学原理』にはジョフロアによる脚注が付記されている。その総分量はキュヴィエの講演本文に匹敵し、キュヴィエの批判に反撃している。「生存の条件」についての脚注 (p.66) では、「生存の条件」は結果を原因に置き換えているにすぎないという。

5) 1830年3月1日 ジョフロア講演

キュヴィエの厳しい批判の翌週、ジョフロアは「アナログ理論について」(pp.81-108) というタイトルで応じた。その冒頭で、感情的にならず冷静に議論を進めたいと述べているが、当然のことを長々と述べているのは、双方とも感情的になっていることを示している。

本論ではまず、アナログ理論の成立過程を語っているが、ジョフロアは繰り返し、博物館の標本という「事実自体の比較研究」(p.93) によって着想したという。諸思想の影響を否定するのは理論の独創性を強調するためといえよう。

「構成の一致」と「プランの一致」という用語についてのキュヴィエの批判に対し、ジョフロアは両者とも厳密な表現ではなく、「有機的部分の構成と配置のシステムの一致」(unité de système dans la composition et

l'arrangement des parties organique, p.87) という趣旨の略称であるという。さらに脚注 (pp.86-87) では、辞書の語義によって「構成の一致」と「プランの一致」を批判するのは不当であると反論し、両者とも研究の指針としてなんら混乱をもたらすものではないという。

ジョフロアの研究成果はアリストテレス主義にすぎないというキュヴィエの批判に対し、ジョフロアは反論する。アリストテレスは個々の形態と機能に注目するが、「形態は種によって変化しやすく、機能はさらに変化しやすい」(p.95) という。アリストテレス主義との違いを3項目にまとめている (pp.97-98)。第一に、アナログ理論では個々の形態と機能に注目することを禁止している。第二に、アナログ理論は研究の指針である。第三に、アナログ理論では器官の全体の類似性ではなく、器官を構成する材料に注目する、という。

最後にジョフロアはアナログ理論の成果の実例として、ヒトとネコの舌骨について語っている。ヒトの舌骨は5骨片から成るが、ネコでは9骨片である。この違いはヒトの直立姿勢に由来するもので、失われた4骨片の痕跡も確認できるという。

今回のジョフロア講演では論争のきっかけとなったメーラン論文について一言も触れていない。当然、批判されることになろう。

6) 1830年3月22日 キュヴィエ第二講演

科学アカデミーの3月8日と3月15日の月曜集会では両人の講演がなく、聴衆をがっかりさせた。3月22日にキュヴィエの第二講演によって論争が再開された。第一講演と同様、『動物哲学原理』では日刊紙『論争新聞』に掲載された講演要旨を転載している (pp.139-162)。講演は「舌骨についての考察」というタイトルのもとで行われた。『論争新聞』では、第一講演についてはキュヴィエの原稿をそのまま掲載しているが、第二講演に

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

については記者による要約とキュヴィエの言葉とが入り混じって掲載されている。第二講演では舌骨に関する専門的な比較形態学的記述が多く、新聞紙上ではその多くが省略されているのである。

キュヴィエはまず、ジョフロアのいう「構成の一致」と「プランの一致」とが依然としてあいまいであると指摘し、そのような一般的な表現を信用するのは「事実についてなにも知らない人々だけだ」(p.147) という。

キュヴィエ講演の中核は、脊椎動物の舌骨の多様性を例示してアナログ理論の虚しさを説くことにあった。ジョフロアはキュヴィエの本文に匹敵する分量の脚注で反論しているが、このような具体例になるとキュヴィエの方が優勢である。

7) 1830年3月22日 ジョフロア講演

3月22日の集会でキュヴィエの後に講壇に立ったジョフロアにはキュヴィエの講演への反論は許されず、用意した原稿を読み上げるだけだった。『動物哲学原理』では二人の発表順序を逆にして掲載している。

ジョフロアの講演「アナログ理論：魚類の体制への適用について」(pp.109-138)では最初に頭足類を扱わないことについて弁明し、頭足類の研究は遅れているので、まず研究の進んでいる魚類について考察するという。

アナログ理論はアリストテレス主義の延長にすぎないという批判に対しては、エジプト遠征以来の研究歴を語って応えている。1817年に鰓蓋骨と耳小骨の関係に気づき、アナログ理論の正しさを確信したという。最後に、古い解剖学を捨てて新しい道を切り開くべきではないかと述べて講演を締めくくっている。

8) 1830年3月29日 ジョフロア講演

ジョフロアは3月29日の集会で、1週間前のキュヴィエ第二講演に対す

る反論「舌骨について」(pp.163-190)を展開した。

ジョフロアはキュヴィエとの対立を融合させようとする動きのあることを指摘する。それによると、一方は「差異性の観点から事実」(les faits dans le caractère de leurs différences, p.164)を追求し、他方は「類縁性」(le caractère de leurs rapport)から追及している。この両者を併用すべきだということである。ジョフロアはこの見解を断固として拒否する。ジョフロアは事実にこだわっているのではなく、多様な事実の背後にある共通性に注目しているのである。キュヴィエが示した舌骨についての事実は認めるが、アリストテレス主義かアナログ理論かという「哲学」に違いがあるという。ジョフロアの以前の研究にいくつか誤りのあったことは認めるが、アナログ理論はドイツ自然哲学やセルの発生学、さらに奇形の研究によって発展しているという。

最後は「結論」(Réflexions diverses et dernières. p.184)という小見出しの下で講演を締めくくっている。その冒頭に、誤った事実に基づいて築かれた正しい理論の例として、ビュフォンの生物分布論、ラヴォアジエの発酵論、それとラマルクの進化論を挙げ、さらに脚注(pp.185-186)でモンテーニュの奇形論を長々と引用している。ジョフロアの示す事実に誤りがあったとしてもアナログ理論の正しさは揺るがないと主張しているようである。

ジョフロアによればキュヴィエ説は個別の記述に過ぎない。普遍的で哲学的なジョフロアの立場こそ新時代の科学である。かつてパリ植物園ではリンネが尊敬され、ビュフォンは軽視されていたが、いまやビュフォンの『自然史』が広く読まれているという。いずれキュヴィエの時代が終わり、ジョフロアの時代が来ると宣言しているといえよう。

この「結論」はジョフロアによる論争全体の締めくくりとあってよい。論争におけるジョフロアの講演はこれが最後であった。

ジョフロア＝サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

このアカデミー論争の最後となったのが、4月5日のキュヴィエ第三講演であった。これも翌日の『論争新聞』に掲載されているが、『動物哲学原理』には収められていない。講演は「舌骨についての考察の続編」というタイトルのもとで行われ、第二講演と同様、脊椎動物における舌骨の多様性を列挙し、アナログ理論の非を説いている。

9) 新聞記事

『動物哲学原理』では最後に2点の新聞記事を収録している。最初は日刊紙『ル・タン』(*Le Temps*)の1830年3月5日の解説記事で、『動物哲学原理』では「第一の要約」というタイトルで掲載されている。『ル・タン』の記事では、ジョフロアの新しい動物学が注目されているがキュヴィエがこれに反対していると指摘する。2月22日のキュヴィエ講演と3月1日のジョフロア講演を要約し、今後の論争の経過を見守りたいという。公平な立場をとっているように見えるが、ジョフロアに好意的である。

二つ目の新聞記事は日刊紙『ル・ナチオナル』(*Le National*)の1830年3月22日の解説記事である。『動物哲学原理』では「第二の要約」というタイトルを付している。『ル・ナチオナル』紙は明確にジョフロア支持を表明している。七月革命を推進したりベラル派の拠点として知られる同紙がジョフロア支持をしていた。当時のパリ市民にとってアカデミー論争は科学論争に止まらず、政治的な意味も持っていたことを示唆するものである。

『ル・ナチオナル』の記事の最後にアナログ理論の先取権の問題を取り上げ、少なくともフランスではジョフロアが誰よりも早く、1796年にその骨子となる思想を公表していたと指摘している。ジョフロアはこの箇所に付した長文の脚注で、同年の原猿類についての論文から「プランの一致」を説く文を引用している。ジョフロアも先取権の問題に神経をとがら

せていたのである。

10) 論争の歴史的意義

ラッセル (Edward Stuart Russel) の『形態と機能』³⁰⁾ 以来, 上記のアカデミー論争をジョフロアの形態論とキュヴィエの目的論との論争とする解釈が定説のようにになっている。アペルはこの説に疑義を唱えながら, 「便宜的にこの説を採用する」(Appel, p.6) といい, 結局はラッセル説を広めている。ゲールドもこの解釈に従っている³¹⁾。

グリーン (Marjorie Grene) は, アカデミー論争を形態と機能との対立と見るのは単純に過ぎるとしてラッセル説を退け, ジョフロアが重視したのは動物界における普遍性であり, それがアユイの結晶論に由来する「構成の一致」であったという³²⁾。

上述した論争の経過を見ても, 当事者の二人が形態論と機能論との対立と意識していた気配は皆無である。すでに指摘してきたように, この論争は, 動物学が自然史に止まるべきか, 自然哲学に脱皮すべきかの対立であった。

8. おわりに

ジョフロアはアユイ家で学んだ物理科学に刺激され, 動物学に転じた後, 自然哲学としての生物学の樹立に意欲を燃やすようになった。「アナログ理論」という先進的な結果を生む一方, 昆虫・脊椎動物説のようなトンデモ説も唱えていた。これは時代に先駆けたための行き過ぎといえよう。ジョフロアの後, 細胞説, 進化論, そして遺伝学が樹立され, 生物界における普遍性が次々と明らかになり, 自然哲学としての「生物学」が確立した。ジョフロアの「プランの一致」は, 19世紀に「生物学」が成立するための重要な一歩であった。

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

本稿ではジョフロア本人の業績をたどってその歴史的意義を考察したが、同時代のドイツ自然哲学との関係には触れなかった。アカデミー論争の社会的背景についても省略した。また、医学生時代のダーウィン (Charles Darwin) がジョフロアに学んだエジンバラ学派から受けた影響や、ジョフロアの「プランの一致」論がミルヌ・エドヴァールとオーエン (Richard Owen) を介してダーウィンの進化理論形成に決定的な影響を及ぼしたことも言及しなかった。こうした問題には改めて取り組みたいと思う。

注

- 1) 本稿では以降、エチエンヌ・ジョフロア = サンチレールを「ジョフロア」と略記する。ジョフロアの単著作品については文献注での著者名の記載を省略した。
- 2) Toby A. Appel, *The Cuvier-Geoffroy debate: French biology in the decades before Darwin*. Oxford UP, 1987. 下記の邦訳も刊行されている。西村顕治訳『アカデミー論争：革命前後のバリを揺がせたナチュラリストたち』時空出版, 1990. しかし、原書 (p.126) で高く評価する子イシドールの著書『奇形学』を父エチエンヌの著書と誤認している (p.298)。“In France” (p.222) を「イギリスでは」 (p.228) と訳している。巻末付録の “the Collage de France” (p.241) を「理学部」 (p.413) と訳しているなど、致命的誤訳が少なくない。同書からの引用は原書によらなければならない。本稿では同書からの引用を、(Appel, p.1) という形で記す。
- 3) Hervé Le Guyader, *Étienne Geoffroy Saint-Hilaire 1772-1844: un naturaliste visionnaire*. Belin, 1998. 本稿における同書からの引用は、すべて下記の英訳版からである。
- 4) Hervé Le Guyader (translated by Marjorie Grene), *Étienne Geoffroy Saint-Hilaire 1772-1844: a visionary naturalist*. U of Chicago P, 2004. 同書からの引用は、(Guyader, p.1) という形で記す。
- 5) ジョフロアの生涯と業績については息子イシドールの下記の著作が基本になっており、Appel も多くを同書によっている。Isidore Geoffroy Saint-Hi-

- laire, *Vie, travaux et doctrine scientifique d'Étienne Geoffroy Saint-Hilaire*. 1847. 同書からの引用は、(*Vie*, p.1) という形で記す。
- 6) Franck Bourdier, "Geoffroy Saint-Hilaire, Étienne," DSB, Vol.5 (1972), 353-358. p.353.
- 7) 動物解剖学教授のメルトリユは Jean-Claude Mertrud (1728-1802) のことであり、その息子の Antoine Louis Francois Mertrud (Appel, p.17) とみなしているのは間違いであるという (Guyader, p.258. n6)。
- 8) "Mémoire sur les rapports naturels des Makis Lemur, L. et description d'une espèce nouvelle de mammifère," *Magasin encyclopédique*. 1 (1796) 20-50.
- 9) "Premier mémoire sur les poissons, où l'on compare les pièces osseuses de leurs nageoires pectorales avec les os de l'extrémité antérieure des autres animaux à vertèbres," *Annales du Muséum d'histoire naturelle*. 9 (1807) 357-372. BHL; "Seconde mémoire sur les poissons. Considérations sur l'os fruculaire, une des pièces de la nageoire pectoral," *ibid.* 9 (1807) 413-427; "Troisième mémoire sur les poissons, où l'on traite de leur sternum sous le point de vue de sa détermination et de ses forms générales," *ibid.* 10 (1807) 87-104.
- 10) *Philosophie anatomique, I. Des organes respiratoires sous le rapport de la détermination et de l'identité de leurs pièces osseuses*. Méquignon-Marvis, 1818. 通常、『解剖哲学』1818年版は「第1巻」と呼ばれており、復刻版ではそのように記されていることもあるが、元の版にはそのような記載はない。しかし便宜上、本稿でも「第1巻」の表現を用いる。
- 11) 松永俊男『博物学の欲望：リンネと時代精神』講談社現代新書 (1992) 8-9.
- 12) *Philosophie anatomique, II. Monstruosités humaines*. Imprimerie de Rignoux, 1822. Numelyo.
- 13) Isidore Geoffroy Saint-Hilaire, *Histoire générale et particulière des anomalies de l'organisation chez l'homme et les animaux... ou traité de tératologie*. 3 vols. J. B. Bailliére, 1832-1837.

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

- 14) 「形成力」はブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach) の用語だが、ジョフロアはやや異なる意味で借用している (Appel, p.270. n85)。
- 15) この三講演は『医科学辞典補足雑誌』に順次、掲載された。同誌の第5巻には発行年が“1819”と記載されているが、実際の発行年は1820年のはずである。なお、この三論文は他の複数の雑誌に転載されており、資料によっては別の掲載誌が記載されている。“Mémoires sur l'organisation des insects. Premier mémoire sur un squelette chez les insectes don't toutes les pièces, identiques entre elles dans les divers ordres du système entomologique, correspondent à chacun des os du squelette dans les classes supérieures,” *Journal Complémentaire du Dictionnaire des Sciences Medicales*. 5 (1819) 340-351; “Seconde mémoire, sur quelques règles fondamentales en philosophie naturelle,” *ibid.* 6 (1820) 31-36; “Troisième mémoire, sur une colonne vertébrale et ses côtes dans les insectes apiropodes,” *ibid.* 6 (1820) 138-168.
- 16) P. A. Latreille, “De la formation des ailes des insects, et de l'organisation extérieure des ces animaux, comparée, en divers points avec celles des arachnids et des crustacés,” 1-21. ジョフロア第二論文の脚注 (p.31) によると、この論文は他の論文と合わせて44ページの日付の無いパンフレットとして刊行された。
- 17) “Considérations générales sur la vertèbre,” *Mémoires du Museum d'Histoire Naturelle*. 9 (1822) 89-119.
- 18) S. J. Gould, “Geoffroy and the Homeobox,” *Natural History*, 94 (November, 1985). 12-23. 邦語文献の例に下記がある。倉谷滋『形態学』丸善出版, 2015. 9-21.
- 19) Bill Jenkins, *Evolution Before Darwin: Theories of the Transmutation of Species in Edinburgh, 1804-1834*. Edinburgh UP., 2019. pbk, 2021. 115-118.
- 20) “Recherches sur l'organisation des Gavials. Sur leurs affinités naturelles, desquelles résulte la nécessité d'une autre distribution générique, *Gavialis*, *Teleosaurus* et *Steneosaurus*; et sur cette question, si les Gavials (*Gavialis*),

- aujourd'hui répandus dans les parties orientales de l'Asie, descendent, par voie non interrompue de génération, des Gavials antdiluviens, soit des Gavials fossiles, dits Crocodiles de Caen (*Teleosaurus*), soit des Gavials fossils du Havr et de Honfleur (*Steneosaurus*)," *Mémoires du Muséum d'Histoire Naturelle*. 12 (1825) 97-155. BHL.
- 21) 現在の分類学ではテレオサウルスとステネオサウルスは同じテレオサウルス科に属するとされており、ジョフロアが認定したほどの違いはないとされている。また、テレオサウルス科とガビアル科とは系統的に離れており、テレオサウルス科がガビアル科の先祖系であったとは考えられていない。
- 22) Geoffroy Saint-Hilaire et Serres, "Rapport fait à l'Académie royale des Sciences, sur un Mémoire de M. Roulin, ayant pour titre: Sur quelques changemens observés dans les Animaux domestiques transportés de l'ancien monde dans le nouveau continent," *Mémoires du Muséum d'Histoire Naturelle*. 17 (1828) 201-208. BHL. 刊行年が"1828"と記載されているが、実際には1829年に発行されているため、王立協会『科学文献目録』などでは1829年の論文として記載されている。本稿でもこの二論文を1829年論文と呼ぶことにする。
- 23) "Mémoire où l'on se propose de rechercher dans quels rapports de structure organique et de parenté sont entre eux les animaux des âges historiques, et vivant actuellement, et les espèces antédiluviennes et perdues," *ibid.* 17 (1828) 209-229.
- 24) *Recherches sur de grands sauriens trouvés à l'état fossile vers les confins maritimes de la Basse-Normandie, attribués d'abord aux crocodile puis déterminés sous les noms de Teleosaurus et Steneosaurus*. Firmin Didot Frères, 1831; "Divers Mémoires sur de Grands Sauriens," *Mémoires de l'Académie des sciences*. 12 (1833) 3-138.
- 25) "Quatrième mémoire. Le degré d'influence du monde ambiant pour modifier les formes animales; question intéressant l'origine des espèces téléosauriennes et successivement celle des animaux de l'époque actuelle," *ibid.* 63-92.

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

- 26) “Paleontographie,” *Revue Encyclopédique*. 59 (1833) 76-93. Google Books.
- 27) *Principes de philosophie zoologique, discutés en mars 1830 au sein de l'Académie royale des sciences*. Pichon et Didier, 1830.
- 28) Laurencet et Meyranx, “Quelques considerations sur organisation des mollusques.” この論文は出版されることなく、稿本も現存しない。主たる執筆者はメーランであり、ローランセについてはファーストネームも不明である (Appel. p.145)。本稿ではこの論文をメーラン論文と呼ぶことにする。
- 29) この図は『動物哲学原理』には掲載されていない。雑誌『自然科学年報』第19巻にキュヴィエ講演が掲載され、雑誌巻末に彩色された図が添付されている。M. le baron Cuvier, “Considerations sur les Mollusques, et en particulier sur les Céphalopods,” *Annales des sciences naturelles*, 19 (1830) 241-259. BHL.
- 30) E. S. Russell, *Form and function: a contribution to the history of animal morphology*. John Murray, 1916.
- 31) Stephen Jay Gould, *The structure of evolutionary theory*. Harvard UP, 2002. 281-312.
- 32) Marjorie Grene, “Darwin, Cuvier and Geoffroy: Comments and Questions,” *History and Philosophy of the Life Sciences*. 23 (2001) 187-211. pp.189-190.

Biological Thought of Geoffroy Saint-Hilaire: Historical Significance of the “Unity of Plan”

MATSUNAGA Toshio

Étienne Geoffroy Saint-Hilaire (1772–1844) was appointed in 1793 as one of the professors of zoology at the newly constituted Muséum National d’Histoire Naturelle in Paris. Before this time, Geoffroy was a close associate of René Just Haüy, the father of modern crystallography, and wanted to become a mineralogist. Geoffroy attended meetings at Haüy’s lodgings of leaders of the physical sciences, Lagrange, Lavoisier, Laplace, and Berthollet. Geoffroy’s interest in the physical sciences continued throughout his life. His zoological thought was strongly affected by the physical sciences.

In those days, the natural sciences were divided into natural history and natural philosophy. “History” was the science of description, and “philosophy” was the science of theoretical analysis based on principles. The standard model of natural philosophy was Newton’s *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica* (1687). Geoffroy intended to transform zoology from history to philosophy.

The opening lines of Geoffroy’s article on lemurs (January 1796) read as follow. “Une vérité constante pour l’homme qui a observé un grand nombre des productions du globe, c’est qu’il existe, entre toutes leurs parties, une grande harmonie et des rapports nécessaires; c’est qu’il semble que la nature s’est renfermée dans de certaines limites, et n’a forme

ジョフロア = サンチレールの生物学思想：「プランの一致」の歴史的意義

tous les êtres vivâns'que sur un plan unique.”

From the early days of his zoological studies, Geoffroy stated the principle of the “unity of plan.” It would be the effect of the physical sciences at Haüy’s lodgings. In his main work *Philosophie anatomique* (1818), his conception of the unity of plan was crystallized as the theory of analogue. This work was broadly acknowledged as opening a new field in comparative anatomy.

Georges Cuvier (1769–1832), a colleague of Geoffroy, had a different view on zoology. He emphasized the descriptions of individual facts. He denied the existence of universal principles in zoology.

In 1830, a famous debate took place between the two zoologists at the Académie des Sciences in Paris. After the debate, Geoffroy published *Principes de philosophie zoologique* (1830) containing a transcript of the debate. From this work, we can know the progression of the debate.

Geoffroy asserted that zoology must change from Cuvier’s old method to Geoffroy’s new method. Cuvier, on the other hand, denied the value of Geoffroy’s theory of analogue. The main theme of the debate was Cuvier’s zoology as natural history versus Geoffroy’s zoology as natural philosophy.

E. S. Russell stated in his work *Form and function* (1916) that the main theme of the debate was Cuvier’s functionalism versus Geoffroy’s formalism. Toby A. Appel’s *The Cuvier-Geoffroy debate* (1987) and Stephen Jay Gould’s *The structure of evolutionary theory* (2002) accept Russell’s interpretation. However, this interpretation is unjustifiable.

In the nineteenth century, the universal principles of living things were discovered in the cell theory, the evolutionary theory and genetics.

Thus, biology as a natural philosophy was established. Geoffroy's "unity of plan" was the early effort in this progress.

大正教養主義の二世たち

——安倍能成と野上彌生子 その2——

高 田 里 恵 子

北軽の父と息子

北軽井沢の山荘で風呂の焚き付けをしている安倍能成（1883～1966）の写真がその特集の先頭に置かれている。『新潮』1958年10月号の「文学・軽井沢」という特集である。前年8月の軽井沢を舞台とした「テニスコート」以来、軽井沢はますます注目を浴びていたと思われる。明仁皇太子の教育参与でもあった安倍学習院院長が冒頭に登場しているのも理由なしのことではなかったのだろう。それに、院長は一応、大正教養主義時代からの老哲学者ということにもなっているから、「文学」という看板にもふさわしい。

もっとも、安倍の別荘が建つ北軽井沢、しばしば北軽と呼ばれるこの地は群馬県吾妻郡にあり、本物（？）の長野県軽井沢のハイソサエティとは違うのだというのが、北軽の住人の誇らかな自己理解であったらしい。風呂の焚き付け口の前に座りこんだ庶民的な写真を撮らせたこと自体がそのあらわれであろうか。「この村には金持の別荘もあるか知らぬが、多くの持主は大抵我々程度のものらしく、別に富力の圧迫を感じることもない」¹⁾

キーワード：教養主義、北軽井沢・大学村、七年制高等学校、安倍能成、野上彌生子

とは、1933（昭和8）年の安倍能成の言葉である。安倍の長男である安倍亮（1914～1945）も、北軽から友人に宛てた手紙（1937）のなかでこう言う。「うちはこの村で一番端の辺鄙な所にあるので、あまり人の家には行きません。ここは知人が多くて行けば行く所はいくらでもあるのですが、吾々程度のプチブルインテリの別荘が二百軒ばかりあります」²⁾。

実際、安倍家のなかで一番多くの時間を北軽井沢で過ごしていたのは、この亮だった。「けれども北軽井沢行は結局は子供の健康の為である」³⁾と父親が言ったように、長男は北軽の自然のなかで療養的な生活を過ごすことが多かったのである。安倍亮は東京高校（現・東京大学教養学部）在学中の1931年に咯血して以来、休学や療養をはさみながら東京帝国大学数学科を卒業し、東京文理科大学（現・筑波大学）の助教授になっていたが、戦中の食糧難や大学疎開に伴う過労のために病状が急速に悪化し、敗戦直後の10月に若い命を落とす。苦難と欠乏のなかで息子を死なせてしまったことを、父は何度も自責している。

本稿では副題にもあるように安倍能成と野上彌生子（1885～1985）を中心として彼らの子どもたち、つまり大正教養主義の二世たちのありようを見ていくつもりである。親の世代がいわゆる「煩悶青年」世代ならば、子どもたちのほうはマルクス主義の衝撃と戦争の嵐をまともに受けた世代である。

だが、いまはもう一度北軽の別荘地に戻ろう。というのは、そこに辿りつくまでに話は少々回りくどくなってしまうのだが、先取りして言っておけば、この北軽は、大正教養主義の二世たちの交際が展開された場所だったからである。

再び、北軽の父と息子

『新潮』の特集で北軽井沢の別荘としてもう一つ紹介されているのが、詩人の岸田衿子（1929～2011）の家である。正確に言えば父親の劇作家岸

大正教養主義の二世たち

田國士（1890～1954）の山莊となろうか。そして衿子とともに写真におさまっているのが、岸田邸の客となっている大江健三郎（1935～2023）である。この年（1958年）の7月に芥川賞をとったばかりの、まだ東大仏文科在学中の学生作家だ。大江も、北軽があゝの軽井沢とは性質を異にすることに触れずにはいられない。「軽井沢では舞踏会に出たり、馬に乗って疾走したり、ロシア料理店にすわっていたりする手があるけれども、浅間牧場の向う、暗い夜の北軽ではそういうわけにはゆかない」⁴⁾。

大江自身ものちにここに自分の別荘をもつことになるが、そのきっかけとなったのが長男の誕生だった。大江の小説やエッセイのなかには、障がいをもって生まれた長男と北軽井沢の自然のなかで共生するようすがしばしば登場するだろう。「北軽の夏」は、その長男大江光が作曲した清らにも寂しげな、「暗い夜の北軽」にふさわしい曲である。

ところが、2005年に発表された大江の小説『さようなら、私の本よ！』は、かくも思い出深い北軽の山莊がテロリストたちに「破壊」されるという内容をもつ。一旦は断筆を宣言した作家は、義兄で奇妙な親友でもあった伊丹十三（1933～97）の自殺のあとに再び書きはじめた小説のなかで、「長江古義人」なる老小説家を主人公に据え、自分自身の過去の小説の自己引用、自己パロディ、自己アイロニー、自己解体のような作業に取りくむ。北軽の山莊もまた当然、その対象とされなければならないというわけなのか。『憂い顔の童子』（2002）では、こんな皮肉っぽい台詞を登場人物に言わせている。「〔北軽は〕大学教師やその二世、三世の特権的な別荘地のようですが、まあ場違いの小説家を、そうした〔別荘の自治組織の二世〕役員が紹介している宣伝文です。いつもはコムズカシイことを書く長江古義人の印象一変、面白おかしい別荘談義」⁵⁾。

『さようなら、私の本よ！』のなかにも、「戦前に法政大学の関係者が組合を作って造成したことから大学村と呼ばれる別荘地」⁶⁾をからかうよう

な言葉が時々出てくる。老作家はこの「特権的な別荘地」のなかで、なぜかハズレ者意識をもってしまっているらしい。大学村恒例の夏の花火大会でも誰も老作家に挨拶してくれないし、改装のために（実は爆破のために）醜い足場が組まれた山荘には冷ややかな視線が注がれていると老作家は思っているのだ。「ぼく自身はシゲがこの家に張りめぐらした足場を、そう嫌ってもいない。大学村の二代目、三代目住民の、保守的な気分を逆撫でしてはいるだろうが……」⁷⁾。

一高村？ 彌生子村？

大江健三郎が小説のなかで書いているように、北軽の別荘地は、1927（昭和2）年に法政大学学長松室致（1852～1931）が私財を投じて開発しはじめたもので、最初は法政大学村と呼ばれた。松室学長の懐刀として法政大学の教育の充実に努めた野上豊一郎（1883～1950）は、この別荘地の発展にも大いに貢献した。当時法政大学の予科長であった野上は教職員だけでなく、自分の知人たちにも土地の購入をすすめ、一高時代の友人や文化人たちが次々にこの北軽にやって来たのである⁸⁾。法政大学村は、行政とは関係のない村長や村会議員をもつ独特の自治組織になっており、こうした自由なコミュニー的性格もまたインテリたちを引きつけたのだろう。

とりわけ、一高の同級生だった（正確に言えば野上の学年に落第してきた）岩波茂雄（1881～1946）は北軽の荒々しい自然が気に入り、岩波書店の著者たちを呼びこんだ。安倍能成も野上の一高同級生だが、1932年ころから夏休みを北軽で過ごすようになり（すでに述べたように長男の療養を兼ねていた）、1937年には自分の山荘を手に入れている。

こうして法政大学村というには法政大学関係者以外の別荘所有者が多くなっていき、安倍が山荘を得た1937年に大学村と名称を変えた。なかなかよい名前であろうが、しかし一高村、岩波村、教養主義村、あるいは大

大正教養主義の二世たち

正デモクラシー村とでもいうほうが「特権的な別荘地」の成り立ちと性格をさらによくあらわしたかもしれない。野上豊一郎は、本物の軽井沢からひょっこり遊びにきた寺田寅彦（1878～1935）から「君たちの村はえらい人ばかりいるようだね」⁹⁾と皮肉られたと苦笑している。

女優の岸田今日子（1930～2006）、つまり岸田國士の二世というわけだが、彼女はこんなふうには北軽を語っている。「この村に、わたしは赤ん坊の時から夏になると連れてこられた。そしてたくさんの魅力的な、個性的な大人たちに出逢った。よく父の影響を聞かれるけれど、そういう方たちの傍にいられたことが一番大きな遺産かもしれない。〔中略〕大学の先生やそのお友だちが中心だから、なかなかうるさい人もいたらしい。有名な歌舞伎役者が村に入りたと言ってきたら、役者は派手で村風に合わないと思われたという話もある。午前中は勉強時間だからお互い訪問しないとか、道で逢ったら知らない人でも挨拶するとか、いろんな約束が最近まで生きていた」。

そしてこうした「特権的な別荘地」のヌシというべき人物がいたと。もう少し続けて岸田今日子のエッセイから引用しよう。「九十九歳で亡くなった野上彌生子さんは村の中心的存在で、皆が代る代る表敬訪問する。わたしも真似をして、父が死んでからは一人で行ったり、友だちと連れ立って行ったこともある」¹⁰⁾。

1978年、大学村50周年を記念して野上彌生子は「名誉村民」になったそうだが、実際彼女は夫の豊一郎とともにさまざまな人を北軽に呼びよせ、そして大江健三郎の言うところの「大学村の二代目、三代目住民」を幼いころから見守ってきた。たとえば、法大教授であった哲学者の谷川徹三（1895～1989）の息子の詩人谷川俊太郎（1931年生まれ）や岸田姉妹とか。

彌生子は自身の息子たちが大きくなってからは、夏休みを過ぎても、あるいは夏がはじまる前から北軽に一人で滞在し執筆に励んだ。戦時中は疎

開というかたちで北軽に住み、厳冬を乗り越えた。夫の死後は、安倍能成の揮毫した扁額「鬼女山房」を座敷に掲げた離れの一室に陣取った。彌生子の小説やエッセイ、とりわけ死後公開された膨大な日記においても北軽が大きな位置をしめることは夙に指摘されている。何より、哲学者田辺元(1885～1961)との晩年の大(プラトニック)恋愛の舞台も北軽だった。

野上家と、いや彌生子と北軽との深い関係を考えると、ひょっとすると彌生子村というのが最もふさわしい名称かとも思えてくる。1998年の『大学村七十年誌』の編集委員長は彌生子の三男、大江の言う「二世」が務めている。もっとも、この「大学村七十年祭」のメインイベントは、いまやノーベル賞作家となった大江健三郎の講演「北軽の光と私」と大江光の曲の演奏会であったが¹¹⁾。

野上の小母様

『さようなら、私の本よ!』では、北軽の野上彌生子と思しき作家の思い出も語られる。

あの家の裏側の書斎から、長老の女流作家がね、ほくとアカリが溪流の岸の草場にしゃがみ込んでいるのをよく見ると、編集者にいわれたらしい。ほくはアカリに食べさせるヤマメをそこの深んどで毎日一尾釣ったし、アカリはFMのクラシック番組を聞いてたんだ。上から見おろすと、思い屈した若い親子、というふうだったろうね。

——評論家の迂藤が、コギーは六隅さんの死後、その長老の家に入出入りしている、上流の家にあこがれているんだと、この国特有のザダンカイでしゃべっていた。

——ほくは先輩であれ同輩であれ、小説家や詩人を個人的に訪ねることはしない、と古義人はいった。あの家にうかがったことはないし、

東京のお宅にも新年企画で新聞社に連れて行かれたことがあるきりだ。迂藤は、戦前の上流意識を持ち続けている点、ミシマと同類だったね¹²⁾。

この話が事実に基づいていることは、『世界』（岩波書店）に発表された、大江の野上彌生子追悼文のなかの記述で確かめられる。「野上彌生子さん百歳のお祝い」パーティの控室では、「あなたのお子さんのことはたびたび考えています」という言葉までかけられたのだという¹³⁾。大江は北軽仲間として彌生子の告別式の司会を務めた。

「迂藤」とは江藤淳（1932～99）を指すが、江藤は大江流に、あるいは『世界』流に彌生子が「進歩的」作家へと歪められていることに異議を唱えた。彌生子の告別式には出席しなかったと江藤は言う。「それはなんだか未知の、進歩的、老女流作家の葬儀で、私の知っている、野上の小母様、のお葬式ではなさそうに思われた、というのがその理由である」¹⁴⁾。

江藤は、時期的にちょうど彌生子の死の直後に行なった、蓮實重彦（1936年生まれ）との対談のなかでも「お書きになるものは確かに進歩的で、オーソドックスな左翼だった。けれども、その文化はやはりブルジョワジーに根ざした生活様式から出てきている」¹⁵⁾と発言している。大江の小説で「六隅」と言われているのは、大江の東大時代の恩師で仏文学者の渡辺一夫（1901～74）のことだが、大江の渡辺一夫讃歌についても、渡辺（や江藤や蓮實）のような東京育ちのブルジョアがもつ独特の保守性や意地悪さが見落とされていると江藤は述べて、対談相手の蓮實と大いに盛りあがっている¹⁶⁾。

「野上の小母様」という山の手風の呼び方は、江藤の叔母が彌生子をそう呼んでいたので、江藤も受け継いだのだという。叔母は、日本人初の東大英文科教授となった市河三喜（1886～1970）の次男（結局戦死してしま

うのだが)と婚約しており、市河の長女が彌生子の三男と結婚したこと、その長女と叔母が東京女子大での仲よし同級生であったことなどから、「野上の小母様」と親しく呼ぶようになったのだろう、と江藤は推測する。いづれにしる、閨閥やら何やらを並べたてる江藤の口吻が「戦前の上流意識」臭をプンプンさせていることは、大江の言うとおりでであろう。

市河三喜も野上や安倍の一高同級生であり、したがって北軽の住人である。ただ、彌生子の親しい友人でもあった、三喜の妻は、父として穂積陳重を、祖父として渋沢栄一をもつので、本物の軽井沢のほうにふさわしいのかもしれない。ともかく、三男の結婚によって近代日本の特権的一族と野上家はつながったと意地悪く見られもするわけだが、しかし「野上の小母様」にとっては、市河家の長女は何よりもまず、北軽で小さい時からかわいがってきた少女たちの一人であった。

「その思想は、進歩的、であり、その文学はあるいは左翼的なものであったかも知れないけれども、この老女の生活態度も言語動作も趣味も、それらは徹頭徹尾戦前の教養あるブルジョア階層に属していた」¹⁷⁾と追悼文でも繰りかえし述べる江藤淳なのだが、しかしこの点に関しては江藤のほうが決定的に正しい。というより、彌生子にたいする、むしろ行きわたっている批判である。

戦前から、「同伴者作家」野上彌生子の生ぬるい凡庸さは指摘されていた。野上彌生子の伝記を書いた岩橋邦枝は、彌生子の「左翼的」な短篇である「若い息子」(1932)にたいする川端康成の批評、「すべてはたいへんおだやかな常識づくめで、新聞記事の「左翼学生云々」の一行の見出しほどの刺激も、この作品はもっていないのある」という言葉を引用しながら、「彌生子の小説の特長と弱点を、ずばりとついた評である」と述べている¹⁸⁾。敗戦後の短篇「神様」(1947)については、中野好夫がこう文句をつけている。「自分の別荘地帯のプチブル生活を実に安易にいい気持で書いて、自分だけは

好い子になって除けておいて、日本人の欠点を非常にイージーゴーイングに批判ばかりしている。あれはいちばん不愉快でした」¹⁹⁾。安倍能成の冗談めかした彌生子評、「そうして安全な地位を保ちつつ、いわゆる進歩的な短い評論をぼつぼつとお出しになるところなどは、中々心憎い隅におけぬ婆さんです」²⁰⁾ などというのも、みなが心のなかで思っていることを、能成らしく無遠慮に公の席で口に出しただけなのであろう。彌生子畢生の大作『迷路』(1936～56)にしても、彌生子の筆が冴えわたっている部分が、主人公の左翼転向者の苦悩よりも、周辺のブルジョアたちの描写のほうにあることは、しばしば指摘されているところだ。

しかし何より重要なのは、野上彌生子の「進歩的」あるいは戦後民主主義的な発言よりも、「戦前の上流意識」を自由奔放に（特に日記のなかで）炸裂させている「野上の小母様」のほうがずっと独特の魅力と才能の輝きを放っていることなのである。すでに触れた岩橋邦枝の彌生子伝は、小母様の「狂気も神経衰弱もまったく無縁な健康優良児で、そのぶん鈍い」ありよう、「自分本位の思い込みの根強さ」、「長年の抜きがたい特権意識や差別感」、「ちょっとした発言や感想にエリート意識を発散させる」態度、「持ち前の強気な自己肯定と神経の粗さ」を生きいきと描きだしている²¹⁾。よく考えて見れば、大江父子にたいする言動にも、むしろ「野上の小母様」持ち前の「神経の粗さ」と「鈍さ」があわれているとも言えまいか。

こうして、若き学生作家を魅了した「暗い夜の北軽」は、晩年のノーベル賞作家が皮肉った「大学教師やその二世、三世の特権的な別荘地」の顔を前面に出してくる。さて、ここでようやく、戦前の北軽、大正教養主義の二世たちの集う場所に戻ることができるわけである。

息子たちは七年制高等学校へ

北軽は、安倍亮が言うところの「プチブルインテリ」たちの家庭を、夏の一か月か二か月一箇所に集めた場所だった。北軽では、普段はそうしばしば行き来できない、東京の各所に住んでいる者たちがご近所になる。「野上の小母様」は、こうして北軽に集まってくる、自分の息子たちを含めた若者たち、優秀で育ちのいい東京っ子、しかしさまざまな（主に左翼活動をめぐる）悩みを抱えた若い男性たちを心から愛したという。「小母さん〔彌生子〕の人物評論は、正邪、好悪の物差しが極めてはっきりしている。そして、親しいほど、また近いほど、概してきびしい。ただし、例外は若い人、特に男性。息子たちには特別甘い。中でもMは満点にちかい」²²⁾と、M（次男の茂吉郎）の旧制高校時代の同級生が証言している。

彌生子自身はこう言う。「一軒一軒が殆ど皆友だちか、親類か、知人かである北軽井沢の夏の家の生活では、子供たちもそれぞれのグループで、親子二代つづきの友だちとなり、仲間となっていた。〔中略〕父親たちの交遊もたいい高等学校時代からで、年頃からいっても彼等と同じくらいであったのが、子供たちまでその友愛と親睦を受けついで上、一年の一月か二月を、斯うして同じ場所〔北軽〕で過すのはなんと珍らしく、縁の深いことか、と私はしみじみ考え、なりたけよい小母さん役を引き受けようとした。〔中略〕全くみんなよい息子たちであった。学校の方も揃ってよく出来たし、性格もめいめい特色をもちながら、善良で、立派で、おやじ連より息子たちの方が上出来だ、という評判をえていた」²³⁾。

実際、彌生子の日記からも、安倍家、野上家、岩波家、市河家、それとやはり安倍の一高・帝大哲学科の同級生で、安倍の末妹と結婚した宮本和吉（1883～1972）の子どもたちが、夏の北軽で登山やハイキングをしたり、テニスをしたり、紅茶を飲んだり、夜はどこかの家でトランプ遊びに興じたり、議論しあったりする、「プチブルインテリ」風なようすが伺える。

大正教養主義の二世たち

この二世たちの交流が和やかに続いたのには、彌生子が書いているように、みな「学校の方も揃ってよく出来た」ということも一役買っていたと思われる。興味深いことに、彼らのほとんどはいわゆる七年制高等学校に進んでいる。彌生子の長男である野上素一（後に京都大学イタリア文学科教授）、息子たちのなかでは最年長にあたる素一は、府立一中（現・日比谷高校）に落ち、中学四年で旧制一高に落ち、その翌年に浦和高校に進むことになった。彌生子の日記からは、いくぶんイライラする母親の姿が浮かびあがるが、この経験もあってか、次男と三男は高校受験をしないで済む七年制に進学している²⁴。こうして、彌生子の次男 M と安倍亮が東京高校の同級生、岩波家の長男と安倍家の次男が武蔵高校で同級生となった。彌生子の三男や、亮にとっては従弟にもあたる宮本家の長男も東京高校。ついでに言っておくと、一高では少し学年が下になるが大正教養主義のエースたる和辻哲郎（1889～1960）の息子も武蔵高校尋常科に進学している。

七年制高校の中学校部分に相当する尋常科は当時、最難関と言われた中学校である。安倍亮の東京高校尋常科入学と同じ1926（大正15）年に府立一中に進んだ丸山眞男（1914～1996）はこう振りかえっている。「府立一中というと、いわゆる名門校ということになっているけれども、その当時、入るのがいちばん難しいのは七年制高校です。官立では東京高校、私立ではいくらかやさしくなるけれども、難しいのは武蔵高校、それから成蹊、成城が七年制高校でした。〔中略〕結局、ぼくは武蔵に落ちたから一中へ行ったのです。〔中略〕ただ、おふくろは昔風の学歴主義ですから、一中へ行くと一高（第一高等学校）へ行けるといっているので、一中——一高というコースを望んでいました」²⁵。

つまり、一高文化あるいは旧制高校文化の創始者のように見なされる大正教養主義者たちは（実際は彼らは一高の伝統にたいする少数の反逆者

だったのだが)、息子を「昔風の」一高には入れなかった。旧制高校風（一高風と言ってもよい）なものが希薄な、新興の七年制を選んだわけである。安倍亮とMの同級生は、東京高校尋常科の「プチブルインテリ」的雰囲気をこう語っている。「尋常科に入った頃の我々は主に東京の山の手の知識階級の子供等で割に入学率の少い試験を受けて入った連中だったから、怜悧で小生意気な然し感情的には一向に幼さが抜けきらない中学生だったと思われる」²⁶⁾。

親たちが七年制を選んだ最も大きな理由は、その頃ますます激しくなっていた高校受験競争が中学教育を歪めていると考えたからであろう。というより、そもそも七年制設立の意図がそこにあった。安倍能成は1940年に一高の校長になり、新聞や雑誌から教育問題について意見を求められることが多くなったが、受験競争の加熱が青少年を苦しめているという長年の持論を披露している²⁷⁾。彌生子のほうは次男の学園祭に出かけ、中学生たちの生きいきしたようすに改めて満足し、「普通の中学校が高等学校の入学試験のためすべての学課をおちついてゆっくり叩き込むと云う大事なことを放棄するに比べて、七年制の尋常科の落ちついたごまかしでない学風が如何にすぐれているかが明瞭である」²⁸⁾と1929年11月11日の日記に書いている。

バブルの恩恵

こうした七年制高校や、その他地方にネームスクールと呼ばれる高校（例えば、松山高校や静岡高校）が新設されたのは、1918（大正7）年の高等学校令改正によるものである。さらに同年の大学令の制定、翌年の帝国大学令の改正によって、私立大学も含めて大学の数も急増する。それに従って、当然大学教授のポストも増えた。社会学者の竹内洋はこれを「大学教授バブル」²⁹⁾と呼んでいるが、このバブルのおかげで、安倍能成や阿部次

大正教養主義の二世たち

郎（1883～1959）、和辻哲郎などの大正教養主義者たちは無事、帝国大学教授のポストに収まる。野上豊一郎が心血を注いだ法政大学も、大学令によって大学としての体裁を整えていった。また高等教育の拡充は知的な読者たちを増やしていき、岩波書店は高級出版社としての地位を築く基盤を得る。大正中期の学校改革が大正教養主義に与えたこうした影響はすでに指摘されるところであろう。

しかし重要なのは、これを大正教養主義の発展と捉えてはならないことである。実際、時期的にも、彼らが帝国大学に就職した昭和改元前後は大正教養主義の衰退期にあたる。まさに、大正教養主義だったわけである。彼らが書き手として活躍していたころ、具体的に言うと『三太郎の日記』が出版された1914（大正3）年ころ、彼らは在野の書き手であり、生活も不安定であった。要するに、フリーランス、当時の言葉で言えば「高等遊民」だった。岩波書店を岩波書店たらしめた「哲学叢書」の発行（1915）や雑誌『思潮』の創刊（1917）は高学歴フリーターのための失対事業でもあったわけだが、その当時の彼らは帝大教授の権威に逆らうような生意気な若手であり、岩波書店は、出自の古本屋に毛が生えた程度の小さな出版社であった³⁰⁾。

第一次世界大戦によって得た漁夫の利が財政的に可能にした大正中期の学校バブルは、大正教養主義者たちを権威の側に配置換えし、体制肯定的な「プチブルインテリ」の外観を与え、教養主義批判の一つのかたちを末永く提供した。「彼らは何よりも野性的な反逆心を欠いていた。愚に拙くとも、徹せんとする信仰なく、底ぬけの理想もない。〔中略〕大学教授として保身したことが一つの証拠となるであろう」³¹⁾ という亀井勝一郎（1907～66）の批判はその典型である（その批判が当たっているかどうかは、ここでは問わない）。

このように眺めると、二世たちが、高等学校バブルのなかで新設された

七年制の高校に進んだこと（ただし、東北帝国大学にいた阿部次郎の息子は二高に進学した）が象徴的な意味を帯びて見えてくるだろう。大正教養主義者たちが大学教授として保身的・保守的になったかどうかはわからないが、息子を東京の中産階級的环境のなかに置こうとしたことは確かなのである。とりわけ、植民地にたつ帝国大学に単身赴任して妻子を東京山の手に置いていった安倍能成については、そうだと言えるのではないか。

清水幾太郎（1907～88）は1925（大正14）年に、高校からの最初の編入生として東京高校に入学し、すぐさま「これは飛んでもない学校へ紛れ込んだものだ」と後悔したという。「なるほど、この学校は、すべての高等学校につきものの、あの蛮カラな風俗がなく、それは結構なことだったのですが、結構を飛び越えて、この学校は学習院のイミテーションだったのです」。そして「その連中〔尋常科からの進学者〕のうちには、貴紳名門の子弟がやたら多いのです」³²⁾。

しかし「貴紳名門」というのは、幾太郎らしい悪意のこもった言い過ぎであろう。東京の教育熱心な新中間層家庭の子息の学校というのが実態である。ちょうど、安倍能成が北軽の別荘地について言ったこと、「この村には金持の別荘もあるか知らぬが、多くの持主は大抵我々程度のものらしく、別に富力の圧迫を感じることもない」という言葉が、東京高校にもあてはまる。

三代目の紳士、あるいは戦士

安倍能成は亡くなった長男のことをこう振りかえっている。「〔紳士は三代にして成る〕というが、彼は私に比してより紳士的であり、またよい意味で都会人的であった」³³⁾。亮の死の一个月前、敗戦直後の9月にやはり病死した岩波茂雄の長男雄一郎についても、「雄っちゃんは岩波の熱烈で頑固で本能的な野生に比べると、境遇やら教養やらによって、比べられぬ

大正教養主義の二世たち

程円満で穏和で常識的であった。しかし雄っちゃんの中のどこかに父君の情熱の固まりが潜んで居たかも知れない」³⁴⁾と言う。

安倍能成、阿部次郎、和辻哲郎、岩波茂雄、野上豊一郎・彌生子、早逝した魚住影雄（1883～1910）、大正教養主義の中心的存在と見なされる彼らはみな地方の出身であり、上級学校への進学を機に東京へ出てきた。彌生子の実家は大分県の造り酒屋（現・醤油味噌製造のフンドーキン）なのだが、魚住以外の他の男性たちは、地方の堅実な旧家ではあっても、特に富裕というわけではない家庭の出身である。戸坂潤はマルクス主義者の立場から大正教養主義者を「文化的紳士のスタンダード」³⁵⁾などと皮肉っぽい口調で呼んだ。だが、彼らは、能成が盟友岩波茂雄の若き日の姿を「熱烈で頑固で本能的な野生」と言ったように、むしろ、紳士とか都会とか円満とかいうものからかけ離れた「煩悶青年」、あるいは田舎者であった。安倍、和辻、阿部、岩波、魚住がかなり激烈な、デコボコした性格の持主であったことはよく知られている。

彌生子は「おやじ連より息子たちの方が上出来だ」と表現したが、非紳士的な父たちの築いた安定の上に「教養主義的な」紳士の息子たちができあがったわけである。岩波雄一郎の武蔵時代の友人の言葉を引いておこう。「本当に良い意味で良家の子弟だった。豊かな平和な家庭で暢び暢びと育った様子が、あらゆる点に現れて居た」³⁶⁾。実際のところは、岩波夫婦の不和や別居問題で子どもたちはそれなりに苦労したようだが、岩波のイメージはそのように「良家」に見えたのである。

しかし、すでに述べたように、安倍亮たちの世代は高校時代に左翼運動の隆盛（とはつまり、教養主義の後退）を体験した世代である。1927（昭和2）年から1933（昭和8）年くらいの昭和初期の頃の話だ。たとえば、亮と同年の丸山眞男は一高の第二学年が終わろうとする1933年3月に、唯物論研究会の講演会を聞きにいて逮捕され、本郷富士署の留置所にブ

チこまれ、ただただヘナヘナと涙を流すしかなかったという苦い経験をしている³⁷⁾。丸山は学校からの処分は免れたが、一高と東京高校という当時の超エリート校も左翼運動による退学処分者を若干名出した。

もっとも、大正教養主義二世に話を絞れば、この運動の戦士は、息子たちではなく、娘たちであった。まずは、そちらのほうを先に見ていこう。

1910年生まれの野上素一、1911年生まれの岩波小百合、1913年生まれの野上茂吉郎と阿部和子、そして1914年生まれの安倍亮と和辻京子、彼らが激動の世代にあたる。もう二つ三つ年下の弟妹たちになると、すでに状況は変わっていた。

阿部次郎の長女和子はただ一人、若い時の信念を一生貫いた人物と言える。安倍能成は、阿部次郎が亡くなったときの朝日新聞の追悼記事のなかで次郎の我の強い性格に触れ、「子供達にも思想の相違などから、自分の我慢を譲らず対立する所もあったらしい」³⁸⁾などと例によって失敬なことを書いているが、この和子との葛藤を指しているのだろう。要するに、長女は一番、父親に似ていたのだ。

和子の妹（阿部の三女）に拠ると、成績優秀な和子は16才で、母親の母校である東京女子高等師範（現・お茶の水女子大学）に入学したが、1931年11月に左翼活動のため第二学年の途中で退学となり、仙台に連れかえされたという。だが、翌年の3月には東京へ出奔。次郎は娘を無理やり実家に戻すことを諦め、親友の岩波茂雄に頼んで岩波書店で働かせることにした。彌生子の1932年6月20日の日記には、「島崎さん〔岩波書店の編集者〕と和子さん来訪。二人は九時すぎまで。どちらもしっかりした頭をもったよい娘たちである。〔岩波〕小百合さんともこのごろ友人になっている由」³⁹⁾とある。

しかし1932年11月22日、ついに和子は特高に逮捕されてしまう。岩波家を訪ねた彌生子は「岩波夫人が和子さんを中野署へもらい下げに行っ

大正教養主義の二世たち

た話をきく」(1933年1月12日の日記)⁴⁰⁾が、その後、母親が娘を仙台に連れかえった。父は何とか娘の心を落ち着かせようと、ともに『資本論』を原書で読み、そのためのドイツ語学習の手助けもしたというが(こころに父親の教養主義者としての真骨頂があらわれる?)、娘は家にじっとしていることはなかった。「社会の矛盾を正すために命を張って戦っている同志を思うと、自分を取り巻いている豊かな大学教授の家庭が凡て疎ましく、その鬱屈をはらす為、大声で叫んだり、張りかえたばかりの襦にインキ瓶を投げつけたりして両親を嘆かせた」⁴¹⁾と妹は報告している。結局、非合法活動を続けた和子は1935年春に再逮捕、半年後に心身ともにボロボロになって帰ってきたあとは運動から一旦離れ、貧しい子らのための保育に携わっていく。先取りして言っておけば、これだけの強さをもった大正教養主義二世の息子たちはいない。

能成と二つの結婚

次に来るのが和辻哲郎の長女、和辻京子である。京子は1931年に、母照子の母校である津田英語塾(現・津田塾大学)に進むが、翌年に起きた通学バス運賃をめぐる学校との闘争で果敢に先頭に立ち、慌てた両親は退学処分という傷がつく前に、学校を辞めさせ京都に連れかえった。照子の回想に拠れば、無理やり家に戻された娘は「いかにも母親のプチブルをあざ笑うかの様な」⁴²⁾態度をとり、あれほど尊敬していた父の話にも一切耳を貸さなかったという。照子は、「同志」たちからの「決行」を促す手紙を見つけ、慌てて父親に見せる。「哲郎はため息をつくような調子で、「どうしてみんな警察との鬼ごっこが面白いんだろうね」と言った」⁴³⁾と照子は当時を振りかえっている。

何とか娘を落ち着かせようと、好きだった絵を有名画伯の元で習わせたり、京大のドイツ人留学生に頼んでドイツ語を教えてもらったりするが、

なかなかうまく行かない。娘は「不満そうな、進歩的邪慳さ（もしこんな造語が許されるなら）とでも言うような表情」⁴⁴⁾ でふてくさるばかりである。

が、こうした教養主義的「思想善導」と並行して、早めに結婚させてしまうという別の手段が考えられていたらしい。ここでも野上彌生子の日記が証言となる。1933年4月18日の日記にこうある。「和辻夫人が近々京子さん連れて上京するという話をきく。縁談らしいと云う。じつは一と月ばかりまえS〔素一〕にどうだろうかと先方から京都に行った岩波〔茂雄〕さんにまで話があったのだ。少し早い、それを除けばよい相手とひそかにおもっていただけに、耳にとまった。野上君にまで話して見てくれないかとのことであったと云うが……それなりでまだ返事もしないのではあるが、それにしても、もう又だれか他によい相手が見つかったのであろうか。あんまり気忙しい話だ」⁴⁵⁾。続いて1933年5月16日の日記の欄外に「和辻さんから手紙。急に縁ダンがきまったので例のことは水に流してくれと云って来る」⁴⁶⁾ とある。

大正教養主義者のネットワークを駆使しての婿探しのようすが伝わってくるが、実際、素晴らしいお婿さんを見つけてきたのは、われらが能成であった。「その年〔1932年〕の暮れだったろうか、次の年の初春だったろうか、安倍（能成）さんが、京子の相手としてどうだろうかと、優秀な一青年を紹介の手紙をよこされた。「京城大学の同僚尾高朝雄君の弟で、社会学をやっている、出来のいいしっかりした愉快的な青年」というように書かれてあったと思う。その青年はその春、母や兄と一緒に京都へ来てくれた」⁴⁷⁾。

この母は沢尻栄一の娘で、尾高家もまた、華麗な閨閥を備えた、近代日本の名門の一つと見なされている。当時東京帝国大学文学部の副手をしており、後に教授となる社会学者尾高邦雄（1908～1993）と和辻京子は幸いなことに（あるいは、不思議なことに）すぐに相愛の仲となり、1933年

9月には「安倍ご夫妻の媒酌で」結婚するにいたる。こうして和辻家の左翼騒動は定義通りの喜劇的大団円を迎えるわけだが、母親は神様に深く感謝したそうである。「神への次には安倍さんと京子の夫に、心の底で厚く厚くお礼を言った」⁴⁸⁾。1933年8月22日の彌生子の日記をここに付け加えておこう。「森山さんに和辻さんの京子さんの話をきく。英学塾のバス事件では、京子さんは中々活動したもので、退学しなければ学校から出されかねない情勢であった由、和辻さんが早く結婚させたがったわけが漸く分った気がする」⁴⁹⁾。

もう一つの結婚は、岩波小百合と小林勇（1903～81）の結婚である。というか、岩波茂雄が、敢えてわかりやすく言えばお嬢さまと使用人の結婚に反対であったために起こった、結婚をめぐる騒動である。能成や彌生子、露伴などの岩波書店の著者たちも巻きこんだこのゴタゴタは、1932年の初夏のことなので、阿部和子の出奔、和辻京子の反抗と時期的に重なっている。

小林勇は1920（大正9）年に17歳で岩波書店の住み込み店員となり、やがて編集者として頭角をあらわすが、1928（昭和3）年に岩波書店を辞める。しばしば指摘されるように、岩波文庫を立ちあげたこの花形編集者が独立して鐵塔書院を創立し、三木清や羽仁五郎とともに雑誌『新興科学の旗のもとに』の創刊にかかわったことは、大正教養主義の衰退とマルクス主義の台頭を鮮やかに告げるものだった。

結婚のことを別にしても岩波茂雄は小林勇の行動をあまり面白く思わなかったらしい。安倍能成の『岩波茂雄傳』から引いておこう。「この中小林の結婚は、当人同志相愛の結果であったが、小林が争議のあった昭和三年末に退店したこと、又小林の才気煥発機略に富み、往々にして岩波を気の合わぬ所もあり、又岩波に相手の家の社会的地位を欲するという気持もないとはいえず、一時はこの結婚に不服と不安を感じており、岩波の友人

にも不賛成があったけれども、当の娘の決意も固く、夫人も賛成、幸田露伴、小泉信三、野上夫婦などの後援もあって、この縁談は竟に成立した⁵⁰⁾。

能成は「岩波の友人にも不賛成があったけれども」などと書いているが、ほかならぬ能成こそがその友人であった。野上彌生子は、結婚騒動から20年経った1952年の能成宛手紙のなかで彼の健忘症ぶりを、いくぶん腹立たし気に皮肉を交えて指摘している。「再度の御手紙拝受いたしました、お言葉は首肯いたしかねます。あなたと小泉〔信三〕さんが努〔力〕したのなら、何故小林さんが青い顔して私たちのところ〔へ〕訴えに来る必要があったのでしょうか？〔中略〕且つまた結婚と決定した時、私たちが仲人役まで引き受けさせられはしなかったはずです。これはどういうわけでしょう。岩波の円卓の騎士としての野上の席は、あなたや小泉さんよりずっと下位にあるのは、私としてもよく承知いたしておりますもの。私たちより、あなたか、小泉夫妻が仲人としてえらばれるのが本統です⁵¹⁾。

結局、1934年に小林勇は岩波書店に戻り、戦後岩波書店が株式会社になったあとには専務や会長を務めて会社の発展に貢献したので⁵²⁾、父親と能成の不服を押しきって「左翼的」恋愛結婚を敢行した娘の目が最も先見の明があったわけである。若い二人の相談役になった「進歩的」な彌生子は1932年6月2日の日記にこう書いている。「岩波さんたちが彼〔小林〕を気^マ嫌いする気もちは分らないことはない。ハダあいが全然ちがうのだから。〔小林は〕おもしろい出版ケイカクをもっている⁵³⁾。

百点満点の息子

これだけ鋭く、また公平な観察力をもった彌生子の目が息子たちにたいしては、とりわけ、彌生子が最も信頼していた次男にたいしては、時おり曇ってしまう。すでに引用した、次男の友人の言葉を思い出しておこう。「息子たちには特別甘い。中でもMは満点にちかい」。

旧制高校生を主人公とした「若い息子」(1932)は、日記のなかでMとかモキとか呼ばれている次男の東京高校一年から二年にかけて(1930～31年)の体験を基にしており、このことは何度か日記に登場する。「このごろ自分の最も深い関心事はモキの学校のことである」(1931年1月19日)⁵⁴⁾。「書きかけのもの〔若い息子〕がまだ本調子にいかず。一つはこれの発表に不安があるからである。モキたちの気もちを損じてまで発表はできない。しかしとにかくこれを書いてしまわなければ、他のどんな仕事も出来ないほどこの一つのテーマは現在の私を捕えている。発表が出来なければ出来ないまでとして、とにかく書きつづけることにしよう」(1931年6月4日)⁵⁵⁾。

こうした決意で書かれた「若い息子」を、すでに触れたように川端康成は「カンの鈍い小説」と呼び、「小説を読むつもりは、堪えられぬ作品である」と、かなりの酷評をした⁵⁶⁾。しかし、彌生子の日記が公表された現在の地点から眺めると、この「カンの鈍い小説」がMをめぐる心配や期待や、何より過大評価の集積であることがわかり、小説として読まなければ、むしろ興味深く読める。

「若い息子」の「テーマ」は左翼運動でも左翼思想でもない。そうではなく、学校の左翼学生処分をめぐる友情と葛藤である。主人公の圭次は経済的に恵まれた良家の一人息子であるが、不当にあるいは不公平に厳しい退学処分を受けた友人たちを救うための学生ストライキに参加すべく、母親の心配を振りきって家を出ていく。「母さまだって、僕を裏ぎりものにしたいはずではないはずですよ」と⁵⁷⁾。

この苦しい気持ちは、彌生子自身が味わっている。1931年2月には、東京高校の卒業生たちも処分学生にたいする緩和処置を求めて立ちあがったらしい。2月25日の彌生子の日記には卒業生の代表が家を訪ねてきたことが記されている。「今度の処分を緩和するため父兄たちの運動を起そうと

するにつき、発起人として父さんの名前をかりに来たのである。旅行の旨を云う。私の名刺でもけっこうと云う。しかし燿三の入学もんだいを控えている際なのでちょっと拙かろうとおもう。斯いうもんだいについて、自分たちの地位さえ自分たちを不自由にしてしまった。何んにも有しないものが最も強い意味をしみじみおもう」⁵⁸⁾。

豊一郎や彌生子のような名の知られた文化人を発起人にしたかったのだろうが、ちょうど三男の中学受験（実際、当の東京高校尋常科に入るのだが）の時期とも重なり、彌生子は断らざるをえない。揺れに揺れているのは、息子ではなく、母のほうであった。

すでに述べたように、野上家の次男と安倍亮は同級生で、高等科でも同じ理科乙類に進んだ。能成も追悼文で長男の体験したであろう板挟みに触れている。「彼が学校で苦労を覚えた初めは、恐らく昭和五年高等科に進んだ頃、当時の青年を襲った左傾思想の騒ぎであろう。彼はこの事についても別に私に訴えはしなかったが、彼自身この思想に同情を持ち、級友の中に多くの負傷者を出し、しかも彼が級長として学校当局者との間に立って心を苦しめたことは事実であった」⁵⁹⁾。

略血した亮は2年生の時から2年間の休学に入るが、処分撤回を求める運動は2年生のクラスでも続いた。彌生子は夫から、Mの積極的な救援活動は、生徒たちのほうを応援する彌生子の日頃の態度の所為だと責められたと、1931年9月29日の日記のなかで怒っている。「私がこの問題に対して今までひどく挑戦的であったから、たといモキがこの運動に熱心になっても仕方ない。私の態度がひどく軽率だと攻撃される」。

しかし夫への怒りはますます次男（と自分自身の子育て）への信頼を高めるばかりだった。「モキはモキらしい冷静さを少しも失っていない。少しの処罰を受けることがあったとしても、大日本帝国の官立高等学校の生徒がかかる運動をすべきではないと云うようなことを羞恥もなく公言し得

るような子供に仕立て上げなかった当然の結果として諦めよう。これから斯う云う場合は度々起るのであろうし、その時代を理解した行動をさせることは親が子供に与える大事な社会教育と云うべきである。軽率な挙動はどこまでも警戒させなければならないが、見苦しい逡巡や、狡猾な裏ぎりはさせてはならない」⁶⁰。

「左翼的」彌生子の本領発揮とも捉えられるし、岩橋邦枝とともに言えば「持ち前の強気な自己肯定」とも言えるし、次男への「満点に近い」評価とも見える。次男自身の行動や気持ちはわれわれには実際のところ不明である。ただ彌生子が次男と彼の友人（そのなかには同級の安倍亮もいる）の「純粹」な心情にたいして、絶大な、あるいは過大な信頼を寄せていることはよくわかる。安倍亮の追悼記に寄せた文章では、「亮ちゃんといえは M、M といえは亮ちゃんと、私には次男との関連なしには彼のことは考えられない」と語り、その最も大きな理由をこう説明している。「高等科の頃、日本の若い世代を押し包んだ思想的な嵐にたいして、彼らがいかに純真に苦闘したかを知っているからである。昭和六七年の日本にかつきり引かれた朱の一線は、一八五〇年代のロシアに通ずるもので、この一二年を高等学校や大学で送った青年たちは、単なる同級生や友だちではなく、もっと強いきづなで結ばれた仲間であった。明治の中葉にもまじめな青年たちを捉えた思想の台風があり、その代表的な犠牲者を亮ちゃんは肉親の叔父さんにもっているが、人生の帰趨を悟りかねた悩みの解決法として、簡単に華嚴の瀧に飛びこんだ代りに、彼らは学校を追われたり、工場に潜入したり、砒山の工夫のあいだに身をおいたり、結果として牢獄に投げ込まれたりした」。

もっとも、M も亮も実際に活動したわけでも学校を退学になったわけでも逮捕されたわけでもないで、最後にはこう付け加える。「彼らの心情は、勇ましい実行家や闘争者の或る者よりも、或る場合純粹で、人道的であり、

また自分たちの実践の欠如について、慎ましく、反省的であった」⁶¹⁾。

しかも、この「純粹」な気持ちをMはずっともちつづけていると彌生子は主張する。彌生子は戦後、九州大学に勤めていた次男を東京に呼び戻し、自宅の敷地内に住ませるために、安倍学習院院長に頼んで学習院大学に移らせた。しかし、その直後に次男は東大に呼ばれ、彌生子は慌てて安倍夫妻に手紙を書いている。夫妻宛てにしたのは、母親ならば彌生子の心情をよりよく理解してくれると思ったからだという。いくら名院長によって改革されたと言っても学習院のようなブルジョア風学校は、やはりMにはあわないと彌生子は訴える。「彼は高等時代に悩んだ悩みを決して捨てておりません。〔共産〕党にこそ入っていませんが、なまなかの党員よりずっと良心的に生きていることを私は知っています。屑屋のような身なりを見てやって下さい」⁶²⁾。東大に移りたいのは断じて出世欲のためではないのだと。そして、こう付け加えるのも忘れない。「もし亮ちゃんが無事にしていたら、きっとモキの立場を支持してくださるだろうと信じます」⁶³⁾。

こんな手紙が残されているならば、安倍能成にどんな悪口を書かれても仕方あるまいと、彌生子日記の研究者である稲垣信子は苦笑している⁶⁴⁾。

甥として、息子として

それにしても、彌生子の言いようは、長男を失っている夫婦には少し残酷に響いたにちがいない。もちろん、モキの友人で、息子ともども優秀な亮は北軽の二世たちのなかでも、彌生子にとって特に愛すべき存在であり、病気のことも親身になって心配していたのだが、それでもどこか「神経の粗さ」が目立つのである。たとえば藤村操の自殺への言及。先に引用した追悼文で彌生子が言っているように、父親世代の「煩悶」を代表し、またエリート学生における教養主義文化の始まりを象徴したのが、1903年5月

に華嚴の瀧に身を投じた藤村操（1886～1903）であった。能成はこの夭折した同級生の妹と結婚したので、余りにも有名な、そして多くの称賛もまたそれ以上の批判や揶揄も受けた自殺者は亮の伯父にあたるわけである。若くして亡くなった亮の追悼文で、こうした話を出してしまうあたりにも、あるいは彌生子の「神経の粗さ」を見てよいのかもしれない。能成は、子どもが生まれその子どもたちが独立するまで文章で藤村操の名前を直接挙げることはなかった。そして能成が晩年に藤村操の名を挙げるときには、この少年哲学者を非神話化、非天才化あるいは人間化する視点に立っていた⁶⁵⁾。能成としても、藤村操と血を分けた者にそれなりに気を使っていたと思われる。

そして、亮には操を思わせるところがたしかにあった、と推測してみたいのである。

彌生子の次男と安倍亮が同じ1926年に東京高校尋常科に入学したことはすでに言うてあるが、学年齢は亮のほうが一つ下であった。つまり亮は飛び級で、それほどの受験準備もなく（というのは、受験前の秋冬には長く入院していたので）、しかも首席で、当時の最難関の中学校に合格したのである。数学がよくできた、とにかく頭がよかったと同級生たちは口を揃えて証言する。和辻哲郎は、幼いころの亮が数字や言語にたいして、「側で見ていて珍らしく感じられた」ほど特異な才能を示していたことを伝えている⁶⁶⁾。大正の中頃、ちょうど亮が三歳くらいのころ、安倍一家は、鶺鴒沼にある和辻の妻の実家の敷地内に住んでおり、亮と和辻京子が同い年でもあったことから、ふたりは遊び友だちとなり、和辻もよく亮を見ていたのである。また、能成や藤村操と一高で同級だった中勘助（1885～1965）も小さいころから亮を可愛がり、その才能に驚いてきたひとりだった⁶⁷⁾。彼らは、もちろん口には出さないが、藤村操の再来といったことをふと思いかべてしまったのではなかろうか。というのも、藤村操もまた飛び級

で一高に入り、学年最年少の、抜群に数学のできる一高生だったからである。和辻の妻は追悼文でこう言っている。「いつだったか恭子〔安倍の妻、藤村操の妹〕さんが、「私が無理に勉強させたので、亮があんな病気になったのだと云う人があるんですって」とお話しになった事があった。人がそんな風に思う程、又は思わなくとも云い度くなる程、亮ちゃんのお出来はよすぎたのだった。学問のお出来計りではなく、お人柄も追々立派に出来ていらした」⁶⁸⁾。

能成も「率直に言って彼はまことに私には過ぎた子であった」と言うが、これは早逝した我が子にたいする買い被りでは決してなかった。「頭脳の明晰、感受の鋭敏、理解の精確、教養や趣味の広くてしかも浅くなかったこと」⁶⁹⁾。父は息子のなかに、亡き友がもっていた知的な誠実さと繊細さを見ていたのである。

現在のウィキペディアなどの記述でもそうだが、安倍能成には、藤村操の妹と結婚したことが良くも悪くもついてまわった。まずは、漱石の野上豊一郎宛て書簡（1912年4月27日）。「安倍は藤村氏の妹をもらうよし何かたしかな糊口の口はないか杯申居候こしらえて遣りたくも無能力にて如何とも致しがたく候」⁷⁰⁾。1915年の文壇ゴシップ風記述には「安倍能成氏の細君は、あの有名な藤村操の妹で、すこぶる賢婦人だそうな」⁷¹⁾ などとある。大宅壮一のような意地悪な、あるいは教養主義に批判的な人間はこう書く。「華巖滝から飛び込んで一躍天下に名をなした痛快な失恋児藤村操の妹にモーションをかけて、これをものにし、操の名声を少々おすぞ分けしてもらい、「情にさおさして」名声高き懷疑派哲学の流れに乗ったのである」⁷²⁾。

興味深いのは、『女子文壇』の「文士訪問記」である。まだ新婚の安倍家を女性記者が訪ねている。書斎に通されると「お床の間に、藤村操の巖頭の銘の不可解の軸が掛けられていた」。それだけで記者はすっかり感激

大正教養主義の二世たち

してしまう。「私はその当時の若々しい、而して真実な、美しい交りの二人の一高の生徒を、柏の帽章をつけた二人の若い人を想像しながら胸の燃えるような心持がしながら待っていた」。しかし「藤村操の事を伺いしたかったが、あまり多くをお話しなさらなかった」⁷³⁾ ……。

安倍亮の死後に二冊の本が出版されている。ひとつは、父の編集による『一青年科学者の手記』（1948）で、書簡や、戦災を逃れた小文を集めている。もうひとつは、東大時代の指導教官であり義兄でもある彌永昌吉編集の『位相数学研究』（1950）である。前者のなかの、友人や家族宛ての書簡が5通ばかり、「世界教養全集」の別巻「東西 日記・書簡集」に収められている。『世界教養全集』は、平凡社から34巻プラス別巻4巻という大掛かりなかたちで1960年代の初頭に出版された。まことに、「世界」も「教養」も「全集」もまだ読書界に生きていた時代、教養主義がまだギリギリ輝いていた時代を感じさせるものである。こうした全集に、ある意味では無名の、しかし完全には市井の人ではない一青年の書簡を収録する意図はどこにあるのか。編者の亀井勝一郎は何も語っていない。しかし、安倍亮がこの「教養」という場所に登場する理由はやはり、能成の息子であり、藤村操の甥であることが関係しているのだろう。安倍亮は正真正銘の大正教養主義二世なのである。

註

- 1) 安倍能成, 「北軽井沢だより」, 『静夜集』, 岩波書店, 1934年, 87頁。なお、引用に際して旧仮名遣い・旧漢字を新仮名遣い・新漢字に改めたが、以下も（特別な場合を除いて）同様である。
- 2) 安倍亮, 「河田敬義宛て書簡」, 『一青年科学者の手記』, 白日書院, 1948年, 70頁。
- 3) 安倍能成, 「北軽井沢だより」, 77頁。
- 4) 大江健三郎, 「文学・軽井沢」, 『新潮』第55巻10号, 1958年, グラビア頁。

- 5) 大江, 『憂い顔の童子』, 講談社文庫版, 2005年, 264頁。
- 6) 大江, 『さようなら, 私の本よ!』, 講談社文庫版, 2009年, 57頁。
- 7) 同上書, 329頁。
- 8) 野上豊一郎, 「大学村の最初の十年」, 北軽井沢大学村組合編, 『大学村五十年誌』, 1980年, 87～95頁参照。
- 9) 野上豊一郎, 「寺田さんと北軽井沢と浅間山」, 『思想』第166号, 1936年, 200頁。
- 10) 岸田今日子, 「大学村の「おとな」たち」, 『図書』第486号, 1989年, 16頁。
- 11) 北軽井沢大学村組合編, 『大学村七十年誌』, 1999年, 64頁参照。
- 12) 大江, 『さようなら, 私の本よ!』, 400頁。
- 13) 大江, 「確信されたエロス」, 『世界』第475号, 1985年, 318頁。
- 14) 江藤淳, 「野上の小母様」, 『新潮』第82巻6号, 1985年, 232頁。
- 15) 江藤淳・蓮實重彦, 『オールド・ファッション』, 中公文庫版, 1988年, 250頁。
- 16) 同上書, 141頁及び145頁。
- 17) 江藤, 「野上の小母様」, 232頁。
- 18) 岩橋邦枝, 『評伝 野上彌生子: 迷路を抜けて森へ』, 新潮社, 2011年, 72頁。
- 19) 青野季吉・伊藤整・中野好夫, 「創作合評会(1)」(『群像』1947年4月号), 『文藝時評大系昭和篇Ⅱ』, ゆまに書房, 2008年, 121頁。
- 20) 安倍, 「「迷路」の会の記」, 『涓涓集』, 岩波書店, 1967年, 35頁。
- 21) 岩橋, 前掲書, 順番に22頁, 55頁, 140頁, 181頁, 200頁。
- 22) 坂口亮, 「「日記」拝読」, 野上彌生子全集第Ⅱ期「月報11」, 1987年, 5頁。
- 23) 野上彌生子, 「思ひだすこと」, 『岩波雄一郎の思い出』, 非売品, 1951年, 115～116頁。
- 24) ところで, 彌生子の日記を見るかぎりでは, 一高受験にこだわったのは素一であって, 野上夫婦ではなかったようである。彌生子は, 息子たちをみな, 当時中学入試実績を誇った本郷の誠之小学校に越境通学させたが, 必ずしもいわゆる教育ママではなかった。
- 25) 丸山眞男, 『丸山眞男回顧談上』, 岩波書店, 2006年, 19～20頁。
- 26) 臺弘, 「思ひ出」, 『安倍亮 追悼録』, 非売品, 1949年, 171頁。
- 27) たとえば「教育者の反省」(初出『東京日日新聞』1940年10月22日・23日)

大正教養主義の二世たち

- を参照。『巷塵抄』, 小山書店, 1943年, 98～104頁。
- 28) 野上, 『野上彌生子全集第Ⅱ期』(以下『第Ⅱ期』とする)第2巻, 岩波書店, 1986年, 492頁。
 - 29) 竹内洋, 『教養派知識人の運命:阿部次郎とその時代』, 筑摩書房, 2018年, 257頁。
 - 30) 彼らの「反抗青年」ぶりについては, 次の拙稿の13頁を参照されたい。「安倍能成, ダメ学者と呼ばれて(も)」, 日本ドイツ学会編『ドイツ研究』Nr.57, 2023年。
 - 31) 亀井勝一郎, 「教養人」, 『現代人の研究』, 角川新書, 1950年, 122頁。
 - 32) 清水幾太郎, 『私の心の遍歴』, 『清水幾太郎著作集』第10巻, 講談社, 1992年, 323頁。(初出『婦人公論』1955年1月号)
 - 33) 安倍, 「亡児亮のこと」, 『安倍亮 追悼録』, 259頁。
 - 34) 安倍, 「雄っちゃんのこと」, 『岩波雄一郎の思い出』, 127頁。
 - 35) 戸坂潤, 「現代に於ける「漱石文化」」(初出1936年), 『戸坂潤全集』第5巻, 勁草書房, 1967年, 116頁。
 - 36) 依田修, 「天衣無縫」, 『岩波雄一郎の思い出』, 50頁。
 - 37) 丸山眞男, 前掲書, 49～53頁参照。
 - 38) 安倍, 「阿部次郎死去の報をきいて」, 『涓涓集』, 岩波書店, 1968, 46頁。(初出『朝日新聞』1959年10月23日)
 - 39) 野上, 『第Ⅱ期』第3巻, 1987年, 498頁。
 - 40) 野上, 『第Ⅱ期』第4巻, 1987年, 6頁。
 - 41) 大平千枝子, 『阿部次郎とその家族』, 東北大学出版会, 2004年, 200頁。
なお, 次郎と和子の関係性については次の論文を参照されたい。岡安儀之, 「阿部次郎と阿部和子:父と左傾化する長女との確執を中心に」, 曾根原理他編, 『阿部次郎ルネサンス:研究の新地平』, ペリカン社, 2024年, 225～245頁。
 - 42) 和辻照, 『和辻哲郎とともに』, 新潮社, 1966年, 217頁。
 - 43) 同上, 218頁。
 - 44) 同上, 222頁。
 - 45) 野上, 『第Ⅱ期』第4巻, 64頁。
 - 46) 野上, 『第Ⅱ期』第4巻, 77頁。

- 47) 和辻照, 前掲書, 225 頁。
- 48) 和辻照, 前掲書, 227 頁。
- 49) 野上, 『第Ⅱ期』第 4 卷, 143 頁。
- 50) 安倍, 『岩波茂雄傳』(新装版), 岩波書店, 2012 年, 410 頁。
- 51) 野上, 「安倍能成宛書簡」(1952 年 5 月 9 日), 『第Ⅱ期』第 25 卷, 1991 年, 287 頁。
- 52) 小林勇は, 太平洋戦争中に編集者や新聞記者たちが治安維持法違反の容疑で逮捕された「横浜事件」にも巻きこまれ, 留置先の東神奈川警察署で敗戦を知る。
- 53) 野上, 『第Ⅱ期』第 3 卷, 488 頁。
- 54) 野上, 『第Ⅱ期』第 3 卷, 172 頁。
- 55) 野上, 『第Ⅱ期』第 3 卷, 260 頁。
- 56) 川端康成, 「文藝時評」(『読売新聞』1934 年 12 月), 『川端康成全集』第 31 卷, 新潮社, 1982 年, 73 頁。
- 57) 野上, 「若い息子」, 『野上彌生子全集』第 6 卷, 岩波書店, 1981 年, 192 頁。
- 58) 野上, 『第Ⅱ期』第 3 卷, 195 頁。
- 59) 安倍, 「亡児亮のこと」, 266 頁。
- 60) 野上, 『第Ⅱ期』第 3 卷, 359～360 頁。
- 61) 野上, 「亮ちゃんのこと」, 『安倍亮 追悼録』, 75～76 頁。
- 62) 野上, 「安倍能成・恭子宛書簡」(1952 年 4 月 14 日), 『第Ⅱ期』第 25 卷, 278 頁。
- 63) 同上, 281 頁。
- 64) 稲垣信子, 『「野上彌生子日記」を読む〈戦後編〉下』, 明治書院, 2005 年, 10 頁。1964 年彌生子が女流文学賞を受賞したおり, 能成が友人として『婦人公論』に文章を寄稿することになったが, その原稿の内容があまりに「悪口」に満ちていたため, 没になったことを指している。
- 65) たとえば, 「「巖頭の感」をめぐって」(『新潮』第 46 卷 9 号 1949 年), 「恋愛と自殺について——私も昔は自殺を思ったこともある」(『文藝春秋』第 36 卷 3 号 1958 年) など。
- 66) 和辻哲郎, 「亮さんの思ひ出」, 『安倍亮 追悼録』, 95 頁。

大正教養主義の二世たち

- 67) 中勘助, 「亮ちゃんの思ひ出」, 『安倍亮 追悼録』, 83～92 頁。
- 68) 和辻照子, 「思ひ出」, 『安倍亮 追悼録』, 104 頁。
- 69) 安倍, 「亡児亮のこと」, 248 頁。
- 70) 夏目漱石, 「野上豊一郎宛て書簡」(1912年4月27日), 書簡番号 1628, 『漱石全集』第 24 卷, 岩波書店, 1997 年, 26 頁。
- 71) 高山辰三, 『天下泰平文壇與太郎物語』, 牧民社, 1915 年, 116 頁。
- 72) 大宅壮一, 「遊蕩人格四兄弟: 阿部次郎, 安倍能成, 小宮豊隆, 和辻哲郎の仮面をはぐ」(初出 1933 年), 『大宅壮一全集』第 3 卷, 蒼洋社, 1981 年, 300 頁。
- 73) 「安倍能成氏の家——文士訪問記」, 『女子文壇』第 10 年 1 号, 1914 年。

(本研究は JSPS 科研費 JP22K00498 の助成を受けたものである。)

Second Generation of Taisho Liberalism: Abe Nosei and Nogami Yaeko, Part 2

TAKADA Rieko

This paper focuses on the lives of the children of Taisho liberalists such as Abe Nosei (1883–1966), Nogami Yaeko (1885–1985), Iwanami Shigeo (1881–1946), Abe Jiro (1883–1959), and Watsuji Tetsuro (1889–1960). Around 1900, when Meiji Japan was catching up with the West, although the fathers were in the generation of “agonized youth” (*hanmon seinen*), the children were part of the generation shocked by Marxism in the early Showa period and suffered many casualties in World War II. The turbulent history of modern Japan lies between these two generations. Another point of interest is the friendships developed by the fathers and sons through the two generations. The fathers formed friendships at the First High School, the top elite school of the time, and their sons became close classmates at elite schools. This article shows the social context in which the formation of privileged relationships between males was possible. One typical criticism of Taisho liberalists is that they ceased to be free and “wild” writers rebelling against authority. They were criticized for becoming increasingly conservative, defending themselves as professors at the Imperial University. The children of these Taisho liberalists grew up in the economic and social stability established by their fathers. However, the sons were confronted with the leftist movement in their student days and began to turn a critical eye toward their own petit bourgeois intellectual lifestyle. Thus, for the first time, a serious conflict arose between liberalist parents and their children. This essay sheds light on Taisho liberalism from a different perspective by describing how Taisho liberalist parents faced their troubled children and how they both reacted.

Second Language Acquisition in Virtual Reality: A Trial of AI-augmented English Learning

WAGNER Adrian
ONO Michiko

Abstract

This research investigates university students' perceptions of the ease of use and educational effectiveness of virtual reality English learning software. It also explores the potential of AI to function as conversational partners and instructors. The software used for the trial combines original lessons and educational materials with the artificial intelligence capabilities of ChatGTP to provide both a conversational partner and give feedback and evaluation of spoken output, delivered through the Meta Quest virtual reality headset. The virtual reality environment offers an immersive experience, with 3D characters as the conversational partners. The software has the potential to provide students with opportunities for increased input and output, essential for second language acquisition. Furthermore, the integration of AI promises to offer students personalized individual feedback and error correction, something that is difficult for educators to manage in communicative language classes with numerous students. To trial this software, the university offered 3 short trials (in groups

Keywords : virtual reality, artificial intelligence, second language education, English, Japanese University

on campus) and a longer trial in which selected students had the opportunity to take the headset home, and freely use the software for two weeks. Data was collected via pre- and post-trial surveys. Although the number of students who could participate was limited due to the number of headsets available, the reaction of students was positive overall. Students seem ready to embrace virtual learning, and the results indicate that such technology could have various uses in university English language programs, such as being integrated as a supplement in the classroom, for homework and/or assessment tasks, or even as standalone credit-bearing courses. Inevitably, the quality of the technology will improve, the content created for such technology will increase, and as more competitors enter the market, prices will decrease. The challenge facing universities should not be whether to decide to use such technology or not, but to find effective ways to use it in enhancing current curriculums.

Second Language Acquisition in Virtual Reality: A Trial of AI-augmented English Learning

The study was carried out by the Language Center of Momoyama Gakuin University in Osaka, Japan. The Center is responsible for administering the compulsory English classes of all faculties and providing elective classes and short-term courses during the university holiday periods. The Center also provides extra-curricular English language related classes and events. Previous events include quizzes, speech contests etc. In terms of technology assisted learning, the Center has administered online components of English classes since 2008, when repeater classes were provided through English learning software. Following that, online resources were used as supplementary (out of classroom) learning materials in various classes such as first / second year *Tokkyu* (higher-level) classes and all compulsory second year classes in the Faculty of Interna-

tional Studies and Liberal Arts. However, these materials were not truly interactive, and were essentially digitalized textbooks. Furthermore, the university has been using online English tests provided by third-company parties as the placement test for all students entering the university for several years.

Despite taking advantage of some technological enhanced educational materials, the university, like institutions all over the world, was forcibly pushed towards digitalization by the COVID-19 pandemic. All classes were moved online, and despite the return to normalcy, some lectures are continuing to be offered online or in hybrid modes. The International Center, responsible for the university's numerous study abroad programs, offered online study abroad programs during this period in which international travel was impossible. An example of such a program was a flexible online English course offered by the British Council. Generally, students who participated in the course self-reported increases in motivation, and overall English ability. The claims of the students were seemingly supported by pre-and post-scores on the TOEIC[®] L&R test, which did indicate increases in both listening and reading scores of students who participated in the program (Legge, 2023). Participants reported that the most positive aspects of the online study abroad program were the opportunities to "Talk to students from different countries", "Improve speaking/communication/pronunciation" and "Learn about different cultures or customs" (p. 120). The biggest downside of the course was reported as "Schedule-related difficulties" (p. 122). While the course offered a substantial degree of flexibility, with students being able to choose

lessons that appealed to them in times that suited them, students apparently found it difficult to find classes that matched their availability (generally evenings JST). Equal second as the most commonly mentioned point of concern was, “Difference in levels of students” (p. 122). So, if we consider these points in relation to the potential of an AI-augmented course, it is possible to conjecture regarding students’ reactions to this type of English learning. Firstly, AI cannot provide the opportunity to talk with students from other countries and cultures. Certainly, curiosity about other cultures is an integral part of motivation to study a foreign language for many learners. Also, the interaction hypothesis, developed by researches such as (Long, 1981), which purports ample opportunities for engaging in dialogue in a natural setting as vital to the learning process, has long been a prominent theory in SLA. Ellis (1991, p. 3) writes that, “In the case of naturalistic acquisition, the importance of face-to-face interaction with other speakers of the L2 is self-evident.” With the human aspect removed, it remains to be seen how many of the benefits of interaction such as naturalistic input and the need to modify and adjust output will remain relevant when interacting with an AI avatar, no matter how realistic it may seem.

Returning to VR, programs such as Immerse (which will be discussed more in the Literature Review) allow real people to inhabit avatars and interact in the virtual world. Universities in Japan have been using such software to simulate the study abroad experience (Chuo University, 2020). Second language learners may find it less intimidating to interact with real people through avatars, but the problems with schedules,

time-differences and ability level inherent in online classes remain.

However, AI-powered English learning does have the potential to solve two of the students' main problems with the online English program offered by the International Center. Students can study whenever and wherever they like. As students study with the AI alone and choose their own lessons, there is no issue with scheduling. AI has the potential to adapt to students' ability levels, such as exhibited in computer-adaptive tests (Goodwin & Naismith, 2023). Also, some of the students' concerns about ability level of classes could be presumed to be caused by foreign language anxiety to some degree, which is generally seen to be an obstacle in the learning process (Horwitz et al., 1986). Talking with an AI has the potential to reduce the anxiety of speaking, as the social factors are removed. This will be discussed more in the Literature Review and in the analysis of the results.

This study analyses students' perceptions of the Smart Tutor English learning software as delivered through the Meta Quest virtual reality headset and seeks to answer the following questions:

1. How ready are students to embrace such forms of digital learning?
2. Do students find the software and hardware easy to use?
3. Do students see an educational benefit in using such software?
4. Considering the reactions of students, how can an institution use new technology to supplement the existing English language curriculum?

Literature Review

For this paper, we accept the definition of AI as, “computing systems that are able to engage in human-like processes such as learning, adapting, synthesizing, self-correction and use of data for complex processing tasks.” (Popenici & Kerr, 2017, p. 2).

There is excitement and concern about the implications of AI such as ChatGPT in the field of education. Obviously, there are endless possibilities for cheating, and the unpredictable nature of AI is genuinely worrying, such as, the incident of Microsoft’s chatbot, Tay. “Confident on the bot’s capacity to operate independently, Microsoft discovered that Tay turned fast into a racist, bigoted, and hate-spewing account” (Popenici & Kerr, 2017, p. 3). It is natural that educational institutions should proceed cautiously into the brave new world of AI.

Initially, AI was used in administration in higher education. As early as 2014, Deakin University in Australia adapted IBM’s Watson to answer queries from students (Deakin University, 2014). Now, as with all aspects of life, AI is entering the classroom, too. With the rapid advancement of AI, the relevance of any research in the field has a short shelf-life. Therefore, this literature review will focus on the use of AI and similar applications used in English as second language education in recent years.

In 2017, a small, cute robot called Musio was trialed for use in English

lessons at an elementary school in Toda City, Saitama. According to the author, “besides having the ability to recite and hear using teaching materials, Musio is able to have a free AI-based conversation feature, so that it might be used for English conversation that is adapted to the school curriculum” (Auliawan & Ong, 2020, p. 4). Like schools throughout Japan, the school in the study employs Assistant Language Teachers (usually foreigners) to support teachers by modeling target language, and acting as conversational partners for students. As reasons for implementing such technology more widely, the lack of availability and high cost of employing ALTs was mentioned. In terms of the educational validity, the principal of the school claimed that, “...the students felt happy, there was no anxiety, and quickly got familiar because of its funny shape. Then, when students talk to Musio, they become confident and can communicate with their friends in English without shame”. Although there were concerns about the lack of “humanness”, it is worth noting that the technology described in this research is at the time of writing, about 7 years old. Overall, it was thought that, “Musio was indeed more effective and cheaper than Assistant Language Training (ALT)” (p. 5). Despite this, it seems that the local school board did not continue to use Musio after the trial, but are continuing to use tablets as learning tools in English language classrooms.

The study of Ruan et al., (2021) trialed an AI learning tool called EnglishBot to test its efficacy against more traditional listen-and-repeat interface that are common language learning aids in China, where the research took place. According to the authors, EnglishBot is a, “language

learning chatbot that converses with students interactively on college-related topics and provides adaptive feedback” (p. 1). EnglishBot, uses Google Chrome’s well-regarded voice recognition software to interpret the utterances of students.

Two groups of university students studied using identical lesson materials (adapted from TOEFL[®] tests) with one group using the EnglishBot and the other using the listen-and-repeat interface. The two interfaces were made to look almost identical. The researchers concluded that:

EnglishBot users in the free usage condition significantly improved their scores in the script-based conversation test, including the fluency and lexicon subscores and overall scores, whereas traditional system users showed no improvements.

The results suggest the inclusion of chatbot elements can increase the benefits of a system for learning English as a foreign language. EnglishBot was found to be more engaging, and it led to some minor improvements in speaking skills that were not found with the traditional system. (p. 10)

The study of Nazari et al., (2021) trialed lessons enhanced by the AI-powered academic writing tool Grammarly among students in Doctorate programs, for whom English was a second language. The researchers found that the students who were compelled to use Grammarly showed greater emotional engagement, a decrease in negative emotions and a greater sense of self-efficacy towards academic writing in English, likely attributed to the

instant error correction and feedback that Grammarly can supply.

The research of Yamanaka et al. (2023) investigated whether brief language training using VR (software with programmed scenarios/lessons used with Oculus Quests 2) could decrease the anxiety felt by students when speaking in a foreign language. From the pictures of the software provided and the descriptions in the paper, the software trialed seems similar to the one trialed at Momoyama Gakuin University. In the experiment, 69 students were given a questionnaire to measure their level of English language classroom anxiety, based on the scale of Kondo & Yang (2003). Students then studied using the VR headset, in two different scenarios, in which they simulated responding to questions posed by the audience after a giving a presentation, and making complaints at a restaurant. Finally, the students were given the same anxiety questionnaire again, and asked to respond to two open-ended questions about the software, hardware and the overall learning experience. When analyzing the data, the researchers found that students who entered the experiment with higher English ability (Over 310 TOEIC listening score) reported raised levels of anxiety after the experiment, opposed to the students with lower ability, whose anxiety levels seemingly decreased. The researchers posit:

It can be said that the participants with higher listening proficiency tend to set themselves the higher standard of skills. In other words, we could hypothesize that students with higher proficiency of English might have cognitive discordance between their actual

ability and their expectation. (Yamanaka et. al., 2023, p. 52)

In responses to the open-ended questions, the researchers note that, “Focusing on adjective, two words 楽しい [enjoyable] and しにくい [difficult to do particular thing] were significant with scores of 0.11 and 0.18. (p. 52)” We can interpret this as meaning that many students enjoy the novelty of the VR experience, but some improvements could be made in user-friendliness. The authors of the study provided no deep assessment of the quality of the learning material itself.

The study of Saito (2021) investigated whether taking conversation-based lessons in virtual reality would lead to a decrease in anxiety regarding speaking English and improved speaking performance. The software used was produced by Immerse Inc., delivered through the Oculus Go headset. Lessons are reportedly aligned to CEFR levels and users are transported to virtual spaces such as airports and restaurants to practice language that would be used in those spaces. Despite the small numbers of participants, the results indicated that practice in the virtual space lowers the affective filter of students, allowing more naturalistic acquisition.

...the students had less anxiety in speaking English after the VR lessons. The results imply that the students felt more confident when speaking in foreign language classes. They felt less pressure to prepare for their language class and were less nervous speaking a foreign language with native speakers. (p.134)

Second Language Acquisition in Virtual Reality: A Trial of.....

Slight overall improvement in TOEIC S&W Test scores among most participants were also observed.

Saito followed up this research in 2023, taking a constructivist approach to language education, by having students create lesson for other students and act as conversational partners for other students in the virtual space. The results seemed to confirm the results of the previous study, in which participants felt that virtual reality made them less afraid of making mistakes etc. However, some students felt the avatars' lack of facial expressions, and other non-verbal forms communication made conversations feel unnatural. Finally, this research shows how virtual reality can be used to increase student engagement through project-based collaborative learning.

The study of Kawasaki (2022) also used the learning software produced by Immerse. In the study 11 engineering students participated in 4 sessions in which they could practice conversations and debates in the virtual space. Although some students did report some tension (perhaps due to lack of familiarity with the software/hardware) students seem to enjoy the learning experience and see the value of such technology to improve volume and opportunities for input and output. The researchers also make a very valid point about the necessity of support and guidance for students, such as follow up vocabulary study to maximize the effectiveness of the virtual language practice.

The research of Kawasumi & Ishii (2023) compared studying English

on a smartphone to studying in VR. A group of six students participated in the study. The participants studied an identical lesson (hotel reception) on both a smartphone and a VR headset (Oculus Go). Although the sample size is too small to draw conclusions, students seemed to prefer studying with the headset, mainly due to the immersive experience, although they found it slightly difficult and tiring to use.

Overall, this research suggests that there is both potential and problems with current iterations of VR English learning, when used by Japanese university English language programs.

Procedure

Planning for this experiment began in 2022, when the following line was included in the yearly planning report of the Language Center, “Explore new ways of learning English through technology and implement a pilot program (and implement such learning as an elective class)”. From that time, research into various technologies and programs began by assessing available technology and contents, as well as research into similar use of technology in English language programs at other universities in Japan. Eventually, it was decided to trial the system produced by PlusOne Japan, Inc.

To trial the system, the Language Center offered short trials of the technology (on campus) on three days in the lunch break between classes and allowed 10 students to take the software home for a longer trial of two weeks. The program was promoted by posters, and an announce-

Second Language Acquisition in Virtual Reality: A Trial of.....

ment sent to all students through the university's LMS, M-Port. The total number of students selected to participate students in the short trials was 12, from 15 applicants. As for the two-week take-home trial, 24 students applied and 10 were selected to participate in the trial. Participants were selected based on their responses in the application materials to the prompt, "Please describe your English learning experience and learning goals in as much detail as possible." At the time of application, participating students were assured that the trial and responses to the questionnaire would not affect their grades in anyway, and agreed for their responses to be used for research purposes under the condition of anonymity in any publication.

The short trials were held on November 9th, 10th and 13th, 2023 on campus. Participating students were given brief instructions on how to use the technology. For this trial, the lesson selected was titled "The class is difficult". It was a beginner level class designed for learners with English ability equivalent to less than 400 points on the TOEIC[®] L&R Test. In the lesson, a student talks about difficulty with a particular class and receives some advice from other students.

On November 15th the selected students in the long trial were given an orientation on how to use the technology by a representative of the PlusOne company, delivered via Zoom. The students were given the VR headsets to take home on November 20th and returned them on December 3rd. Students were given the option of two courses of study, corresponding to their self-reported ability level:

Beginner level: A general conversation course, particularly designed for students

Intermediate level: A business focused course that also included some informal scenarios

Students were free to choose any of the available lessons from both courses. Some students who self-identified as beginner level also chose to study intermediate level (business-themed) lessons.

All participating students were instructed to complete a pre-experiment and post-experiment survey. The pre-experiment questionnaire was identical for both groups with questions regarding the students' history of English study, self-perceptions of ability etc. The post-experiment questionnaire was mainly concerned with the use of the VR headset and content. Participants completed the questionnaire anonymously. Students who participated in the on-campus trial completed a paper version of the questionnaires, while students in the take-home program completed the questionnaires electronically, via the function on the university's LMS.

The Software Tried

After exploring various options, it was decided that for this trial the most suitable product was Smart Tutor. Currently Smart Tutor offers 52 courses, each consisting of approximately 12 mini lessons. The lessons are said to be designed for various levels of ability. As can be seen from the advertising of the product, the target users of Smart Tutor are business people /professionals and much of the content reflects that. However, there are courses with the theme of study abroad, and lessons based

around various other social situations. Lessons are conversations, usually between 2~4 people with the student taking the role of one of the characters. Lessons can be used in the following regular modes: Listening Mode / Overlapping Mode (with cloze tasks) / Summary Tasks / Interpreting Mode (Japanese to English). The eponymous Smart Tutor is the AI functionality which employs ChatGPT as its engine. The Smart Tutor claims to be able to evaluate the output of students, such as pointing out mispronounced words, gauging speaking speed etc. This research does not attempt to assess the validity / reliability of the AI evaluation.

Also, the AI has the function of being able to spontaneously extend lessons. For example, if a student completes one of the pre-programmed lessons in which a business person arrives in Japan and talks about where they are from, and then switches to free talk mode, the AI avatar will ask the student more general questions about Japan.

Results and Analysis

Participants' English Ability and Background

Firstly, the backgrounds and preconceptions of the participants will be analyzed. All 22 participants in the study were university students of similar ages, approximately 19~23 years old. 20 of the participants responded to the questionnaires. As casual comparison of the questionnaire responses between the groups who joined the on-campus events and the take-home program showed no noticeable differences, the responses to the pre-experiment questionnaire will be analyzed together to give insight into the demographic.

Figure 1
Self-reported English Ability (Listening)

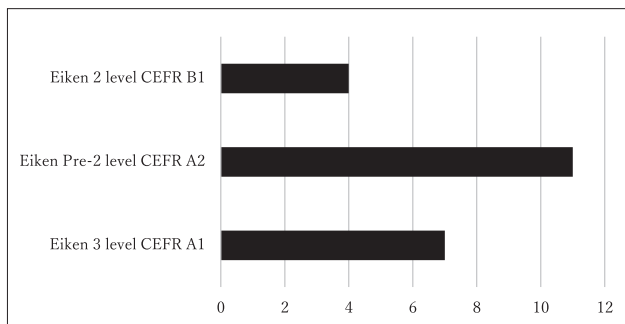


Figure 2
Self-reported English Ability (Speaking)

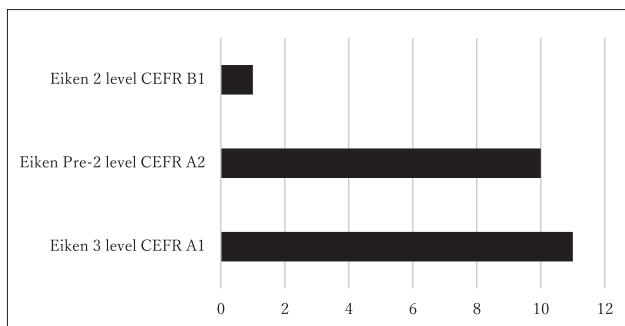


Figure 3
English Qualifications

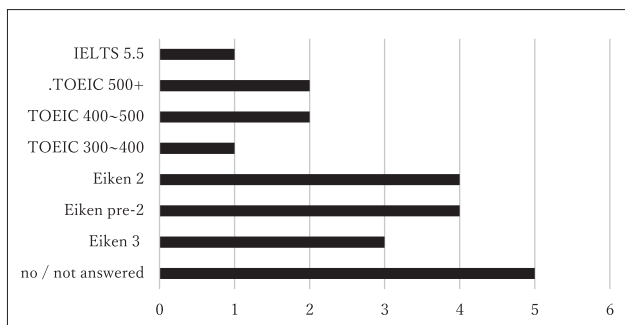


Figure 4
Regular Ways of Studying English

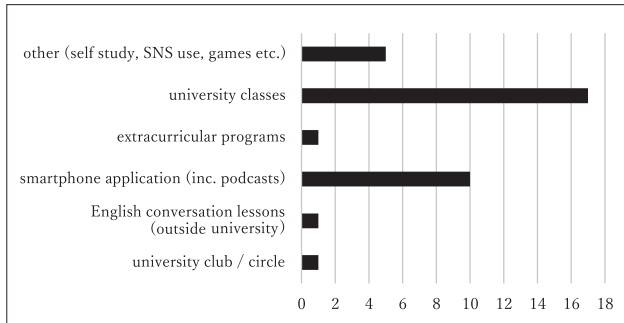
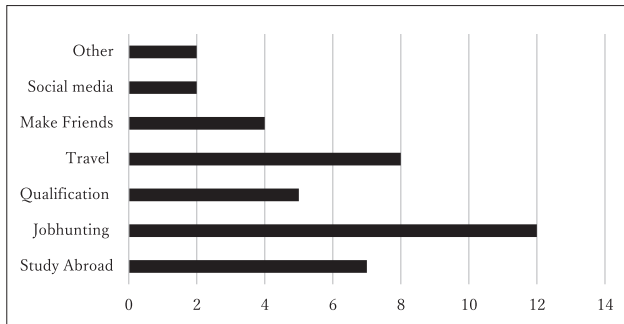


Figure 5
Purposes for Studying English



From the data, we can see that almost all of students who decided to participate in the study seem to be at the beginner / elementary level of English (Figure 3), evaluating their listening ability as slightly better than their speaking ability (Figures 1 and 2). They have pragmatic motivations for studying English, primarily to find a job and to travel abroad (Figure 5). However, it appears from the data in Figure 4 that they are doing very little study outside of regular university classes, although some report to be using smartphone applications, or encountering

English through social media, games etc.

It is worth noting that only three of the participants had previously attended Language Center events. This indicates that somehow the VR/AI learning trial attracted students who might not usually attend such events. It is possible to speculate that students with lower levels of confidence regarding their English, or introverted personalities that would make it difficult to attend more social events, were attracted to this program.

About half of the participants reported to have some experience of VR, mainly for gaming, but none had previously used VR to study English.

Enjoyment and Expectation

The Figures 7 and 8 show that participants enjoyed using the VR overall, with the students who only used it for a short time, reporting slightly more enjoyment. Also, only one student seemed disappointed

Figure 6
I Enjoyed the VR Experience

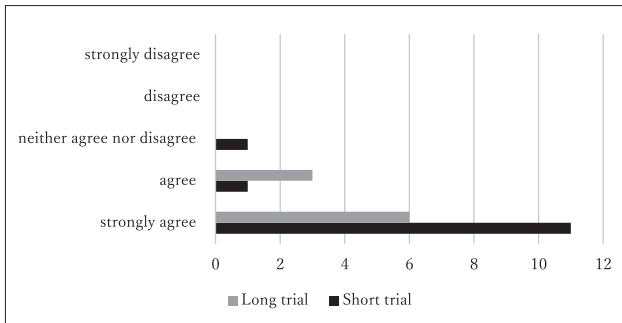


Figure 7
I Enjoyed the VR English Lesson(s)

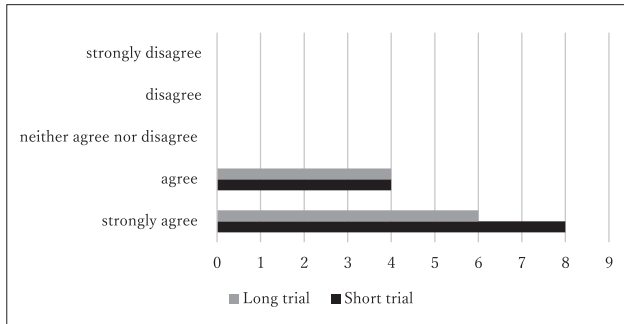
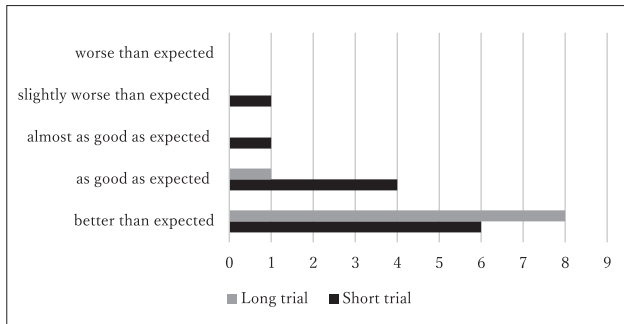


Figure 8
How did the experience compare to your expectations?



by the experience. It is clear that expectations of the experience were mostly met or exceeded and that participants had a positive view of the experience.

Positive Aspects of the Two-week Trial

As can be seen from the data in the figures above, the participants reported a positive overall experience. To allow deeper analysis of these responses, participants' written responses were classified into six sepa-

rate categories:

- Category One classifies references to the graphics, and immersivity of the VR space.
- Category Two is references made to the AI capabilities to evaluate and correct the output of users.
- Category Three refers to the sense of realism when interreacting with the avatars.
- Category Four collates responses that include the feelings or emotional state of the user while studying with the system, primarily ability to concentrate and lack of anxiety.
- Category Five collects comments that mention ease of use and convenience on the part of the participants, while Category Six counts comments regarding the contained educational materials themselves.

Table 1

Classified Positive Responses

(How did the experience compare to your expectations?)

What are the positive aspects of using this VR to study English independently?)

Category Number	Key Words / Phrase Summary	Representative Response	Number of Mentions
One (positive)	映像 Graphics 空間 Space 世界 World etc.	バーチャルの世界を楽しめた と思います <i>I could enjoy the virtual world</i>	7
Two (positive)	AI 評価 (AI Evaluation) 矯正 (Correction) アドバイス (Advice) Etc.	苦手な発音の傾向が分かる <i>I could know my bad pronunciation tendencies</i>	6
Three (positive)	人と話したような感覚 (The feeling of talking to a real person) 相手 (Conversational partner) Etc.	相手に伝えないといけない <i>I felt compelled to communicate.</i>	9
Four (Positive)	気持ち (Feeling /emotion)	間違いを気にせず <i>Don't worry about making mistakes.</i> 周りの目を気にせず <i>Don't feel concerned about surroundings / other people</i>	8
Five (Positive)	学習方法 (Way of Studying) 時間 (Time) Etc.	時間を気にせず気軽にできる <i>Don't need to be concerned about time</i>	4
Six (Positive)	学習内容 (Content)	自分の好きなお題を選び、学 習することができる <i>We can choose to study the topics that we want to</i>	2

When viewed overall, the participants seem to appreciate the immersivity of studying in the VR environment, and the realism of talking to an avatar in that 3D space, reporting increased concentration, and re-

duced anxiety. This indicates that the sense of realism provides students with a sense of needing to communicate, but the simulation provides a safe space, where students don't need to worry about misunderstandings or failure to communicate clearly or quickly, as they would when talking to a real person. The convenience and flexibility of being able to study at any time was also appreciated. It is worthwhile noting that many positive aspects of this trial explicitly mentioned by the participants echo those listed as selling points of the system on the Smart Tutor website (PlusOne Japan, n.d. 2024).

Negative Aspects of the Two-week Trial

Negative comments were classified into the same categories as above. The responses seen as negative did not contain any comments relating to Categories One, Two, Three or Five so they are omitted from the following table. Also, an additional category, Seven for negative comments relating to the device itself has been added.

Table 2**Classified Negative Responses***(How did the experience compare to your expectations?)**What are the Negative aspects of using this VR to study English independently?)*

Category Number	Key Words / Phrase Summary	Representative Response	Number of Mentions
Four (Negative)	気持ち (Feeling / emotion)	AIに慣れすぎて実際に人間と対話するときに緊張するかもしれない <i>If I get too accustomed to talking to the AI, I might still feel nervous talking to a real person</i>	3
Six (Negative)	学習内容 (Content)	英語はフォーマルなものが多かった <i>There was a lot of formal content</i> 細かいレッスンが受けられない <i>I couldn't study in detail</i>	6
Seven (Negative)	機器 (Device) VR酔い (Sickness)	家の外 (例: 図書館) などでは学習が出来ない <i>I can't use it outside of the house (in the library etc.)</i> VRに慣れていないと結構酔う <i>I am not used to VR, so I felt quite sick</i>	5

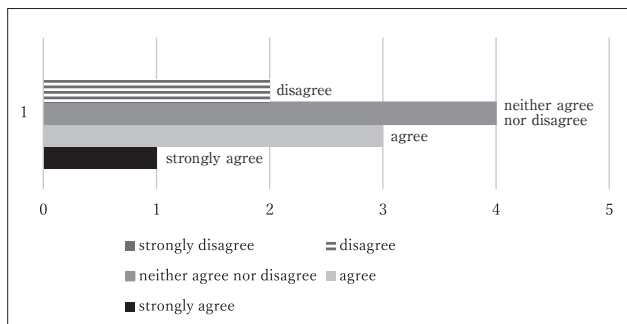
Overall, most of the dissatisfaction expressed was to do with the lesson content (too much business/formal content) and the device itself (lack of portability, time to get used to operating it etc.). Also, some participants worry if the lack of anxiety which they experienced while talking to the avatar would transfer to the real world. A few users did mention experiencing a kind of motion sickness, but they were in the minority.

Perception of Skill Development in the Two-week Trial

Primarily, the software and content are designed to allow opportunities for simulated spoken interactions, with the aim of enhancing con-

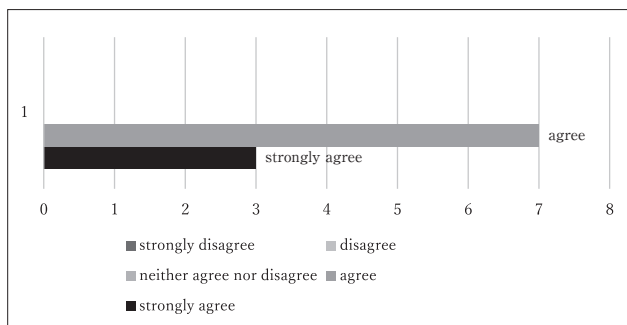
versational skills. Students were asked if they felt any improvements in their speaking and listening ability.

Figure 9
I got more comfortable listening to English



From the graph above, we can see that less than half of the participants felt that they became more comfortable listening to English during the trial. Comments from participants who responded positively to this question refer to the natural speed of the audio and the ability to practice every day as reasons for their improvement.

Figure 10
I got more comfortable speaking English



All of the participants reported an improvement in speaking ability. Among the respondents, having the opportunity to practice speaking and the feeling of practicing speaking in a realistic situation was the most common theme in the comments. Getting used to speaking at natural speed was also mentioned by two participants. Although one comment did mention improvement in vocabulary, this was the only comment that made reference to language knowledge. From this, we can hypothesise that participants felt like they were practicing language and activating preexisting knowledge, rather than studying grammar or vocabulary.

Continuation

Participants in the two-week trial were set the goal of studying for thirty minutes over 14 days for a total of 420 minutes. The administrator screen of the Smart Tutor software allows the number of times logged in and the total usage time to be monitored. The total study time of each participant is shown in Table 3.

Table 3
Total Study Time of Participants (minutes)

Participant Number	Study Time	Participant Number	Study Time
P1	210	P6	290
P2	386	P7	300
P3	269	P8	158
P4	540	P9	92
P5	407	P10	198

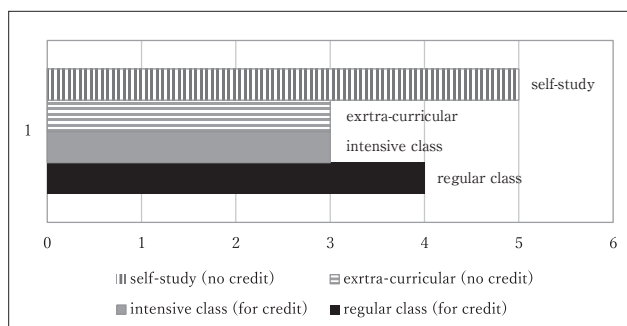
Unfortunately, only one participant was actually able to meet the study goal and the average study time was 289.4 minutes, meaning an

average of approximately 20.7 minutes per day. The trial was conducted during the semester, and participants referred to other commitments such as classes / assignments, part-time job, club activities etc. as the most common reasons for failing to meet the goal.

When asked if they would like to continue using the VR and Smart Tutor system to study English, the responses were lukewarm. No participants expressed a strong desire to continue using it. Half indicated they would like to use it from time to time. Four expressed no desire to continue using it and one reported wanting to try a different system.

As for how they would like to use it in the future, the results of the survey were inconclusive.

Figure 11
How would you like to continue using?



Considering the responses above, and the fact that only one student was able to meet the 420 minutes study goal, it seems that some sort of structure and supervision would be desirable if the university were to

continue using such forms of study. In practical terms, for credit regular classes and intensive classes that combine a teacher and classroom element with the convenience and novelty of the VR would seem the most effective and logical solution.

General Impressions and Future Goals after the Two-week Program

At the end of the survey given to participants in the two-week trial the following open-ended question was included: *What did you think of this program and what are your future goals for English language learning (in English classes at university/individually?)* The table below shows tendencies in the responses classified thematically into categories. Category One groups general reports of positive experiences while Category Two includes negative experiences. Category Three contains responses with a specific goal relating to English. Category Four counts responses that claimed the trial was a motivational trigger to study English, but without a specific goal.

Table 4

Classified Responses

(What did you think of this program and what are your future goals for English language learning (in English classes at university/individually) ?

Category Number	Key Words / Phrase Summary	Representative Response	Number of Mentions
One	Positive Experience	AI と会話できたり, その会話を採点・分析してもらったりしたことが, 楽しい英語学習につながりました <i>Having conversations with the AI, and having those conversations graded and analysed, made learning English fun</i>	7
Two	Negative Experience	バーチャル空間の中で動きがなかったため <i>We could not move around in the virtual space</i>	2
Three	Specific Goal	AI 先生の言葉を理解することができなかったので AI の言葉を理解できるくらいの英語力を付けることを目標… <i>I couldn't understand the AI teacher so I now have the goal to improve enough to do so</i>	7
Four	Motivational Trigger	英語学習の足掛かりになる良い機会でした <i>It was a good opportunity to get into studying English</i>	3

Seen as a whole, participants had an overall positive experience, which seems to have both given students a degree of confidence and motivation to continue working on their English after the trial was completed.

AI Interaction

One of the features of Smart Tutor is its integration of the ChatGPT's AI to provide spontaneous conversation, allowing for a different kind of

language practice than in the structured and scripted lessons. After a lesson is completed, users are able to select a mode in which they can continue talking about the topic of the lesson with the avatar, who will ask the user to answer automatically generated questions. During observations of the short trials, it seemed that there was a large gap in the level of difficulty between the content of the lessons and that generated by the AI, meaning participants struggled to maintain a conversation. Over the two-week trial, none of the participants reported being able to have regular naturalistic conversations with the AI. However, six did report being able to maintain a conversation to some degree. Four reported that interacting with the AI was preventively difficult.

Discussion and Conclusion

Limitations of the Study

As this research was primarily interested in the perceptions of university students' towards studying English in the VR environment, a deep analysis of the software such as educational content was not included. Also, no attempt was made to assess the accuracy and reliability of the AI provided feedback and evaluation or the level/content appropriateness of the AI generated free conversations. With the astoundingly rapid advance in technology in this field, such analysis and observations would only have temporary validity.

Also, as the sample size was extremely small it is unclear to what extent the results can be projected onto a larger population.

Discussion of Key Research Questions

Returning to the key research questions, the first two are possible to discuss together.

1. How ready are students to embrace such forms of digital learning?
2. Do students find the software and hardware easy to use?

Firstly, students do seem ready to embrace digital learning to some degree. This trial attracted a different demographic of students to the Language Center's event. In the past, students with higher confidence and ability in English were the majority of participants in events. This research supports the findings of Kawasumi & Ishii (2023) Yamanaka et. al. (2023), Saito (2021) which emphasize the potential of VR and AI to provide realistic language practice without the perceived pressure of real face-to-face interaction in the foreign language and could provide a gateway for less confident students to become more active and ambitious in their language study. Students overall reported feeling less anxiety when practicing language in the virtual space. The suggestion that students with higher English ability may feel higher levels of anxiety when using such education technology reported in Yamanaka et. al. (2023) was not supported by this research.

The majority of students did not report difficulty with the interface of the software itself, although a small number did find it troublesome to boot and wear the device. A small number of students did report feelings of nausea while using the VR, but these were also in the minority.

Overall, the immersive nature of the technology can be seen as an attraction rather than a deterrent to study.

The third research question, “Do students see an educational benefit in using such software?” is less easy to answer with confidence due to the short length of the trials. The responses do indicate that students enjoy the realism of the VR environment, enjoy interacting with the AI and appreciate the opportunity to receive instantaneous feedback and evaluation. Such individual feedback is difficult to receive in regular group classes.

Students also see the flexibility of being able to study at any time, and being able to select the lesson topic as beneficial. As we explore the capabilities of VR as a supplement or replacement option for online programs such as the online study abroad programs. The study of Legge (2023) indicated the scheduling difficulties related to limited class times and time difference between countries made it difficult for some students to continue. Comments from participants such as *時間を気にせず気軽にできる* (*Don't need to be concerned about time*) indicate the busy university students appreciate the flexibility of a totally digital and on-demand learning option.

According to the responses, this learning style has a more noticeable effect on speaking ability than listening ability, at least over the short term. The participants seemed to gain some degree of confidence in speaking. Considering this alongside comments from participants such

as, 人と話したような感覚 (*The feeling of talking to a real person*) and 相手に伝えないといけない (*I felt compelled to communicate*) indicate that to at least some degree the conditions and opportunities to engage in communication in the L2 for fostering communicative ability championed by proponents of interactionist approaches to language acquisition (Long, 1981, Ellis, 1991) were at least replicated to some degree. As a caveat, a small number of participants did express concern whether the communicative competence and confidence gained in the VR environment would completely transfer to real life situations.

The overall impression is that students perceive the activities as a kind of “practice” or “training” rather than a “lesson”. This may be in part due to the nature of the learning materials in the Smart Tutor software, which are function and situation-based, rather than form-based. While participants generally did report perceived improvement in abilities, there was almost no mention of language knowledge such as vocabulary or grammar. While this could be partially due to the fact that there was no explicit question about this, it could also be seen as supporting assertions made by researchers such as Kawasaki (2022) that support for structured revision and explanation of content (such as that from a teacher) would maximize the learning benefits.

This leads to the final question, which was, “Considering the reactions of students, how can an institution use new technology to supplement the existing English language curriculum?” Students seem to see value in practicing their language ability in a realistic but low-pressure envi-

ronment. Also, the software would lend itself to educational gamification, providing tracking, achievement points etc. which encourage active participation and continued study. However, it seems that students would benefit from some more guidance on how to use the technology, or face-to-face lessons or other events built upon the lesson content. With the current technology, a kind of hybrid course that combines focused practice of the VR with explanation of the contents or more challenging productive activities would be the most viable scenario. Seemingly, students would benefit from some guidance or scaffolding to assist in better utilizing the AI for free conversation practice. If used in this way, students who lack confidence, or experience foreign language anxiety, could use such technology as a low-pressure gateway to productive language practice, and use the confidence and ability developed in the virtual space in regular classes or out in the real world.

Conclusion and Future Research

As a whole, the researchers concluded that overall, the results of this trial show that VR and AI technology are seen as stimulating and useful tools for Japanese university students studying English as a foreign language. Currently, the cost of the headsets would limit the number of units that the university could provide to students, especially for taking home.

Moving forward, the university hopes to hold similar short-term trials, incorporating VR/AI into regular lessons with a teacher, and also longer-term trials to attempt to gauge the benefits of use in terms of actual language development, and students' engagement over a longer time period.

References

- Auliawan, A. G., & Ong, S. (2020). The usage of AI robot in English language teaching for city revitalization case study: Toda Daini Elementary School, Toda City, Saitama, Japan. In *IOP Conference Series: Earth and Environmental Science* (Vol. 436, No. 1, p. 012022). IOP Publishing. 10.1088/1755-1315/436/1/012022
- Chuo University. (2020) 国際情報学部の斎藤ゼミにおいて, *Immerse Inc.* が提供する VR の英語授業を体験しました. Retrieved from: <https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/itl/news/2020/12/52087/>
- Deakin University (2014). *IBM Watson now powering Deakin. A new partnership that aims to exceed students' needs.* <http://archive.li/kEnXm>
- Ellis, R. (1991). The interaction hypothesis: A critical evaluation. In *Regional Language Centre Seminar* (pp. 1-46). Singapore.
- Goodwin, S., & Naismith, B. (2023). *Assessing listening on the Duolingo English Test.* (Duolingo Research Report DR-23-03 DRR-23-03). Duolingo. <https://duolingo-testcenter.s3.amazonaws.com/media/resources/listening-whitepaper.pdf>
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70 (2), 125-132. <https://doi.org/10.2307/327317>
- Kawasaki, N. (2022). A pilot study on the VR English program for engineering students. *宮崎大学工学部紀要* 51, 147-152. <https://miyazaki-u.repo.nii.ac.jp/record/2000021/files/No51PP147-152.pdf>
- Kawasumi, S., & Ishii, Y. (2023). Comparative study of English learning using virtual reality and a smartphone application. *千葉大学教育学部研究紀要 = Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University*, 71, 99-105. <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900121724/S13482084-71-P099.pdf>
- Kondo, S., & Yang, Y.-L. (2003). The English language classroom anxiety scale: Test construction, reliability, and validity. *JALT Journal*, 25 (2), 187-196. <https://doi.org/10.37546/JALTJJ25.2-4>

- Krashen, S. D. (1986). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Legge, T. (2023). Online study abroad—A case study of Japanese university students' experiences of studying English online. *人間文化研究*, 19, 97–132. https://www.researchgate.net/publication/374476768_Online_Study_Abroad_-_A_Case_Study_of_Japanese_University_Students'_Experiences_of_Studying_English_Online
- Long, Michael H. (1981). Input, Interaction, and Second-Language Acquisition. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 379 (1), 259–278. <https://doi.org/10.1111/j.1749-6632.1981.tb42014.x>
- Nazari, N., Shabbir, M. S., & Setiawan, R. (2021). Application of Artificial Intelligence powered digital writing assistant in higher education: randomized controlled trial. *Heliyon*, 7 (5). DOI: 10.1016/j.heliyon.2021.e07014
- PlusOne Japan (N.D) *VR英会話 スマート・チューター*. Retrieved April 24: https://www.plusone.space/?utm_source=google&utm_medium=cp-c&utm_campaign=brandbroad3&gad_source=1&gclid=Cj0KCQjwiMmwBhDmARIsABeQ7xQ1w_za2CG39DpBFN8lkXbcHEAIYtHPoKlvLF8Xx3RB-Pk4xd30Eue0aAqbuEALw_wcB
- Popenici, S. A & Kerr, S. (2017). Exploring the impact of artificial intelligence on teaching and learning in higher education. *Research and Practice in Technology Enhanced Learning*, 12 (1), 22. DOI: 10.1016/j.apmr.2014.03.036
- Ruan, S., Jiang, L., Xu, Q., Liu, Z., Davis, G. M., Brunskill, E., & Landay, J. A. (2021, April). Englishbot: An ai-powered conversational system for second language learning. In *26th International Conference on Intelligent User Interfaces* (pp. 434–444). <https://doi.org/10.1145/3397481.3450648>
- Saito, Y. (2021). Potential and challenges of VR in English education. *KOTESOL Proceedings 2021*, (pp. 127–136). https://koreatesol.org/sites/default/files/pdf_publications/KOTESOL.Proceedings.2021.pdf
- Saito, Y. (2023). Students' creation of VR English lessons: Adopting a constructivist approach. *国際情報学研究*, 31–47. <https://chuo-u.repo.nii.ac.jp/>

record/18036/files/2435-855X_3_31-47.pdf

Yamanaka, T., Miyazaki, Y., Yamazaki, A. K., Murakami, K. H., Kimura, S., Yamashita, M., & Kondo, Y. (2023). Testing virtual reality for eliminating Japanese university students' English-speaking anxiety: Cases of international conference and restaurant. *International Journal of Learning and Teaching*, 9, 49-66. DOI: 10.18178/ijlt.9.1.49-55

韓国の選挙演説における ディスコース・ストラテジー

—— 談話を作り上げる言語的・非言語的な手がかりを中心に ——

韓 娥 凜

1. はじめに

「존경하는 국민 여러분 (尊敬する国民の皆様)」

これは韓国の政治演説の冒頭で必ず耳にすることのできる呼びかけのことばである。普段は会うことのない政治家や高位官僚として勤めている人でも、選挙のときになると国民の助けを求め、昼晩を問わずに熱く支持を訴える。この訴えのことばだけを見ると、政治家（または政治家になろうとする人）は国民を本気で愛し、我々の生きる社会をより良いものにしていくための使命感に満ちているようにもみえる。しかし、選挙のときに掲げていたマニフェストを当選後に平気で破るなど、態度が一変することも多いため、しばしば「政治家は胡散臭い」「ことばで有権者を騙そうとしている」といった批判の対象になる。政治家が「何」を「どのように」語っているかに注目し、そのメッセージを鵜呑みにするのではなく、批判的にみる姿

キーワード：政治談話，日韓対照言語学，ディスコース・ストラテジー，文脈化の手がかり，説得

勢が重要であるが、ことばの裏に潜む意図に気付くことはなかなか難しい。

本研究の狙いは、言語学者の立場から政治家のことばを観察し、実際はどのようにして談話を作っていくのか、そのメカニズムについて明らかにすることである。政治談話を対象とし、言語学のさまざまな観点から分析することによって政治家の表面的な意図の把握はもちろん、隠された意図まで批判的に考察していく土台が作られることが期待される。このような試みによって、実は我々の生活に密接している「政治」について正しく把握し、政治家のことばが持っている論理展開の仕組みを把握する際にも貢献できると考えられる。

2. 研究の目的

出水（2010）は「政治家の演説は公的な言語データであり、一般読者に訴える力を持っているため、言語学者が分析対象として扱う価値がある」と述べている。従来、政治談話は政治学や社会学などの諸分野で主に扱われてきたが、最近は出水のように言語学からアプローチする必要性を訴える声も高まっている。政治談話を言語学的なアプローチから解釈した研究としては、他にも鈴木・影浦（2008）、石川（2010）、東（2010）などが挙げられる。鈴木・影浦（2008）と石川（2010）の研究は政治演説のコーパス資料を定量的な分析手法を用いて考察したものである。主に、使用語彙に注目し、歴代首相の語彙選択について比較分析を行った。東（2010）の研究は、選挙演説にみられる政治家のコミュニケーション運用上の特徴を取り上げ、その中にみられるスピーチスタイルについて分析を行った。東の研究でも日本の歴代首相のスタイルを比較し、レポートトークとラポートトークなどの観点を取り入れ、政治家の演説特徴を明らかにした。

政治談話のある言語現象を調べるための分析データとして扱った研究は、松田（2008）をはじめ、平田・中村・小松（2013）など、数多く挙げ

られるが、政治言語の仕組みやディスコースの目的、背景のような言語外的なコンテキストと関連付けて分析した研究はまだ十分に行われていない点が指摘できる。しかし、上述した出水（2010）や東（2010）も指摘しているように、言語学者の分析ツールを十分に生かし、政治談話を構成するさまざまなことばの選択についてより客観的かつ批判的なアプローチから分析する必要がある。このような流れの中で、本研究では戦略的なディスコース構築に焦点を当て、政治家がいったいどのようにして自分の主張を展開し、聴衆に受け入れられるような談話を作り上げていくのかについて明らかにする。

本稿では、ケーススタディとして2012年12月に韓国で行われた大統領選挙当時の応援演説（演説者：ノ・フェチャン議員¹⁾）1本を取り上げ、その分析結果を示す。今回の分析に用いたデータは約5分程度の演説で、音声と映像ともに収録できたものである。²⁾

3. 分析結果

本稿で注目する分析項目は、問いかけ文（3.1節）、ことば遊び（3.2節）、対立関係の論理構成（3.3節）、ジェスチャー（3.4節）である。以下の各節では用例とともに演説における特徴について記述する。

3.1 問いかけ文

分析に用いたデータからは演説の途中で聴衆に質問するような問いかけ文の使用が多くみられた。次の例（1）をみられたい。³⁾

- (1) 솔직히 말해서 저는 박근혜 후보의 수 많은 공약 중에서
이거 하나 만큼은 꼭 실현 됐으면 좋겠다는 공약이 있습니다.
그게 뭔지 아십니까? 박근혜 후보는 이렇게 약속했습니다. 12
월 19일 이번 대선에서 패배하면 정, 정계 은퇴하겠다고 약속

했습니다. (05) 이 공약이 실현 될 가능성이 하루 하루 높아져 가고 있습니다. (06) 박근혜 후보가 패배해서 정계 은퇴하면 새누리당 두 조각 세 조각 풍지박산날 것 입니다. 그러면 민주당 통합당이 지금 원내 제 1 당에서 집권 여당이 될 겁니다.(04) 원내 3 당인 진보 정의당이 제 1 여당이 될 겁니다 (03) 얼마나 멋있습니까? 이게 바로 정치 혁신입니다. 이게 바로 새정침니다. (03)

正直, 私はパク・クネ候補の数多くのマニフェストの中で, これだけは必ず実現してほしいという公約があります。それが何かご存知ですか?パク・クネ候補はこのように約束しました。12月19日, 今回の大統領選挙で負けたら政界を引退すると約束しました。 (05) この公約が実現される可能性が日々高まっています。(06) パク・クネ候補が負けて政界を引退すると, セヌリ党は2つ, 3つとバラバラになるでしょう。そうすると, 民主統合党が今の院内第一野党から執権与党になります。(04) 院内第三党の進歩正義党は第一与党となります (03) どれだけステキな話ですか?これがすなわち, 政治革新です。これが新しい政治なんです。 (03)

上記の例では, 対立する側の候補がもし選挙に負けたら自ら政界を引退すると宣言したことについて言及している。演説者はこの話を持ち出す前に「(対立する側の候補者に) ぜひ守ってほしいマニフェストがある」と述べた後, 聴衆に向かって「それが何かご存知ですか?」と問いかけている。応援弁士として聴衆の前に立った演説者がなぜ相手側の候補者のマニフェストの話を持ち出すのか聴衆が疑問に思うところで, 「負けたら政界を引退する」といった発言を引用して紹介している。このような問いかけ文の使用は, 一方的に談話を構築していく街頭演説において直接には会話に参

加しない聴衆を話の中に巻き込み、関与 (involvement) させる働きをする。Tannen (1989) によると、「関与 (involvement)」とは、聞き手に興味をもたせ、惹きつけることによって談話に直接・間接的に参加させる戦略的な行為である。上記で挙げた例 (1) も、突然対立する候補が今回の選挙で負けたら引退するといった過去の発言を引用し、そのことが自分の応援する候補および所属政党にとってどのようなメリットがあるのかについて語る展開を成している。

演説者はその後、「相手側の立候補者が政界を引退する⇒現在の与党はばらばらになる⇒自分たちが第一与党となる」といった自分の理想を語った後、「얼마나 멋있습니까? (どれだけステキな話ですか)」ともう一度聴衆に問いかけている。ここでも「自問自答」の展開になっており、問いかけた直後に「이게 바로 정치 혁신입니다. 이게 바로 새정집입니다. (これこそ政治革新です。これこそが新しい政治なんです)」といった政権交代の意義を語る談話展開が見られている。このように、自問自答の形で聴衆を巻き込み、自分の意見を述べるディスコース・ストラテジーは演説の中で多数用いられている。次の例を見られたい。

- (2) 존경하는 시민여러분. 대한민국 대통령이 모두 9 명이었습니다. 그 중에 쿠데타로 집권한 사람이 두 명입니다. 누굽니까? 박정희와 전두환입니다. 체육관에서 뽑힌 대통령이 누굽니까? 두명입니다. 누굽니까? 박정희, 전두환입니다.
尊敬する市民の皆さま、大韓民国大統領は全部で9人いました。その中でクーデターで政権を担った人は2人です。誰ですか? 박·チョンヒとチョン·トゥファンです。体育館で選ばれた大統領は誰ですか? 2人です。誰ですか? 박·チョンヒとチョン·トゥファンです。

上記の例 (2) の発言を理解するためには、韓国の近現代史および政治

状況に関わる背景知識が必要である。今回の談話資料で演説者が応援しているムン・チェイン候補は、1963年から1979年まで独裁政治を行ったパク・チョンヒ政権に反対し、民主化運動に積極的に関わっていた経歴がある。一方、対立する側の立候補者はその独裁政治の主役であったパク・チョンヒ大統領の娘であるパク・クネ候補であった。そのため、演説ではパク・チョンヒ大統領への批判も主に取り上げられていたが、上記の例(2)はそのような歴史的な背景を提示し、話題を持ち出している。批判の対象である対立する側の立候補者は、クーデターで政権を握り、違法選挙を通じて独裁政治を行った大統領の娘であることを強調し、大統領として不適格であると主張している。その際、韓国国民にとっては広く知られている歴史的事実をもう一度聴衆に問いかけ、質問することによって該当する人物名を繰り返し言及している。このことから問いかけ文の使用は聴衆を談話の中に巻き込み、参加させるかのように見せる働きだけではなく、演説者が強調したい話に焦点を当てるような役割も果たしていることが分かる。つまり、問いかけ文は政治家が一方的な話し手として存在し、単独で談話を構築していく街頭演説において不特定多数の聴衆を巻き込み、伝えたいメッセージを強調する際に用いられる有効な手段として働くのである。

3.2 ことば遊び

本節では、政治家が聴衆に印象付けるためにどのような表現を選択し、話を展開していくのかについて述べる。今回の分析データからはことば遊びの使用が目立っていた。韓国の政治文化の特徴の一つとして与・野党を代表するカラーが存在することが挙げられる。政治宣伝に使われるポスターや選挙運動をする際に政治家が着るジャケット、ネクタイなどのカラーも各政党を代表する色に揃えることが一般的である。

1998年第15代大統領選挙でキム・テジュン候補による政権交代が行われ

るまで、第一与党であったハンナラ党（現、国民の力党）は青を、野党であった民主党（現、共に民主党）は緑色を政党の代表カラーとして用いていた。5年の大統領任期が終わった後、再び行われた選挙でハンナラ党のイ・フェチャン候補は当時、与党である民主党のノ・ムヒョン候補に負け、政権交代に失敗した背景がある。この選挙での敗北を挽回するために、ハンナラ党は新しい世界という意味の「セヌリ」党に党名を変え、党を代表する色も「青」から「赤」に変更したのである。このような色彩による政党のイメージは演説の中ではどのように表現されているのか。次の例(3)をみられたい。

(3) 박근혜 후보의 경제민주화 새빨간 거짓말입니다. (0.3) 그래서 새누리당 플랜카드가 전부다 새빨강입니다. 그 사람들 목도리도 새빨강입니다. (0.3) 새빨간 거짓말만 해댁니다.

パク・クネ候補の経済民主化、真っ赤な嘘です。(0.3) だからセヌリ党の横断幕はすべて真っ赤なんです。あの人たちのマフラーも真っ赤なんです。(0.3) 真っ赤な嘘ばかり付いています。

上記の(3)は、対立する候補について批判しながら「赤」という色彩語彙を用いて「真っ赤な嘘」という主張に結び付けている。セヌリ党の党員が着る服や宣伝の横断幕などが赤色であることを「真っ赤な嘘」に繋げ、聴衆に「セヌリ党」→「赤」→「真っ赤な嘘」というイメージを与え、相手の立候補者を批判するプロセスを成している。

このように、ある政党を代表するカラーを否定的なイメージを持つ表現(上記の例(3)では「真っ赤な嘘」と結びつけることによって「批判」や「否定」の談話を構築していくことができる。聴衆に「批判」という話し手の伝達意図を把握できるようにする手がかりを提供し、ディスコース・ストラテジーとして用いていることが分かった。次の例(4)もみられたい。

(4) 대한민국헌법 제1조1항이 됩니까? 대한민국은 민주공화국입니다. 그렇죠? 그런데 투표해야 민주공화국입니다. 투표하지

않으면 대한민국은 민주공화국이 아니라 만주공화국입니다. 만주군관학교나온 사람과 그 후예들이 지배하는 만주공화국 말이 됩니까?

大韓民国憲法第1条1項は何ですか?大韓民国は民主共和国であるということです。そうですね?しかし,投票をしてこそ民主共和国です。投票しないと,大韓民国は民主共和国 'ミンジュコンファクック'ではなく満州共和国 'マンジュコンファクック'です。満州軍官学校出身の人とその跡継ぎたちが支配する満州共和国,ありえますか?

例(4)では,対立する候補であるパク・クネの父親であるパク・チョンヒ元大統領について言及している。以前,父親であるパク・チョンヒ元大統領が日本の満州国の軍官として働きつつ,親日派として活動していたことを指摘し,その娘であるパク・クネ候補が大統領になることはありえないという主張を展開している。もし,パク・クネ候補が当選した場合,韓国は「民主共和国 (ミンジュゴンファグック)」ではなく「満州共和国 (マンジュゴンファグック)」になると述べている。このように「民主共和国」の発音から母音 [i] を [a] に変え,「満州共和国」と表現するこのことは遊びも今回の演説においては対立する候補を否定するメッセージを伝えるための一つのディスコース・ストラテジーとして用いられていることが分かる。このようなディスコース・ストラテジーにより,演説者はパク・クネ候補への批判だけではなく,その父親であるパク・チョンヒ元大統領まで同一化し,一つのフレームの中に入れることができ,自分の応援する立候補者へ投票してほしいという主張を支えている。例(3)の色彩語彙の使用と同じく,このようなことば遊びの語彙選択もディスコース・ストラテジーとして用いられており,聴衆に明確なイメージを与えることができ,聞き手である聴衆が演説者の主張を理解する際に効果的な手がかりとなりうる。

3.3 対立関係：両極化のスキーマ (polarization schema)

本節では、選挙演説におけるウチ（正）とソト（負）の対立関係に注目し、用いられた対比構造がどのようにして談話または、談話内のイデオロギーを構築していくかについて明らかにする。

van Dijk (1995) によると、互いに異なるイデオロギーを持った集団が自分の利益や目的を叶えようとする際に生まれる葛藤や対立の状況において、自分とその相手をどのように表現するかは注目する必要がある。「両極化のスキーマ (polarization schema)」とは、「ウチ (we-code)」と「ソト (they-code)」のように対立する関係を指すが、よく「ウチ」は肯定的なものとして評価され、「ソト」を否定的なものとして捉えることが多い。この肯定的な自己提示と否定的な他者提示はイデオロギーの本質であり、自分と他人に対するイデオロギーが構築される。この概念を政治選挙の場面に取り入れて考えてみよう。政治選挙は、それぞれの政治的なイデオロギーを持っている集団の代表が立候補し、自分または自分が属した集団の考え方や方針などを有権者に訴え、投票してもらうという目的を持つ。そのため、「選挙で勝つ」という同じ目標を持った複数の集団が生じ、必然的にウチ（正）とソト（負）の対立関係を作り出す。今回、分析に用いた街頭演説のデータからもこのような対立関係の設定が多くみられた。次の例 (5) をみられたい⁴⁾。

- (5) 이번 선거는 문재인 후보와 박근혜 후보 두 사람만의 대결이 아닙니다 이번 선거는 재벌상권과 골목상권의 대결입니다. 재벌 유통마트와 동네 슈퍼의 대결입니다 (0.3) 누가 이겨야합니까? (0.3) 동네 슈퍼가 이겨야합니다. 서민 경제가 이겨야합니다. 그래서 문재인이 이겨야합니다. (0.3) 문재인이 이길려면은 투표해야합니다. 반드시 투표해야합니다.

今回の選挙はムン・チェイン候補とパク・クネ候補二人の戦い

だけではありません。今回の選挙は財閥の商圈と路地商圈（小規模商圈）の戦いです。財閥の流通スーパー（大手企業が経営する大型スーパーマーケット）と町内の零細小売店の戦いなんです。（0.3）誰が勝つべきですか？町内の零細小売店が勝たなければなりません。庶民経済が勝つべきです。だからムン・チェインが勝つべきです。（0.3）ムン・チェインが勝つためには投票しなければなりません。必ず、投票しなければなりません。

上記の例では対立する側の立候補者であるパク・クネ候補と自分が応援しているムン・チェイン候補をそれぞれ「財閥の商圈」と「路地商圈（小規模商圈）」に投影し、対立するものとして表現している。パク・クネ候補が所属していたセヌリ党の経済政策は、新自由主義を推進し、一般庶民の生活とはかけ離れたものであり、財閥に有利なものであることを指摘し、自分が支持するムン・チェイン候補を、庶民を代表するもの、「庶民経済」そのものとして表現している。このような対比は以下の例（6）からも確認できる。

(6) 체육관 선거로 당선된 세력과 직선제를 쟁취한 세력이 이번 대선에서 싸우고 있습니다. 누가 이겨야합니까? (0.2) 문재인입니다. 직선제가 이겨야합니다.

体育館選挙で当選した勢力と直接選挙を勝ち取った勢力が今回の大統領選挙で戦っています。誰が勝つべきですか？（0.2）ムン・チェインです。直接選挙が勝つべきなんです。

例（6）の「体育館選挙で当選した勢力」とは、パク・クネ候補の父親であるパク・チョンヒ元大統領を指している。独裁者であったパク・チョンヒ元大統領は政権維持のため、国民による直接選挙ではなく、任意で体育館に投票所を設置し、統制と監視の中で投票所とし、限られた人による選挙を行うことで政権を維持していた。今回の分析資料から演説者のノ・フエチャンが応援するムン・チェイン候補はその当時、パク・チョンヒ元

韓国の選挙演説におけるディスコース・ストラテジー

大統領の独裁政治に反対し、直接選挙を求める民主化運動を進めていた背景がある。このことから「体育館選挙で当選した勢力」とはパク・チョンヒ元大統領とパク・クネ候補の同一化を図った発言であり、「直接選挙を勝ち取った勢力」とはそれに対抗してきたムン・チェイン候補を対比的に示し、肯定的な評価に誘導していることが分かる。このような対立関係の設定は、今回分析した演説のメインメッセージとなる「パク・クネ候補はなぜダメなのか」という批判の根拠を与えるのに効果的である。また、自分が応援しているムン・チェイン候補に投票してほしいという意図を有権者に効果的に伝えていると考えられる。今回の分析データから確認できた両極化のスキーマをまとめると以下の図1の通りである。

正 (+) ←—————→ 負 (-)	
ムン・チェイン候補	パク・クネ候補
路地商圈 (小規模商圈)・町内の零細小売店	財閥の商圈・大手企業が経営する大型スーパーマーケット
庶民経済	—
直接選挙を勝ち取った勢力	体育館選挙で当選した勢力

図1 応援演説における両極化のスキーマ

演説者は選挙で対立している「ムン・チェイン候補」と「パク・クネ候補」を正と負の両極に置いている。この対立関係を浮き彫りにする言語的装置として「庶民経済」対「財閥の商圈」、「直接選挙を勝ち取った勢力 (民主化運動)」対「体育館選挙で当選した勢力 (独裁政権)」といったフレームが作られている。両候補の対立関係に、有権者の生活や経験と関係している別の情報を加え、談話の中で「正」と「負」の対立関係を目立たせているのである。

つまり、自分が応援する候補は肯定的かつ守るべき存在として描写し、相手側の対立する候補者は、庶民の生活とはかけ離れた財閥の味方であり、独裁政治の残滓であることを浮き彫りにし、否定的に描写している。政治

家による両極化のスキーマの設定は、全体の談話内容を構成し、展開して
いくだけではなく立候補者がある集団の代表として取りたて、それが持つ
ているイデオロギーを埋め込むことによって聴衆の支持を導こうとする点
に注目する必要がある。このような対立関係の設定は、言語的な装置だけ
ではなく、ジェスチャーの使い分けのような非言語的装置とも一緒に用い
られることが確認できたが、これについては次の3.4節で詳しく取り上げる。

3.4 非言語的装置としての「ジェスチャー」

本節では、非言語行動としてのジェスチャーに注目する⁵⁾。ジェスチャー
単独使用を見るだけにとどまらず、言語表現がジェスチャーと同時に用い
られる際にどのような効果を生み出すのかについても含めて考察する。

分析の手順としてジェスチャーがどのような言語形式とともに用いられる
のかについて確認した後、談話の理解を助けるメタ情報としてどのように働
いているのかを明らかにする。同時に、言及内容（または対象）に関する話
し手の態度をジェスチャーでどのように表しているのかについても確認する。

3.4.1. メタ情報伝達のジェスチャー

今回の分析データからは手の上げ下げから、手の平、こぶし握りなどの
さまざまなジェスチャーの使用がみられた。このようなジェスチャーの形
に関係なく、すべてのジェスチャーがどの言語形式と同時に用いられてい
るかを確認した結果、以下のようなことが分かった。

- 1) 指示詞 + ジェスチャー
- 2) 数詞 + ジェスチャー
- 3) 疑問詞 + ジェスチャー

特に「こ・そ・あ」系の指示詞や「何」「誰」などの疑問詞と同時にジェスチャー
が用いられることが多かったが、具体的には以下のような例が挙げられる。

(7) 正直、私はパク・クネ候補の数多くの公約の中で、指1本を挙げながら これだけは必ず実現してほしい公約があります。それが何かご存知ですか？



図2 指1本を挙げながら

例(7)は、「これだけ」は実現してほしいという話をしつつ指1本を立て、「これだけ」という言語形式を視覚的に補助する手段として用いていることが分かる。他にも以下の図3から図5のような指示詞とともにジェスチャーが用いられていることが確認できた。



図3 手の平を広げて



図4 手を強く振りながら



図5 手を挙げながら

(8) パク・クネ候補は 手の平を広げて このように約束しました。12月19日、今回の大統領選挙で負けたら 手を強く振りながら 政界を引退すると約束しました。(0.5) この公約が実現される可能性が日々高まっています。(0.6) パク・クネ候補が負けて政界を引退すると、セヌリ党は2つ、3つとバラバラになるでしょう。

(9) 手を挙げながら そうすると、民主統合党は今の院内第一野党から執権与党になります。

他にも、話の中で数字を言及する際にそれを表すジェスチャーが同時に用いられることもあった。上述した例(7)からは直接的な数詞は用いられていなかったが、「-だけ」という副助詞からそれを補助するものとして指1本を挙げていることが分かった。次の(10)は「2時間」という時間を表す数詞が言語表現として用いられているが、演説者はそれと同時に指2本を立てるジェスチャーをとりながら聴衆がメッセージを読み取る際に理解を助ける手がかりを与えるディスコース・ストラテジーを用いていると考えられる。

(10) 大型スーパーマーケットの営業時間を「指で2を示しながら」夜2時間、「再び指で2を示しながら」朝2時間減らして、小規模商圈を生かす、商店街を生かそうとしているのに、セヌリ党が反対して（法案が）通過できていません。



図6 指で2を示しながら

このような数詞 + ジェスチャーの組み合わせパターンはほぼ同時に行われることが多かったが、具体的な数値を言及する前にジェスチャーが先に示される例も1回のみではあるが、今回の分析データから確認された。次の例(11)をみられたい。



図7 両手でマイクを握りながら



図8 指で2を示しながら

(11) 「両手でマイクを握りながら 尊敬する市民の皆さま、大韓民国大統領は全部で9人いました。その中でクーデターで 指で2を示しながら 政権を担った人は2人です。誰ですか？パク・チョンヒとチョン・トゥファンです。

例(11)をみると、発話を開始した時点では両手を揃えていたが、「9人の歴代大統領のうち、クーデターで政権を担った人が2人いる」という話をしながら「2人」を表す指2本を挙げて聴衆に示すジェスチャーを用いている。この際、指を挙げるタイミングは2人という数詞と同時にではなく、数秒早い「クーデターで政権を担った」という発話と同時に手があがっていた。(11)の発話が演説者による自問自答であったことを考えると、具体的な言語表現よりも早いジェスチャーの使用は質問に対する答えとして先に出された可能性がある。ただし、数秒に過ぎない短い時間差だったため、この点についてより多くのデータからの検証が必要であると考えられる。

3.4.2. 言及内容に関する態度表明のジェスチャー

本節では、どのような形の言語表現と同時に用いられるかよりも、話し手である演説者が言及する対象についてどのような態度を表明しているのかに焦点を当てて分析した結果を示す。具体的には、「聴衆への態度」と「ウ

チ（正）のものへの態度」がジェスチャーとどのように共起されるのかについて述べる。

3.4.2.1. 聴衆に呼びかける際のジェスチャー

まず、聴衆に呼びかける際のジェスチャーを取り上げる。Brown & Gillman (1960) は会話の中で用いられる呼称は相手との関係を表す最も明確な言語的装置であると述べている。目の前にいる有権者に向かって支持を求める街頭演説の場面において、政治家は聞き手である聴衆の反応を考慮し、談話を展開していかなければならない。政治家による一方的な話の展開が行われる街頭演説において、相手に直接呼びかける行為がどのような働きをするのか、またその時のジェスチャーはどのようなものが用いられるのだろうか。

(12) 존경하는 시민여러분. 노회찬입니다. (0.3) 네, 지금 여기에 서울시 교육감 후보 이수호 후보도 와 계시네요. 반갑습니다. (0.7)

尊敬する市民の皆さま, ノ・フェチャンです。(0.3) はい、今、ここにソウル市教育委員長候補のイ・スホ候補もきていらっしゃいますね。こんにちは。(0.7)

上記は演説の冒頭から抜粋した用例であるが、街頭演説を聴きに集まった聴衆を指し「尊敬する市民の皆さま」という呼びかけを用いている。このように冒頭において、集まっている聴衆を演説の聞き手として設定し、「尊敬する」といった修飾語句を加えることで聞き手を待遇していると考えられる。このような表現は冒頭以外にも話題が変わり、新しい話が始まるころでも用いられている。以下の例 (13) をみられたい。

(13) 존경하는 시민여러분. 대한민국 대통령이 모두 9명이었습니다. 그 중에 쿠데타로 집권한 사람이 두 명입니다. 누굽니까?

韓国の選挙演説におけるディスコース・ストラテジー

- 中略 - 존경하는 시민여러분, 대한민국의 주권은 그냥 국민에게 있지 않습니다. 대한민국의 주권은 투표하는 국민에게 있습니다. (0.2) 모든 권력은 투표하는 국민으로부터 나옵니다. 우리 모두 위대한 국민이 되어서 문재인 후보와 함께 승리합니다. (0.5) 감사합니다.

尊敬する市民の皆さま, 大韓民国大統領は全部で9人いました。その中でクーデターで政権を担った人は2人です。誰ですか? - 中略 - 尊敬する市民の皆さま, 大韓民国の主権は何もなくても国民にあるわけではありません。大韓民国の主権は、投票する国民にあります。(0.2) 全ての権力は投票する国民から出ます。私たちはみんな偉大な国民となり, ムン・チェイン候補とともに勝利しましょう。(0.5) ありがとうございます。

このことから、呼びかけが聴衆の注意を喚起し、惹きつけるための道具の一つとして用いられると同時にディスコース・マーカーとして談話を展開する際のサインのように働いていると考えられる。今回のデータからは、「尊敬する市民の皆さま」という一つの形式しか現れなかったが、表現の選択にみられるバリエーションの分析から、話し手である政治家の聴衆との関係設定が把握できると予想される。前節の分析結果で述べたように、演説者は指の示し方から手の上げ下げまでさまざまな形でジェスチャーを用いていた。かなり激しい動きを示していた演説者であるが、聴衆に向かって呼びかける際はすべて両手を揃え、丁寧な姿勢でマイクを握っていることが確認できた。次の図9をみられたい。



この図9のようなジェスチャーは「尊敬する市民の皆さま」といった韓国では典型的な呼びかけ表現に加えられ、より丁寧で改まり度の高い印象を与える効果がある。同時に、有権者を尊重しているという演説者の態度をアピールする働きもする。聴衆はこのような演説者のジェスチャーを手がかりに、「尊敬する市民の皆さま」といった呼びかけを単に、典型的なあいさつとしてではなく、真偽判断はさておきながらも「敬意」を表しているというサインとして受け取ることができる。Gumperz (1982) で述べられたように、このような談話中の手がかりはある単独の形で成り立つよりも複数の合図が複合的に用いられ、伝えたい意図を明確に表すために効果的である点が政治家の演説からも検証できたと考えられる。

3.4.2.2. ウチ（正）のものを言及する際のジェスチャー

前述した3.3節では両極化のスキーマという概念から政治家がどのように「ウチ」と「ソト」を描写しているかについて分析した。その結果、演説者は自分が応援する人をウチ（正）のものとして肯定的に、対立政党の立候補者をソト（負）のものとして否定的に取りあげながら談話内に対立関係を構築していることが分かった。このような特徴はジェスチャーの使用においてもみられている。演説者は、「正」のものを言及する際は必ずこぶしを握り示すジェスチャーをとっていることが確認できた。次の例

(14) をみられたい

(14) 体育館で選ばれた大統領は誰ですか？
 2人です。{手の平を前に伸ばして}
 パク・チョンヒと {手の平を前に伸ば
 して} チョン・トゥファンです。体育
 館選挙で {手の平を広げて} 当選した
勢力と {こぶしを握って} 直接選挙を
勝ち取った勢力が今回の大統領選挙
で戦っています。 {こぶしを握って前
 に伸ばしながら} 誰が勝つべきです
か？ (02) ムン・チェインです。直
接選挙が {こぶしを握って} 勝つべき
なんです。 {両手でマイクを握りなが
ら} 尊敬する市民の皆さま、大韓民
国の主権は {手の平を広げて} 何もし
なくても国民にあるわけではありませ
ん。 大韓共和国の主権は、投票する国民
にあります。 (02) {こぶしを握って
 前に伸ばしながら} 全ての権力は投票
する国民から出ます。 私たちはみんな
 偉大な国民となり、 {こぶしを握って}
ムン・チェイン候補とともに勝利しま
しょう。 {こぶしを握って前に伸ばし
 ながら} (05) ありがとうございます。



図 10 手の平を前に伸ばしながら



図 11 こぶしを握り、前に伸ばしながら

上記の例 (14) のジェスチャーをみると、図 10 のような手のジェスチャー

は一般的なことを述べるときや、「負」の対象を批判する際に多く用いられていることが分かる。一方で、図11のようにこぶしを握るようなジェスチャーは自分が応援している立候補者や3.3節で先述したように「正」のものとしてフレーム化された対象を言及するときしか用いられなかった。このような用例は上記の(14)の他にもいくつか確認できており、演説者がウチ(正)のものにだけ特別なジェスチャーを用いていたという結果が得られた。では、なぜこのようなジェスチャーの使い分けをするのか。これは多数の聴衆が集まった街頭演説の場面も影響を及ぼした要因の一つとして挙げられる。話し手である演説者は支持してほしい対象を、音声で発せられる言語行動だけではなく、「こぶしを握る」といったジェスチャーを加えることで自分の発話をより分かりやすく、聴衆に伝わりやすいものとして作り上げていくことが分かった。また、「正」と「負」といった肯定と否定の対立が明確に示めされている政治場面においてこのようなジェスチャーの使い分けは演説者自身の態度や観点を示すための道具としても用いられる可能性があると考えられる。

4. まとめ

本稿の分析から明らかになったことをまとめると、以下の通りである。

- A) 呼びかけ：相手の注意を喚起し、話題開始を示すディスコース・マーカ―として談話を作り上げる。また、両手を揃えるなどのジェスチャーと同時に用いられ、聴衆に対する敬意を表すなどの態度表明としても用いられることが分かった。
- B) 問いかけ文：自問自答の形が多く、会話に参加しない聴衆を話の中に巻き込むと同時に、主張したいところを強調して示すことができる。
- C) ことば遊び：聴衆がすぐに連想させるように色彩語彙を用いてあるイ

韓国の選挙演説におけるディスコース・ストラテジー

メージを埋め込む, またはことば遊びのように簡単に印象に残るようなことばを選択し, 伝えたい意図を聴衆に理解させる働きをする。

- D) 対立関係: 両極化のスキーマを用い, 対立関係を設定することによって, ウチの集団を「正」のもの, ソトの集団を「負」のものとして表現することができる。それによって, あるイデオロギーを聴衆に伝え, 政治家のイメージ作りが可能となる。
- E) ジェスチャー: 指示詞, 疑問詞, 数詞と同時に使われることが多い。また, 他の言語行動とともに用いられ, メタコミュニケーションとして談話を補助し, 強調することで談話を作りあげていく機能をすると考えられる。

謝辞

本研究は, JSPS 科学研究費補助金 (23K12183) の助成を受けたものです。

注

- 本文中に言及する韓国の政治家の名前はカタカナのみで示す。韓国語の表記, 漢字は以下のとおりである。
김대중 (金大中, キム・テジュン)
전두환 (全斗煥, チョン・トゥファン)
노회찬 (魯會燦, ノ・フェチャン)
박근혜 (朴槿惠, パク・クネ)
박정희 (朴正熙, パク・チョンヒ)
문재인 (文在寅, ムン・チェイン)
- 演説者のノ・フェチャン氏は選挙当時, 「統合進歩党」の代表を務めており, 同じ野党側の立候補者であるムン・チェイン民主統合党大統領候補を支持していた。今回の分析で用いる応援演説は韓国の街頭演説のさまざまな特徴が現れるデータであったため, ケーススタディとして事例を挙げつつ説明する。

- 3) 韓国語原文は、演説者の発言通り文字化しており、言いよどみや文法的に正しくない表現もそのままにしている。また、韓国語原文の日本語訳は基本的に直訳で表しているが、直訳では通じない文は括弧付きで注釈を追加する。
- 4) 用例は、対立関係を分かりやすくするため、ウチ（正）を二重下線、ソト（負）を一般下線で示す。
- 5) 本節で挙げる用例は前節と重複するものが多いため、日本語訳のみを示す。なお、例文中、下線はジェスチャーが用いられ、持続された区間を意味する。

参考文献

- 東照二 (2009) 『選挙演説の言語学』 ミネルヴァ書房
- 石川慎一郎 (2010) 「コーパスに基づく批判的談話分析—首相官邸英語版メールマガジンの量的語彙分析」『英語コーパス研究』 17 英語コーパス学会, pp.127-141.
- 出水純二 (2010) 「日本の新自由主義政治ディスコース：小泉郵政解散演説の批判的談話分析を通じて」『社会言語科学』 13-1 社会言語科学会, pp.58-69.
- 鈴木崇史・影浦峽 (2008) 「総理大臣国会演説における基本的文体特徴量の探索的分析」『計量言語学』 26-4 計量言語学会, pp.113-122.
- 松田謙次郎 (2008) 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房
- 平田佐智子・中村聡史・小松孝徳・秋田喜美 (2015) 「国会会議録コーパスを用いたオノマトペ使用の地域比較」『人工知能学会論文誌』 30-1, pp.274-281.
- Brown, R & Gilman, A (1960). The Pronouns of Power and Solidarity. *In Style in language*. T. Sebeok (Ed.), pp.253-276. Cambridge, MA: MIT press.
- Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies*, Cambridge: CUP.
- Van Dijk, T. A. (1995). Discourse semantics and ideology. *Discourse & Society*, 6-2.
- Tannen, D. (1989) *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*, Cambridge England; New York: Cambridge University Press.

Discourse Strategies in South Korean Election Speeches: The Creation of Discourse Using Verbal and Nonverbal Contextualization Cues

HAN Ahreum

In this study, case studies were conducted to document the characteristics of verbal and nonverbal communication used in Korean politicians' election speeches. From the linguistic point of view, we observed the words used by the politicians and sought to clarify the mechanisms by which discourse is created.

By analyzing political discourse from various perspectives in linguistics, this study aims to lay a foundation for the critical consideration of politicians' superficial and hidden intentions. We believe that such an approach would enable researchers to properly grasp the "politics" that are closely related to people's lives and understand the logical development mechanisms of politicians' language usage.

We analyzed a speech by Roh Hoe-chan, a popular orator, in support of Moon Jae-in during the Korean presidential elections held in December 2012 as a case study. Specifically, we focused on the rhetorical techniques used in the speech, such as address terms, questioning sentences, wordplay, opposing schemas, and gestures; further, we noted how each rhetorical technique and nonverbal communication act was carried out.

The analysis revealed that terms of address functioned as discourse markers bringing attention to the other person and supplemented the conversation by indicating the start of a new topic. Furthermore, it was used simultaneously with gestures such as putting both hands together. It was used to indicate one's attitude, such as showing respect for the audience. Regarding question sentences, many forms of self-questioning

were observed, and there was a tendency to involve audience members who were not participating in the conversation while emphasizing what the speaker wanted to say. Wordplay served to make the audience understand the speakers' intentions by embedding images in color vocabulary or by choosing words as simple and impressive as playing of words. By introducing a conflict—that is, using polarization schemas—the speaker could characterize their group as “positive” and Soto as “negative.” Therefore, we found that it is possible for politicians to convey their ideology to the audience and create an image of themselves using these techniques. Finally, gestures, which are nonverbal forms of communication, were often used simultaneously with indicators, interrogators, and numerals. They were also used in conjunction with other language behaviors, and they are thought to create discourse by assisting and emphasizing discourse as meta-communication.

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の 授業に対する意識に関する調査

三井規裕
前川明

1. はじめに

大学進学率が50%をこえ、大学はユニバーサル化し多様な学生を受け入れる状況になっている。河合塾（2023）が朝日新聞社と共同で国公立大学777大学を対象に行った調査によると、回答のあった私立大学（458大学）の89%は学生の学力低下を課題として認識していたと報告されている。また、朝比奈（2017）によると、大学は経営のためにどのような学生でも受け入れざるを得なくなっているといい、教育困難校と呼ばれる高校の卒業生が多数入学し、そうした高校から学生を受け入れている大学を、教育困難大学であると述べている。さらに、入学者選抜が十分に機能していないボーダーフリー大学が抱える教育上の困難について調査した葛城（2012）は、学生に対して学習習慣や学習レディネスを獲得させるだけでは十分でなく、社会に出しても恥ずかしくない態度を最低限身につけさせる必要があると指摘している。つまり、大学生の学力は低下していると

キーワード：単位修得不足，授業への意識，対応分析，計量テキスト分析

認識されており、多くの私立大学では学問を学ぶだけでなく、学習習慣や社会で通用する態度の養成も求められていると考えられる。

学習習慣が十分でない状況にある学生は、単位修得においても課題を抱えている。朝比奈（2018）は教育困難大学の学生は授業に出席していても試験で点数を取ることができず、単位を取得できない事例があると述べている。また、宇田川（2021）は学力が十分でない学生が多い大学では中退者が多い傾向にあり、そうした学生は授業欠席や試験放棄で学力試験を受けずに科目不合格になる学生が少なくない傾向にあると述べている。つまり、大学がユニバーサル化している現状において、こうした学生の存在は顕在化していると考えられ、それぞれの大学において何らかの対応が必要になっていると考えられる。

2. 先行研究と目的

2.1 単位修得不足の学生への調査研究

単位修得不足に着目した研究はあまり多くなく、代表的な先行研究として中本・垂門（2015）、中西・山田（2019）がある。単位修得不足の定義としては、「それまでの1学期あたりの平均修得単位数を継続した場合、最低修業年限で卒業できないと判断される学生、または、最低修業年限での卒業を目指した時、現在の単位修得状況では卒業が難しいと自認している学生（中西2021）」や「自分のことを低単位もしくは低意欲の状態であると自認している学生（鬼塚・中西2014）」があり、本研究ではこれらの定義を参考とする。

中本・垂門（2015）は単位修得不足の学生195名を対象にアンケート調査を行い、「履修科目に興味を持ってない」「勉強方法が分からない」「朝が起きられない」「何となく大学に行く気が起きない」等の低意欲状態にあり、学習方法がわからないや生活の乱れ等の傾向があったことを明らかにして

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

いる。また、単位修得不足の学生とそうでない学生 161 名を対象に調査した中西・山田（2019）においても、大学の勉学に関してネガティブな回答が多く、アルバイト、課外活動、不規則な生活、飲酒などが学習面に影響していたと述べている。つまり、大学での勉強に関心が持てない、勉強方法がわからないなどの学習するための基礎的な態度関心が低い状態にあると言える。また、生活習慣が乱れていることや大学で学ぶために通うという行為そのものができていないと考えられ、そうした複数の要因が単位修得不足に関連していると考えられる。

2.2 単位修得不足学生を対象とした授業実践

大学での学習に向けた準備が十分でない学生に対して学習支援が行われている（奥村 2008；亀崎 2008；佐藤・国府田 2008；清水・谷口 2008；村山 2008）。一方、正課授業でそうした学生を対象とした実践事例の報告は多くない。

鬼塚・中西（2014）は、キャリア形成支援科目において参加型の授業を設計し、自分のことを低単位もしくは低意欲の状態にあると自認している学生を対象に実践している。授業は、自己開示（自分を見つめ、表現する）、自己概念の確立（他の人と違う自分を意識する）、社会への目線づくり（大人はどのような環境で仕事をし、暮らしているのか）、キャリア意識の再構築（自分は仕事というものにどう関わっていくのか）といった内容であり、低単位・低意欲学生のモチベーション再発見とキャリア形成を支援するというものである。受講した学生の変化を明らかにするため、授業終了後一か月程度経過した時点で記述式の調査をした結果、94 名のうち 19 名の学生は、他者との対話を通じて自分をとりまく閉塞的状况に気づき、その状況を相対化する視点を獲得していたことが示唆されたと述べている。また、三井・前川（2023）は、単位修得不足の学生を対象に、学生同士の

コミュニケーションを促進する授業を設計，実践している。受講生を対象にアンケート調査を行った結果，友人等に相談することなどを意味する「親和性」と他者を援助したり，他者の幸せを自分のことのように感じられる「感受性」の2つの日常生活スキルの平均値が高くなっていたと述べている。つまり，単位修得不足にある学生が参加できるよう授業を実践することで，他者との関わりを通じて自分自身の置かれている状況に気づくことができる等の変化があったと考えられる。

2.3 本研究の目的

単位修得不足の学生を対象とした授業を実践することで，単位修得不足学生の特徴である授業内コミュニティへの不参加（中西 2021）や成績不振が学校と距離を置く行動（立石 2017）を一定程度改善できる可能性がある。しかしながら，先行研究のような単位修得不足の学生を対象とした授業を多く開講することは現実的には難しいと考えられ，十分な支援や解決策になっているとは言えない。また，参加型の授業であるため，他者との関係性を作るのが苦手な学生が自ら選択して受講することは容易でなく，必修にしても出席しないことも考えられる。

多様な学生を受け入れている大学にとって，大学入学前の段階で剥落している可能性のある学習習慣，学習へのレディネス，そして社会で求められる態度をどのように身につけてもらうかは課題である。そうした課題を解決していくためにも，単位修得不足の状態にある学生がどのような授業を受け，大学の授業に対してどのように認識しているかを把握することが必要である。

そこで本研究では，正課授業内でどのような学習支援が可能であるかを検討するため，単位修得不足の学生を対象とした授業を受講した学生に聞き取り調査を行い，これまで受講した大学の授業についてどのように感じ

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査
ているのか把握することを目的とする。

3. 研究方法

3.1 調査対象

対象となる学生は私立 A 大学で 2023 年秋学期に 2 年生に向けて開講される演習 I (以下, ゼミ) 36 名である。この授業はゼミ所属の申請をしなかった学生, 希望するゼミがなかったためゼミ選択を諦めた学生が必ず履修しなければならない。このゼミを履修する学生は, 単位修得不足の学生, 単位修得不足ではないものの大学の学びに対する意欲が低い学生が対象である。対象者の単位修得状況は 2 年生前期終了段階で平均 45.6 ($SD = 15.25$), 最も多く単位を修得している学生は 68 単位, 最も少ない学生は 16 単位である。

3.2 演習 I の授業概要

演習 I の授業の目的, 内容, 進め方は以下の通りである。授業の目的は, 大学の授業や学生生活に馴染み, 能動的に授業に参加し, 社会で必要となる技能や態度を体験的に学ぶことである。表 1 に 15 回の授業内容を示す。第 1 回授業は, 授業計画, 評価方法, 授業の進め方, 各自の自己紹介等を実施する。第 13 回と第 14 回の授業は, 受講している学生の

表 1 演習 I 授業内容

	授業内容
第 1 回	オリエンテーション (演習 I の説明)
第 2 回	コミュニケーションの基本 (アクティブリスニングの理解)
第 3 回	価値観の違いを受け入れる
第 4 回	キャリアプランニング～PDCA サイクル～
第 5 回	パラダイムシフト (物の見方を変える)
第 6 回	ディスカッションの実践
第 7 回	協力と共有①～前半の振り返りをシェアする ～シェアリングレポートその 1
第 8 回	貿易学習ゲーム (世の中を疑似体験する)
第 9 回	演習 II について (演習 II 説明, ゼミ教員からのゼミのメリットの説明, グループワーク「入りたいゼミとは」)
第 10 回	面接体験 (就職活動を知る)
第 11 回	ボードゲームから学ぶコミュニケーション
第 12 回	合意形成を学ぶ
第 13 回	個人面談 (インタビュー)
第 14 回	個人面談 (インタビュー)
第 15 回	全体のまとめ

学生生活の状況を把握するため適宜個別でインタビューを実施する。第15回授業は、これまでのまとめと最終課題を提示し、教員の定めた締め切りまでに提出することを指示する。それ以外の授業は学生同士のコミュニケーションを促進し、能動的に学ぶようにするため、グループ学習のための教材を使いながら、1グループ4名程度のグループで受講する。なお、グループはメンバーを固定せず、毎回できるだけ異なる学生同士になるよう配慮しながら編成する。

具体的な授業の進行は、①前回の振り返りに対する教員からのフィードバック、②グループの編成、③ワークの説明と実施、④小講義、⑤授業の最後にLMS (Learning Management System) に振り返りを入力する、の構成で実施する。

3.3 調査方法

ゼミの授業を受講している学生に、授業内でインタビュー調査協力の依頼を行う。インタビューは第13、14回の授業時間中に個別に行うようにし、半構造化形式で1名につき10～15分程度実施する。調査に協力してくれる学生には、「1. 大学の授業の出席状況（他の授業含め）について」、「2. ゼミ（この授業）のような参加型授業を受講していてどのように感じているか」、「3. 他の授業で、学びやすい・理解しやすいと感じた授業」の3つについて質問しながら自由に答えてもらい、調査者がより聞きたいことについて深掘りするようインタビューを進める。それ以外の学生には、現在の学生生活についてのみ質問し、学習相談やアドバイスをを行う。

調査に参加するにあたって、倫理的配慮の観点から、研究の目的、調査で得たデータは個人を特定できないように処理し、授業改善と学術的な場で利用することがあること、調査協力者の自由意志による回答であること、調査に参加しないことによって不利益がないことを示した上で、協力

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

を依頼した。同意を得た上で、協力しても良い学生のみ参加してもらった。調査協力をいつでも撤回できるようにするため、学内のLMS (Learning Management System) から教員に連絡できるようにした。

3.4 分析対象・方法

インタビュー調査に協力してくれた22名の内、学術への利用に同意してくれた21名を分析の対象とする。分析方法は、インタビューデータを逐語録にした上で計量テキスト分析の手法の1つである対応分析を行う。対応分析とは、変数ごとに特徴的な語を抽出・分析する場合に用いられる(樋口ほか2022)。

分析に入る前に、前処理としてインタビューアの発言であると思われる記録を削除する。次に、計量テキスト分析ソフトKH Coder(樋口2014)を用いて次の手順で分析を行う。①逐語録を入力したExcelファイルを準備する。②準備したファイルをKH Coderに読み込ませる。③インタビューの際に発言が少ない学生と多い学生がいたため、逐語録の文字数を使って、3グループに分類する(最大文字数は1,179、最小文字数187、平均文字数562.5 ($SD = 315.7$))。分類方法は、最小文字数から平均文字数 $-1/2SD$ をあまり発言してくれなかったことを表す記号として「1(8名)」とする。平均文字数 $-1/2SD$ から平均文字数 $+1/2SD$ をある程度発言してくれたことを表す記号として「2(8名)」とする。平均文字数 $+1/2SD$ から最大文字数を発言してくれたことを表す記号として「3(5名)」とする。この分類によってどのような違いがあるかを確認する。この3群を変数とし、④読み込んだデータから対応分析(最小出現数5、最小文書数1)を実行する。その後、対応分析(図1)の図上に付置された語の回答文をKWICコンコーダンスで検索し、原文を確認しながらどのような特徴があるのかを分析する。

4. 分析結果とまとめ

4.1 対応分析からみえる傾向

ここでは、対応分析の結果（図1）について述べる。

まず、インタビューであまり多く発言しなかった「1」の学生たちは、講義型よりグループワーク型の授業を好んでいるものの、友達と一緒に受講することを望む傾向が見られた。特徴的な語は、「意見」「講義」「一緒」「時間」「友達」であった。具体的に確認すると以下のような発言が見られた。なお、発言の内容をわかりやすくするため（ ）で括り筆者が捕捉した。

（この授業は）他人の意見とかがいろいろ聞いたりとかできて。（中略）
絡んだことない人とか全然違う意見とかもあるの。それはでも納得できる意見のもあるなと思う時もあるんで。

自分はグループワーク型の方が好きで。人としゃべっての方が授業的にはいいです。講義ずっと聞き続ける方が僕的にはあんまり好きじゃなくて。

（グループワークだと）生徒だけでなく、先生もたまに入ってきて一緒に盛り上がって。

高校とかの授業とはまた、ちゃうかもしれないですけども、考える時間とかしゃべるだけじゃなくて、それに対して。考える時間ちょっと与えてくれる。周りの子と喋ったりできる時間もあった方が出席しやすいのもあるんで。

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

友達がおるのあるし。あとは、せっかく大学入ったんで、できることはやろうかな。

(別の授業との) 違い。なんだろう。なんか難しい内容とかだと、行きにくいというか。関係あるかもしれない。友達がいた方が行きやすい。

(ゼミ) 応募しようと思ってたんです。友達と一緒に入りたくて。でもその友達が、入ろうとしなかったんで、じゃあ1回止めてみようかって。

つまり、学生は他者の異なる意見に触れたり、話をしながら学ぶことを好む傾向があると言える。しかしそれは、ずっと授業を聞き続けることが好きではなく、他者と話しながらの方が学びやすいと感じているからである。そして、可能な限り友達と一緒にであることを求めていると言える。そのように解釈するならば、友達と一緒にでない場合、授業への参加を避けてしまうことが増えるとも考えられる。したがって、学生が参加しやすい状況を作るだけでなく、ただグループワークを取り入れるだけでなく、一緒に授業を受けることのできる仲間がいるという環境を作ることと、学生の考える時間を確保し、どのように思考させることができるかが授業の実践として必要な要素であると考えられる。

次に、インタビューである程度発言してくれた「2」のグループについて述べる。グループワーク型の授業を好む傾向は同様であり、楽しく学ぶことへの意識があると考えられる。特徴的な語は、「楽しい」「大学」「後期」「グループワーク」「嫌」であった。具体的に確認すると以下のような発言が見られた。

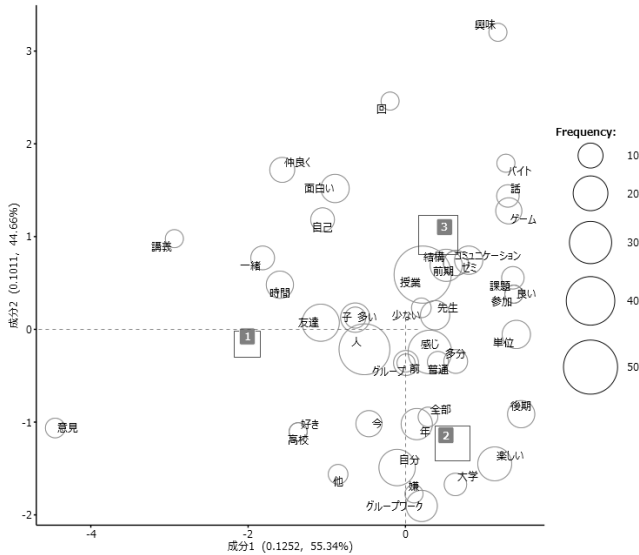


図1 逐語録と3変数を用いた対応分析

そうやってしゃべって、いろんな人とその意見とか言い合って、やるほうが、まだちょっと楽しいかな。学べることも多いから。

当たり外れあるんですけど、スマホ触ってるような子は触ってるし。でも真面目に話しかけてくれるから当たり外れあるけど、やっぱり真面目にやる子に当たった時はすごく楽しくて。

1回、夏休みに呼び出されて。それで、3年生のなんか、後期までに96単位取ってないと卒業見込みが出ないので、今から頑張って取ってください。みたいな言われて。2年の後期がんばろうと思って。

いや、えっとね。後期は、もう頑張らんと終わるんで、奨学金が止まる

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

らしいんです。

本当はあんまり得意じゃなくて、大学来るのもちょっとあんまりなんですけど。来てグループワークしたら帰る時には今日やっぱ来て良かったなみたいな感じなんですよ。

うん、でも、ちゃんと勉強するのやったらグループワークがあった方が、僕はついていきやすい。その、なんか、単位取るだけとかやったら、もうなんか最後に課題出されただけの方がいいです。

それ（講義型の授業）は嫌とか思わないんですけど。なんか楽しくはないかなって思います。

つまり、「2」の学生たちはグループワークの方が「ちゃんと勉強する」という意識があり、講義型は「単に単位を取る」ためと、学びに対する意識の違いがあると思われる。また、単位を取らないとまずいという意識のある学生がいた。「単に単位を取る」だけならば、「課題出されただけ」の方がいいとの意見も見られた。しかし、そこに「楽し」さがないことから、学習に身が入らず単位修得不足といった結果を招いてしまっていることも可能性としては考えられる。

最後に、インタビューで発言してくれた「3」の学生たちも、グループワーク型の授業を好む傾向は同様であり、受講のしやすさを感じていると考えられる。特徴的な語は、「興味」「バイト」「話」「ゲーム」「コミュニケーション」であった。具体的に確認すると以下のような発言が見られた。

なんか1個行きたいゼミ、すごい興味引かれるのあったんですけど。

なんか今年はその●学部（別の学部のこと）取ってないらしくて。モチベーションないのに（別のところ）入って時間使うのもなあって思うところもあったんで、もう流しちゃったんですね。

やっぱ、その、自己紹介するっていうターンが、回数が、絶対にあるんで、この授業のあれって。やし、（他の授業では）ちょっとまあまあ嫌な思いをしたんですけど、その時も展示物をこの班で作ってください。ずっとこの班でいく感じだったんですが、でも、ここのグループで人を被ることがあっても毎回半分入れ替わるから、そういうところもライトでいいなって思います。派遣バイトみたいなライトさがあるなって。

最初は講義ちゃんと話聞いて、その発展でグループワークみたいな感じなんですけど、そういう授業とか。あとは、その例えば話をぶっ通しで聞く、授業で何か作業をする方が例えば目の前でリアクションシートを書いて提出してっていう感じの授業ってやったらやっぱ集中して講義聞けるし。

やっぱなんか一緒にやるじゃないですか？ゲームをやっぱ役割分担するじゃないですか。そこで取るコミュニケーションはすごい。なんか、なるほどな、じゃないけど、こうやったら仲良くなれるんやとかやっぱ助け合えるから向こうも多分。なんか一体感じゃないけどできるなみたいな。意外とそのやっぱ話せへん子って話したら意外とコミュニケーション取れる子いるから仲良くなりたいじゃないけど、うまくこうゲームをやるみたいな。

参加しやすいです。あんまり自分友達がいなくて同年代、先輩とかい

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

るんですけど、せっかくやったらそこにいっぱいコミュニケーションとって。喋るのも普通に好きやし。だから、やっぱりグループワークある授業はやっぱり行きやすい。

つまり、「3」の学生たちは、参加しながら学ぶことにやりやすさを感じており、その過程を通じて他者との関係性を作れたらと考えている。ただ、他者との関係性においては深さを求めているわけではない。「派遣バイトみたいなライトさ」に居心地の良さを感じている学生もおり、授業内での友達に対する関係性の質感はライトさも必要だという認識があると考えられる。

4.2 まとめ

本研究の目的は、正課授業内でどのような学習支援が可能であるかを検討するため、単位修得不足の学生を対象とした授業を受講した学生に聞き取り調査を行い、これまで受講した大学の授業についてどのように感じているのか把握することであった。

インタビュー時の学生の発言量を変数とし、対応分析を行った結果、インタビュー時にあまり発言しなかった群からは、学生が参加しやすい状況を作るだけでなく、ただグループワークを取り入れるだけでなく、一緒に授業を受けることのできる仲間がいるという環境を作ることの必要性が示唆された。また、ある程度発言してくれた群からは、グループワークの方が「ちゃんと勉強する」、講義型は「単に単位を取る」ためという意識の違いが示唆された。また「楽し」さを求める意見もあり、この楽しいという感覚が学びへの動機につながっている可能性があると考えられる。こうした点について山田（2023）は、学生が自ら学ぼうという姿勢になるためには、学ぶことが楽しいという感情が必要であると指摘している。最後に、

発言してくれた群からは、参加しながら学ぶことにやりやすさを感じており、その過程を通じて他者との関係性を作れたらと考えているものの、そこには派遣バイトのようなライトさで良いと考えていることが示唆された。

対象となった学生たちは、大学で学ぶのであればグループワークを取り入れた授業を好む傾向があった。そうした授業では一緒に受けることのできる友達、楽しい授業に工夫されていること、ライトな関係性という特徴を求めていることが示された。

5. 今後の課題

最後に今後の課題について述べる。本研究結果は1つの大学の限られたデータであり、一般化できるものではない。今後も可能であれば他大学含め継続的に実態の調査を進める必要がある。また、文字ではどうしても伝わらないがインタビューに協力してくれた学生の一部では声のトーンが低かったり、受け答えを曖昧にしたりと前向きさや気力が欠けているような状態も見られた。本研究では単位修得不足という観点から調査はスタートした。多様な学生を受け入れている大学では、そもそも大学で学ぶことの意味や生活のケアのようなことも支援の範囲と考えなければならない可能性もある。

大学が多様な学生を受け入れている状況から、今後もこうした学生たちをケアしつつも自主的な行動へと移行させることのできる正課内外の取り組みが必要になると考えられる。

謝辞

調査に協力してくださった学生の皆さんに心から感謝いたします。本研究の一部は、JSPS 科研費 JP24K06245 の助成を受けたものです。

単位修得不足傾向の学生が抱く大学の授業に対する意識に関する調査

参考文献

- 朝比奈なを (2017). 「教育困難大学」のあまりにもひどい授業風景 小学生レベルの知識が欠落している学生たち. 東洋経済 ONLINE <https://toyokeizai.net/articles/-/181672?page=3> (閲覧日 2024 年 4 月 11 日)
- 朝比奈なを (2018). 「教育困難大学」の教員が悩む単位認定の現実 中退率の増加を防ぐために求められること. 東洋経済 ONLINE <https://toyokeizai.net/articles/-/217126?page=3> (閲覧日 2024 年 4 月 11 日)
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一, 中村康則, 周景龍 (2022). 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング—フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析—. ナカニシヤ出版.
- 亀崎澄夫 (2008). 学習支援センター—広島修道大学の事例. リメディアル教育研究, 3(2), pp. 14-18.
- 葛城浩一 (2012). ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難—授業中の逸脱行動に着目して—. 香川大学教育研究, 9, pp. 89-103.
- 河合塾 (2023). 大学をみる視点朝日新聞×河合塾共同調査 2022 年「ひらく日本の大学」から見る大学のこれから. ガイドライン 2023 年 2・3 月号, pp. 34-38.
- 三井規裕, 前川明 (2023). 単位不足に陥った学生がグループ学習型授業に参加したことでどのような成長感を感じたか—入試選抜が十分に機能していない大学を対象として—. 日本リメディアル教育学会 第 18 回全国大会発表予稿集.
- 村山光子 (2008). 明星大学学習支援センターの現状と課題. リメディアル教育研究, 3(1), pp. 10-16.
- 中本陵介・垂門伸幸 (2015). 面談を通して把握した低単位学生の特徴と学業関連領域における支援策実践例: ピア・サポーターを活用した修学支援. 高等教育フォーラム, 5, pp. 147-157.
- 中西勝彦・山田剛史 (2019). 学生はなぜ単位不足に陥るのか: 低単位学生の特徴に関する検討. 大学教育学会第 41 回大会 発表要旨収録, pp. 242-243.

- 中西勝彦 (2021). 学生が単位不足に至るプロセスに着目した質的研究. 大学教育学会誌, 43(1), pp. 120-129.
- 奥村浩士 (2008). 広島工業大学教育学習支援センターにおける事例 (建学の精神「教育は愛なり」を拠りどころとして). リメディアル教育研究, 3(1), pp. 17-21.
- 鬼塚哲郎, 中西勝彦 (2014). 低単位・低意欲層に向けたキャリア形成支援教育科目「キャリア・Re-デザイン I」における受講生の変化. 高等教育フォーラム, 4, pp. 29-35.
- 佐藤逸子, 国府田秀行 (2008). 聖学院大学ラーニングセンターにおける学習支援. リメディアル教育研究, 3(2), pp. 5-8.
- 清水明男, 谷口多恵子 (2008). 羽衣国際大学 事務局発学習支援の実践 (産業社会学部の多様な学生への動機づけを目的とした個別支援). リメディアル教育研究, 3(2), pp. 1-4.
- 立石慎治 (2017). 成績不振学生・不登校学生等への支援の取り組み状況と課題. 独立行政法人日本学生支援機構学生生活部 学生支援企画課 学生支援調査係 (編). 大学教育の継続的変動と学生支援—大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査 (平成 27 年度) より一, pp. 89-103.
- 宇田川拓雄 (2021). 学生の科目合否における学生属性の影響に関する研究. 嘉悦大学研究論集, 第 63 巻第 2 号, pp. 63-77.
- 山田剛史 (2023). 大学教育における心理的安全性の重要性と学生エンゲージメントに及ぼす影響. 関西大学高等教育研究, 第 14 号, pp. 7-18.

〔翻 訳〕

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

致富篇（下）

梅 山 秀 幸

十九、公金を使い込んで首をくくろうとした原州の役人

原州の役人の申^{シンジョンフイ}天希の手元にあった十万銭は公金でソウルの官庁に納付すべきものであった。天希は締まりがなく浪費癖があり、また泥棒にも遭ってしまい、すでに五万銭の欠損を生じていた。

ソウルの官庁では天希を捕縛することになるはずである。天希の家はもとも貧しく、みずから弁済することができないし、ソウルに金を借りることのできる知り合いもない。もだえ苦しんだところで、今やどうすることもできない。それで、おもむろに走り出して泣き叫び、首をくくって死のうとした。

そのとき、ある人が人の泣き叫ぶ声を聞いて、その声の方に来てみると、まさに人が樹木に縄をかけて首を吊ろうとしているではないか。その人が理由を尋ねると、天希はつぶさに事の顛末を語った。その人は笑って、

「たかが五万銭で死のうというのか。男子の命も軽いものだ。わたしについて来て、五万銭をもって、上司に納めるがいい」

といい、家に帰って、天希に五万銭を与え、証書を認めることもなかった。

天希が、

「原州は大きな邑です。主吏ともなれば一年に十万銭の実入りがあります。わたくしがふたたび主吏に戻れたなら、このお金は十分にお返しでき

ます。そのときは公も原州に来て遊ばれてはいかがでしょう」

というと、その人は快諾した。

二年が経って、天希ははたして原州の主吏となった。天希は手紙を書いて、その人を招いた。その人はやって来て、十日あまり滞在して帰ろうとした。天希は五万銭とともに山海の珍味、また絹布や純綿などで感謝の意を表そうとした。

しかし、その人は人情として当然のものだけを受け取り、五万銭については受け取らなかった。その人はいった。

「わたしがあのおときあなたに五万銭を与えたが、それを返してもらうつもりはなかったのだ。五万銭で一人の命を助けたということで、わたしの仕事は終わったのだ。どうして報奨を得ようと思おうか」

(『雪橋別集』)

二十、儉約を旨とした宣恵庁の胥吏の妻

ある宰相の家の奴僕は数十年のあいだ勤めて、初めて宣恵庁¹⁾の胥吏となった。給料の手厚い職務である。

胥吏の妻が夫にいった。

「わたくしたちがこれまで経験して来た飢えと寒さの苦しみは、まさにこの日のためだったのです。しかし、節約することなく、思いのままに蕩尽するなら、ふたたび希望のない生活にもどってしまいます。衣服や飲食、そして日用のものは、今までどおり儉約に努め、家産を興すことにしましょう」

夫もそれに同意して、給金はそのままきちんと妻に手渡すことにした。

こうして、七、八年が経ったが、悪衣かつ淡食のまま、しかし、家産が興るわけでもない。ところが、同僚たちは美食かつ美服を楽しみ、立派な家に妓生の妾まで置いて楽しみながら、家は日々に豊かになっている。そ

れを目にして、胥吏はその妻を詰問したが、妻は答えようもしない。

家中がいよいよ困窮して行くように見え、ある日、大いに怪しんで、妻を問いただした。

「わたしが実入りのいい官職に就いて久しくなり、艱苦の生活を続け、遊蕩するわけでもない。なのに、家が豊かになるどころか、日に日に貧しく、借金が嵩んでいく。これはいったいだれの咎なのだ」

妻が、

「借りているのはいくらでしょう」

と尋ねると、胥吏は、

「数千両もあれば、すべて返済することができる」

と答えた。妻は、

「それなら、心配なさらないでください。食器や簪、耳飾りなどを売って、返済に当てましょう。そして、今日、宣惠庁をお辞めになってください」といった。胥吏が、

「宣惠庁を辞めて、どうして食っていくというのだ」

というと、妻はいった。

「それも、心配なさらないでください。わたくしにはいい考えがあります」

胥吏は妻のことばに従って、宣惠庁を辞めた。

ある日、妻は夫に人を集めて来るようにいい、大庁（居間）の前に座って、大庁の床の下を指差し、数万両があるといった。実に大量の銭であった。

「これはわたくしたちが、この七、八年のあいだに苦勞して貯めたお金です」

紐で通して銭をまとめ、夫に郊外の農地を買うようにいった。そこで、東側の城郭の外に良田美畚を買い求めたが、そこは山を背に、川を前にして、家の後ろには果樹園を控え、前には場圃をおいて、さながら統の樂志の論²⁾にのっとっていた。それはすべて妻の指示にしたがったものであつ

た。

夫は農事にはげみ、妻は紡績を行って、楽しみが尽きることがなかった。妻は夫にふたたびソウルに足を踏み入れることのないようにさせた。

数年の後、宣恵庁の胥吏十余名の公金横領が明らかになり、王命が下って、処刑され、家産は没収された。みな、前日、美服、美食で、立派な家で楽しんでいた胥吏たちであった。

ああ、宣恵庁の胥吏の妻は一介の女子に過ぎないが、智慧でもって家業を興し、儉素の徳を守って、夫の名を汚すことがなかった。もしこの女子が士大夫の家の男子として生れていたなら、激しい世の流れの中で勇退して、無難に過ごしたであろう。他の胥吏たちは節用と愛民をこころがけず、奢侈と貪濁の風をもっぱらにしたが、鍾が鳴り、水が漏れ、ついには身を滅ぼし、家を崩壊させた。その賢さと愚かさの隔たりは、どうして三十里だけであろうか。

（『海東野書』）

- 1) 宣恵庁：第十話「南大門の濁酒店」の注3) 参照。
- 2) 統の樂志の論：後漢、高平の人である仲長統が常日ごろ述べていたという、帝王たらんとすれば、身を立て名を揚げようとしなくてはならないが、名は不常であり、人生は滅しやすい、優游優仰して、もってみずから楽しみ、清広に居して、その志を楽しむにしくはないという、田園生活に理想はあるとする論。

二十一、老僧の教えにしたがった宋有元

宋有元^{ソン ユ ウワン}は胥吏の子である。早くに父母を亡くし、親戚の李氏^イの家に引き取られて養われた。李家は裕福ではあったが、有元はすこぶる薄待された。その家の子たちはみな緋緞の服を着て、米の飯と肉を食べて飽きるほどで

あったが、有元はといえば、冬に綿入れの服がなく、夏に麻の服がなく、藁蓆をかぶって寝て、与えられた残飯を飲み下して腹を満たした。七、八歳から十四歳まではそうした身世であった。十五歳になって、李氏に告げていった。

「わたくしは舅さんのおかげで今日まで命を保ち、骨格も筋力もすでに大人のものになりました。今からは自活の道を探そうと思います。この家を出ることをお許してください」

李氏は喜んでこれを許した。

有元は山寺に入って行き、僧坊に寄宿して、茜の採集を生業とした。ある日、年老いた僧がやって来て、有元を見て声をかけ、人目につかないところに引き連れて行って、いった。

「お前の容貌を見ると、まことに徳があり、大福の人のようだ。天は至極の宝を惜しんで、まことの福人を待っていたのだ。あの崖の下の何本目かの松の木の下に埋まっているものがあるが、それはお前のものだ。お前はこれから七日のあいだ潔斎して、松の木の下を掘って見るがよい。しかし、お前は貧しい童子に過ぎない。すぐに金に換えることは難しい。お前はわたしの手紙をもって開城に行って、某人に会うがよい。その人がお前のために使える金に換えてくれるだろう」

有元はその老僧のことばのままに、七昼夜というもの斎戒沐浴して、件の場所に行って、一尺ばかりの深さまで掘って見ると、はたして大きな甕があって、中には銀子がいっぱいに入っていた。ふたたび土でこの甕をおおって、老僧のもとに行って手紙をもらい、開城に出かけて行った。その人を訪ねて老僧の手紙を手渡したが、その人というのは開城の大富豪であった。手紙を手にとって読み、はなはだ不思議に思いながらもいった。

「この方はわたしの従祖父に当たる。出家してすでに七十年、はなはだ高い功德を積まれている。いつも安否を尋ねたいと思っていたが、その術

もなかった。それが今日、手紙をいただいた。どうして、そのおことばに従わないでいられよう」

すぐに人馬を用意して、有元とともに件の崖の下に行かせ、銀の入った大甕を持って帰らせた。そして、自分の娘を有元に与えて妻にさせた。

甕の中の銀を貨幣に換えると、数十万両にもなった。有元はそれ以後、快活に裕福な生活を送った。

それから、十年余り後のことである。

有元がたまたま湖西（忠清道）に行くことがあり、道端に一人の乞食がいるのを見た。その乞食というのは、他でもない、李氏の家の子どもであった。有元はその乞食の手を取って涙を流し、どうしてこのような姿になったのか尋ねた。その人は恥ずかしくて真っ赤になり、しばらくは何も答えられなかったが、やっとのことで、

「あなたが家を出て行って後、家勢がしだいに衰え、このようなざまになってしまったのです」

といった。有元はすぐに自分の衣服を脱いで、その人をおおい、いっしょに客店に入って行って、服装を整えさせ、冠と網巾を一新させた。

彼を連れて家に帰り、半年のあいだともに暮らし、五百両を与えて、旅支度を整えてやった後に見送った。

その後、六、七年のあいだ、消息が絶えたが、有元が金剛山に旅に出たとき、鉄原でたまたまこの人に出遭った。またもや襤褸をまとっている。有元は会えたのを喜ぶ一方で、また驚きもし、

「先だっては、いっしょに暮らしながら、生計を営む術も教えればよかったのだが、それをしなかったのはわたしの過失だ」

といい、いっしょに家に帰って行き、千両の田庄を分かって、一生のあいだともに暮らした。

その後、有元の子孫は湖中（忠清道）で大いに繁栄した。

（『千一録』¹⁾）

- 1) 『千一録』：ソウル大学所蔵。10巻10冊からなる。禹夏榮の編。政治・社会・経済にわたる国政全般に対して論説し、改革の方法を提示する実学の著作であり、その第9・10冊は見聞を随想風に記している。禹夏榮の生歿は1741～1812。本貫は丹陽、字は大猷、号は酔石室。七歳のときから祖父の宝相に文章を学び、十五歳から科挙の学問をはじめたが、会試に十二度落第して、ついに及第しなかった。しかし、これは当時たびこっていた科挙の不正や売買に手を染めなかったため、郷里の儒生として一生を送った朝鮮後期の代表的な農村知識人である。

二十二、長橋之会一葬式の真似事に報いた貧者一

一人の男がいた。はなはだ貧しかったが、人中にいるのを好み、朝、起きると、顔を洗い、髪を整えては、長橋¹⁾に住む富者の家の近くを歩き回るのが日常としていた。その家では八、九人が路上に集まると、歌客や舞を舞う妓生を呼んで、酒や肴を振る舞わない日がなかった。その貧乏男は特に招かれるわけでもないが、いつも座席については、振る舞われるままに酒を飲み、飯を食った。人びとは貧乏男を馬鹿にし、隙を見ては彼を嘲弄したが、貧乏男はじっと耐え、その嘲弄を甘んじて受けた。人びとも彼を嘲弄するのを日々の楽しみにしている観があった。もし貧乏男にほんの一日でも顔を見せなければ、人びとは何事かがあったのではないかと心配するほどであった。

ある日、雨が降ったが、それでも人びとは帰らず、貧乏男と閑談を交わしているうちに、妙な具合に話が進んだ。

「君は家も困窮していようが、すでに年齢も五十を越えて、遠からず死ぬ日を迎えるだろう。わたしたちが今のように特別に情誼を交わしているのであれば、訃音を聞いて、誰かがすぐに駆けつけて問喪をし、治喪を助

けないでいようか。しかるに、そのときにあたって、誰の家に憂患があり、事故が生じるかわからない。もし、子婦の出産があったり、孫子が天然痘にかかったりすれば、世俗が忌むことになる。わたしたちも行って死体に触れることができまい。ああ、悲しいことだ。今日、ここにいるみんながこの場で君と約束しようじゃないか。某は初葬の凡節に当たり、某は入棺のときの用に当たり、某は山役（墓造り）の用に当たることにする。これを文章にして残しておこう。また、棺の結構をあらかじめ決めておきたいが、どうであろうか、どうであろうか」

それに対して、貧乏男は答えた。

「まだ先のこととはいえ、君たちの気持ちがそうであれば、ありがたいことだ、まことにありがたいことだ」

すると、別の人が、

「おおよそ、棺の木材というのはただ一寸の長短で値が違ってくる。いまはその結構がわからなくとも、ただ長目の棺材を買って置くのがよくはあるまいか。それにまた、今、値の安いものを買っておいても、もし思いの外に死体の背が高ければ、役に立たなくなる。そこで、大体の寸法を知るために、寝てもらって身体の大きさを測った方がよくはあるまいか」といったので、みんながそれもそうだと同意して、貧乏男を捕まえ、横たわらせることにした。貧乏男も唯々とこれに従った。

みなは手巾や紐などを床に延べて、衾を敷いて、貧乏男をその上に臥させ、衾で身体の下から上まで包んで斂のまねごとを行ったが、そのとき、貧乏男は息が塞がってしまった。みなは鼻をおおってひとしきり笑って、なかなか斂を解こうとはしない。やがて、貧乏男は身動きしなくなって、人びとが斂を解いてみると、すでに貧乏男は死んでしまっていた。

九人の人は驚き慌てて、貧乏男の身体を撫でさすったり、口に薬を注ぎ込んだりしたが、口々に言い訳して、

「某が首をくくったのは余計なことだった」

「そもそも最初にこんなことをいい出した某がいけないのだ」

などといったりしていた。貧乏男は気を取り戻して、かすかに身動きしたものの、死んだふりを続けた。諸家の奴婢たちは主家に帰って、事の次第を告げた。九つの家の婦女たちは驚きに堪えず、それぞれに人をやってさらに動静を探って来させようとしたのだった。

ある人がいった。

「この人には母親と家族がいる。亡くなったことを知らせなくてはなるまい」

貧乏男はこのことばを聞いて、死んだふりは続けたものの、心の中で老母が驚いて泣くだろうと思うと、不憫でならず、ついに息をふき返し、大きな欠伸をして、初めてよみがえった様子を見せた。

九人は前に進み出て手を取り、

「君はわたしがわかるか」

といい、あるいは、

「ただ眠っていただけなのか」

といい、それぞれが一言声をかけて慰め、喜気が部屋に満ち満ちた。

貧乏男は九人を振り返り、声を放って大哭すると、九人もまた哭した。貧乏男は、

「わたしが弊衣破冠の姿で一縷の命を生きながらえているのは、すべてあなた方の徳のお蔭といわねばならない。いつもあなた方にご迷惑をおかけして、いつかはご恩返しをしようと固い決心をしていましたが、今日もまたあなた方に一方ならないお世話になったようです。わたしはむしろ死んでしまった方がよかったです」

といって、また嗚咽して、息が塞がりそうである。人びとは茶や酒を進めて、貧乏男の気持ちを落ち着かせようとする。貧乏男は話を続けた。

「わたしは冥府のことなど今まで信じていませんでした。ところが、あっという間に、閻羅の国に至りました。鬼頭や羅刹が左右に並び、鉄鉤と火釜が庭には置かれ、さまざまな拷問の道具が置かれて、これはこの世の義禁府や刑曹と変わりがありませんでした。執事のような者や邏卒のような者もいて、殿閣の中には華蓋の下に王のような方が榻に腰をかけて、わたしを近くに招き寄せて、『お前はどのような罪を犯して、ここにやって来たのか』と尋ねました。わたしは仰ぎ見ながら、『捕らえられた罪人には捕らえられた罪がわかりません』というと、横にいた黄色い手巾の夜叉が進み出て、『わたくしどもが他のことで巡察していますと、ただ鬼門関から入り込んで右往左往している者がいたので、連れて参ったのです。どんなことを仕出かしたものやら存じません』といいました。そのとき、殿上にいたある方が急に出て来ました。この方はどうやら判官だったようですが、その方が伏して、『近ごろ、富者たちの倨傲ぶりは目に余るものがあります。人を生かすも殺すも、自分たちの意のままに行い、某や某ら九人はこの人を縛り付けて殺そうとしたのです』といったのです。すると、閻魔大王は大いに怒り出し、鬼卒二十七名を特別に選び、『その九人をこの国の犁舌獄に入れ、鉄の桎、石の桎で拘束した後、鉄瓮城の将卒に森羅門に報告させるようにせよ』と縷々と命じたのです。そこで、わたしは痛哭して、『その九人というのは、もともと善心かつ慈悲の人で、わたくしの最近の衣食というのも、すべて彼らのほどこしによるのです。今回のことも、一時の戯れから出たもので、たまたまわたくしの息が塞がってしまったのです。九人に殺されたわけではありません。どうかお願いします。九人を許してやってください』と哀訴したのです。閻魔大王は左右を振り返って、『その九人が平生にこの貧乏男と困窮した知り合いに悪事だけ働いて、一度たりと恩恤の心で救いの手をさし出したことがなかったら、この男のことばがこのようであったろうか。しばらく九人は捕らえずに様子を見る

ことにしよう』といったのです。左右の者が、『その九人に自分たちの財産を均分してこの人に与えるようにさせれば、その者たちの犯した罪の万分の一は贖うことになるのではないのでしょうか』というと、閻魔大王は、『そうであれば、力士・夜叉などに命令を撤回せず、まだ待たせて置くがよい。数日後にこの貧乏男を帰すことにしよう』といったのですが、横にいた執事がわたくしの背中を推すと、わたくしは空中に舞い上がり、風に乗って飄々とここに帰り着いて、気が付くとあなた方もいらっしゃったのです。今は嬉しくもあり、悲しくもあり、わたくしの死は不思議な体験でしたが、どんな面目があって、あなた方に対面できましょう」

涙を流して、ことばを結ぶこともできなかった。

貧乏男が話しているあいだに、家々の奴婢たちが帰って報告すると、婦人たちは驚き、気絶せんばかりであった。

近ごろ、富家の婦女子のあいだではムダン（巫覡）を呼んで祈祷したり、盲人の占い師を呼んで経を読ませたりするのが流行っている。ムダンに金をつぎ込んで破産する者も出てきている。この九人というのはもともと無教養で見識というものをもたない。このような冥府の詳細な報いを聞いて、どうして動揺せずにいられよう。それぞれに銭を包んで貧乏男に送ったが、あるいは三百両送り、あるいは四百両送って、数日のうちに三千両が貧家の庭に積み上げられた。ところが、貧者は八人の家から送られたものは受け取り、一人の家から送られて来たものは送り返した。その家は戸惑うだけであった。

数日後、貧乏男は長橋の会の席でみなに別れを告げて、他郷に引越すこととし、その後、彼らと会おうとしなかった。

富者たちは以前のまま逸楽をこととし、積善を心がけるようなことはなかった。ムダンに惑わされ、節約する術を知らず、財産も生み出すことがなく、湯水のように流れ失せるだけであった。そんな生活がどうして長続

きしよう。三年、五年が過ぎて、瓦家を売って茅葺の家に換え、衣服は身を覆うだけ、日々の食事にも事欠くありさまで、かつては少し虫が食ったからといって棄てた緋緞の衣服や苦いといって吐き出した醬を、いまはどうして手に入れることができようか。

九人は散り散りになって、もう会うことすらできなくなった。あるいは道で会ったとしても、たがいに慚愧して顔を覆って避けようとする。

その中の一人はまず最初に破産したのだったが、夫も妻も死んで、後継ぎも無かった。これは貧乏男が金品を受け取らずに返した人であった。

十年後、貧乏男は多量の金銀をもってソウルに出て来て、坊々曲々を探し回り、八人の家を見つけ、かつて送られた本銭を倍にして返した。

けだし、貧乏男が一人の家からだけ金を受け取らず返したのは、どうしてであったのか。それはその人が早く亡くなって、報いる機会がないのを予見したのであった。高々として広い楼閣に住み、飽食し、ぬくぬくと贅沢な生活を送って、面白おかしく過ごしている者たちは、どうして貧乏男が仮死のあいだにこのような計略を思いついたことに気がつくことができたらう。

(『禦睡新話』)

- 1) 長橋:ソウルの清溪川にかかっていた橋。清溪川はソウル市街の近代化によって暗渠になっていたが、2000年代に入って景観の回復がはかられ、昔の姿を取り戻した。

二十三、広通橋のほとりで振り返った女 —ソウル中の女と通じた富者、妻一人を守った貧者—

一人の富者が北山の麓に住んでいた。彼はいくつかの官庁で胥吏を勤めたが、家がもともと豊かで、所得も多かったので、おのずと風流人として

過ごすようになった。毎日、朋友を集めては、歌舞で消閑し、医女¹⁾、針婢²⁾、そして名のある妓生など、一人として会ったことのない女はいなかった。

また、一人の貧乏男が毎日のようにこの家にやって来て、手紙の代書をしたり、さまざまな仕事の代行をしたりしていた。

ある日、富者の病気が重くなり、子どもたちを呼び寄せていった。

「わたしは学行が不足していたが、生活に余裕があったので、若いときから今まで、豪客蕩子たちと妓生の家に入出入りし、歌舞と風楽を楽しみ、琴棋と管弦を日常として来たが、お前たちも少しは遊興の弊害を理解してはしよう。わたしもすでに七十歳となった。病勢は重く、恢復をどうして望もうか。幸い、まだ家産は余裕があるようだ。わたしの三年喪を終えた後、お前たちは心のままにやりたいことをやるがよい。してはならぬことなど何もない。しかし、一つだけ知っておかなければならないことがある。いま、お前たちに教えておくので、紙と筆を持ってこい」

子どもたちが泣きながら、唯々と出て行き、湖南の簡紙³⁾数十丈の三つ折り連幅と絳真香⁴⁾の硯箱をもつてもどって来た。父親の臥している横に座り、白玉でできた蛙の形の硯滴を傾け、八神貢墨⁵⁾を磨って、大霜毫晋唐小楷筆⁶⁾に墨汁を浸して、父親のこたばを待った。すると、父は、

「大きな文字で『内医院』と書いて題目とし、小さな文字ですべての医女の名前、某、某、某と書くのだ」

といった。子は父が名を呼ぶままに書き記し、すべてで四、五十名になった後、また父は、

「大きな文字で『尚衣院』と書いて題目とし、小さな文字で針線婢の名前、某、某、某と書くのだ」

といった。子が名前を書き連ねて七、八十名にもなったとき、今度は、大きな文字で「中部」から「東部」、「西部」、「南部」、「北部」の五部を書いて題目とし、酒店の娼婦たちの名前を書かせて数百名にもなり、さらに「刑

曹]、「京兆府」と大書して、小さく下典の名を書かせて幾百名となった後、黙然としてしばらくしていたが、しばらくすると続けて、大きな文字で『未考居注秩』と書いて、中ほどの大きさの字で人びとの名を記録させ、小さな文字で数百名の名を書かせ、また大きな字で八道を書かせ、中ほどの大きさの字で郡の名を書かせ、その下に小さな文字で人の名を書かせたが、その数はもう数えられないほどであった。

貧しい男がことばもなく、その話を聞いて、ため息をついていった。

「主人の両班の好衣、好食というのは、うらやむほどのことではない。裕福であれば、ごく普通のことではあるまいか。しかし、幾千人もの妓生の出入りがあって遊んだのは、まさに王將軍の庫子輩⁷⁾の遊樂であるというしかない。わたしは今やこの世に浮かぶ道理もないが、後世にふたたび人間として生れたなら、好衣、好食だけを願うのではなく、この富者のように、お花畑で遊んで暮らしたいものだ」

富者が死んで、五、六年が経ち、貧しい男もまた病を得て呻吟した。死に臨んで、その子呼び、枕元で紙筆を執らせて、

「わたしがなじんだ妓女らの名を、お前は書き取っておくがよい」といったが、なかなか次のことばが出て来ない。しばらく経って、

「広通橋のほとりでわたしを振り返った女で……」

といい、息子が書き取ってまた一度の食事ができる時間ほどが経って、

「それがお前の母親だ」

といった。これを聞いた人はみな抱腹絶倒した。

(『禦睡新話』)

- 1) 医女: 医術を学んで内医院や惠民署で働いた女子であり、一時期、『医女 チャングム』というドラマが日本でも人気を博したが、その実情は「医妓」ともいい、枕席にも侍った。

- 2) 針婢：針線婢とも。尚衣院に属して裁縫を事としたが、枕席にも侍った。
- 3) 湖南の簡紙：湖南は全羅道をいい、そこで産する良質の紙をいう。今も全羅北道の州都の全州は韓紙の名産地である。
- 4) 絳真香：香木の種類。
- 5) 八神貢墨：名墨なのであろうが、未詳。
- 6) 大霜毫晋唐小楷筆：兎の毛で作った晋と唐代の楷書体を書くための筆。
- 7) 王將軍の庫子輩：第二話「順興の万石君」の注3参照。

二十四、地獄の話をして借金の返済を免れる

昔、一人の常漢^{サンノム}¹⁾がいた。洞内の生員に借金をしたが、その生員というのが愚鈍な上に、金銭にかけては吝嗇なこと、この上なかった。奴をやつて返済を督促し、あるいは捕らえて引きずつて来させる。その苦痛は耐えがたかった。

常漢ははなはだ貧しかった。借金を返そうにも返すすべがない。そこで、一計を案じて、妻にそれを語った。

「某家の生員はかならず奴を送つて来よう。返済を免れるのに妙案がある。お前はこれからわたしがいう通りにしてほしい」

妻はそのことばを聞いて、許諾した。

翌朝、常漢は一重の衾で頭をおおい、足を伸ばして、部屋の中に仰臥した。妻は鬢をほどいて戸の外に赤子を抱いて座り、慟哭をしている。そこに生員宅の奴がやつて来て、常漢の妻の様子をみておどろき、どうしたのかと尋ねた。妻はいった。

「昨晚、夫が帰つて来て、腹をすかしていたものの、他に食べ物がなく、すえた冷や飯の一塊を食べたところ、夜半になって、にわかにか苦しんで死んでしまいました。これから、この赤ん坊を抱えて、どうやって生きて行けばいいのか、天地が真っ暗です」

奴が戸口から覗いてみると、確かに頭を衾でおおった死体が横たわっている。奴はただお悔やみをいうだけで帰って来て、生員に告げた。

「昨晚、某はすえた冷や飯を食べてにわかに死んだそうです。その妻が鬘をほどき、赤ん坊を抱いて号哭していました。気の毒でなりませんでした」

生員もため息をつくしかなかった。

五、六日が経って、常漢は忽然と生員宅を訪れた。生員はかつ驚き、かつ怪しんで、問いただした。

「お前は死んだのではなかったか。どうして生き返ったのだ」

「確かに、あの晩、わたくしは死んだのです。それが三日後には甦って、今こうしてお目にかかっています」

「よみがえることがあるとは聞いたが、今までよみがえった人など見たこともない。今日、はたしてそれを見た。まったくもって不思議なことだ。お前ははたして冥途というものを見て来たのか」

「もちろんです。一つ一つ記憶していますが、この世とさして変わりはありません」

「それなら、詳しく話してくれまいか、わたしは聞いてみたい」

「わたくしが死ぬと、まず凶悪な顔をした鬼卒がやって来て、わたくしを引き立てて、背中を推して突き出しました。この世の法廷のようなところですよ。殿舎ははなはだ広荘で、左右に鬼卒が並び、殿上には法官が紅衣を着て座っていて、これが閻魔大王のようでした。わたくしは法廷に俯伏していましたが、閻魔大王は冊子を手にとってひとしきり見て、『お前はまだ死ぬべき人間ではない。どうやら、間違っただけで捕まえて来たようだ。すぐに立ち去るがよい』といいました。「わたくしは帰る道がよくわかりません。できますれば、わたくしをここに連れて来た鬼卒にわたくしを連れ出すように命じていただけませんか」といいますと、閻魔大王はそ

れを許してくれました。そこで、鬼卒とともに出て来ますと、大路の傍らから一人の人が出て来て、わたくしの袖をつかんでなつかしそうに話しかけます。これをよく見ると、生員の亡くなったお父さんではありませんか」

生員が常漢の話をさえぎって、尋ねた。

「おまえはわたしの父上の顔を見たのか。いったいどのようなご様子だったか」

常漢は話を続けた。

「亡くなられたお父上は菜のような真っ青な顔をして、襤褸をまとっていましたが、裸体をおおうのにも十分ではなく、平凉子（冠の一種）をかぶってしていました。わたくしも当初ははっきりとはわかりませんでした。こまかに見て、やっと思い出したのです。わたくしは驚きに堪えず、お父上に事情をうかがいました。すると、『今や家もなく、食事もなく、流離乞食という身の上をまぬかれず、ここに至ったのだ』とおっしゃいました。わたくしにお宅の様子を尋ねられましたので、くわしく話して差し上げると、そのあいだ、ずっと涙を流していらっしやいました。わたくしの囊の中にたまたま一銭が入っていたので、これを手渡しましたが、たいへんお気の毒な様子でした」

生員は表情に憂愁と羞恥をおび、さらに尋ねた。

「お前は父上には会ったというが、母上には会わなかったろうか」

常漢が、

「お母上にもお会いしました。あまりに恐れ多くて、あえてお話しできませんでした」

というと、生員が、

「今、わたしとお前が差し向かいしているだけで、他には誰もいない。お前の口から出た話はわたしの耳にはいるだけだ。どうして話すことができないのか」

といっても、常漢はひたすら恐縮して、口を開こうとしない。生員が常漢に取りすがって催促するので、やっとのこと、話し出した。

「生員がそれほど熱心にお聞きになるので、やむを得ず、見たままをお話します。わたくしと鬼卒がある酒幕に入って行きますと、建物は広荘かつ華麗で、酒席につく婦人が大勢いました。わたくしが座ると、その席に着いたのがお母上だったのです。その姿を見ますと、以前よりもふくよかで、衣服も身に着けた装飾品も豪華で、形容のしようもないほどでした。わたくしは大いに喜んで拝謁いたしました。お母上も喜んで、お宅の消息をお尋ねになりましたので、わたくしも詳細にお話しました。美酒を酌み交わし、ご馳走を飽きるほどに食べて、その酒幕を出たことでした」

生員は不思議になって尋ねた。

「母上がそのようであれば、父上はどうして困窮なさっているのだろうか。母上はいったい誰と暮らしているというのか」

常漢はふたたび恐縮した様子で何もいわない。生員に重ねて尋ねられて、常漢はしかたなく話した。

「お母上はお父上とは折り合いがうまくいかず、離れ離れになられ、いまは、わたくしの父と同居なさっています。その夫婦としての情誼ははなはだ厚く、まことに思いもかけないことでした。そんなわけで、わたくしも恐縮して、なかなか話し出せないでいました」

生員の顔色は土気色に変わり、うつむいて涙を流し、しばらく無言であった。ようやく面を上げて従容としていった。

「このことは、お前はけっして口に出してはならない。お前の妻や子どもにもいってはならない。わたしはどんな顔をして大路を歩けようか」

常漢は、

「おっしゃるまでもなく、どうしてわたくしが口外しましょうか。ご心配は無用です」

というと、生員は、

「お前の借金は特別に返済を免除しよう。この後もしばしばわが家に往来するがよい。わたしはこの間のことをけっして忘れないようにしよう」

といい、常漢は、

「おっしゃる通りにいたしましょう」

と答えた。

常漢は生員宅にしばしば往来したが、往くと必ず、生員宅では酒と肴を用意してもてなし、急を要するときは金を用立てもした。

これを聞いた者は、生員の愚かさを笑い、常漢の企みに感心した。

（『攪睡稗史』²⁾）

- 1) 常漢：身分の低い男をいう卑語。
- 2) 『攪睡稗史』：編著者未詳。成立は19世紀後半と考えられる。両班官僚たちの無能・貪虐を風刺する内容のものが多い点が注目される。

二十五、鄭晩錫、背信者を裁く

ソウルに一人の富者がいて、親しい友人がいた。その友人は貧しくて、日々を過ごすことさえ困難なほどであったので、その友人に十分に金を与え、それで利殖を行い、生計を立てさせようとした。

富者は従容としていった。

「わたしも今年年老い、余命もいくばくもあるまい。ところが、わたしの息子はといえば、まだ幼く、とても家を治めることができるかどうか、わたしの規模に及ばないのではないかと恐れる。いま、君に十万両を託すので、君は一生を通して利殖をはかり、もしわたしの子が困窮するようなことになったら、元金だけ子に返してほしい」

友人は、

「君のことは通りにしよう。たとえ利子も含めて返すことであっても、感謝するばかりだ」

と答えた。

それから数年もせず、富者は病気になって死んだ。その子は家業を継ぐことができず、数年もすると、家産を蕩尽してしまった。父親の遺言にしたがって、その友人に十万両を求めたが、知らんぷりを決め込まれた。

「もともと返す必要のないもので、いったい、何を出世というのだ」

何度も受け取ろうとして行ったが、その度に断られて帰って来た。

息子については折半してもいいからと、ねんごろに頼み込んだが、それでも聴き入れられなかった。息子は怒り出し、何度も刑曹や漢城府に出かけ、訴訟を行おうとしたが、そのたびに斥けられた。その人が金と権勢を利用して罪を免れたからである。

そのとき、相公の鄭晩錫¹⁾が慶尚道觀察使となったが、名判官として知られていた。息子は慶尚道の監營に行つて陳情した。

鄭觀察使が、

「お前はソウルの間人として、どうして他の道に越境して訴訟しようとするのか」

と尋ねると、息子は、

「あの被告が権勢を持ち、賄賂を使って、罪を免れていて、わたくしのように力のない者がどうして勝てましょうか。聞くところ、觀察使は処決が公明正大だということなので、千里を遠しとせず、参つたのです。お願いですから、觀察使はこのことを公正に判定なさってください。寄る辺なく困窮した身世をどうかお助けください」

と訴えた。觀察使は、

「今日は退去して、ふたたび呼ぶまで待つがよい」

というと、營將と秘密裏に相談して、収監されている大泥棒と組み、あれ

これとこれから行うことを取り決めた。すなわち、ソウルに通牒を送って、その者を逮捕させた。拷問の具を用意して、

「こやつめ、お前は八道の盜賊団の首領として、数十万兩の金を隠し持って、ただで済むと思うか。欺罔することなく、いちいち白状するのだ」と叱りつけた。その者は弁明して、

「わたくしは若いときから年老いるまで、利殖をはかって生きて来て、今に至ってやっと衣食の心配もなくなりましたが、どうして人の財を奪取する理由がありましょう。わたくしが盜賊団の首領などとは万々に不当ないいがかりです」

といった。鄭觀察使は収監されていた盜賊を招き入れて、これに対質を行った。盜賊はいった。

「あなたは某ではないか。わたしは某月の某日に数万兩を預け、某月の某日の晩に数万兩を預け、前後合わせて、あなたに数十万兩が渡っているではないか。そのやり取りは明白で、この場でどうして弁明などできようか。まったく恥知らずな人だ」

その人は、

「わたくしとこの盜人はまったく面識がありません。しかるに、まったくでたらめを述べ立てて、人を不測の地に陥れようとしている。このような白日の下で、どうして根も葉もないことをいっているのでしょうか」

といったが、盜人はさらに、

「厳正で公明な觀察使の下で対質するのに、ことばを飾り立てて弁明に努めるのを朝飯前のように平然と行う。これは大泥棒でなくてはできないことだ。特別なことをしなくては、なかなか自白は得られますまい」

というと、觀察使は大怒して、刑吏の厳しい拷問を命じた。その者は苦痛に堪えず、自白した。

「わたくしは今、不当な罪で死に至る刑罰を受けていますが、これでは

死んでも目を閉じることができません。どうして盗賊の首領として財を築いたりしましょうか。わたくしはかつてある富者から十万の金を借り受け、今に至るまで利殖を生業としていただけで、他人のものに秋毫も手をつけたことなどありません」

観察使が、

「お前が盗賊の首領でないとして、金を借りて利益を増やしていったとすれば、その最初の借りた金はすでに返したのか」

と詰問すると、その者は、

「まだ返してはいません。そのことで罪を問われるなら、甘んじてその罪は受けますが、その他にはなんら罪目はないはずです」

と答えた。

観察使がソウルから来た人を招き入れて、対質させ、

「この人をお前は知っているか」

と尋ねた。その者は、

「この人がわたくしを訴えた人なのですか」

といって、そのソウルからの人を見ると、そのまま頭を垂れて、黙して一言も発しなかった。

観察使は、

「お前は返すべきところがあるのに、返してはいないといった。お前はやはり大盗賊ではないか」

と怒鳴りつけると、その者は恐惶して、

「死罪、死罪、恐れ入りました」

というと、観察使は、

「お前は監営の牢にいて、三日以内に、遅滞なく、全額を返すようにせよ」と命じた。念を押され、刀を振り回されて、その人は牢に入った。

その人は京郷の大商人に連絡して金をすべてかき集めて納めたので、観

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

察使はそれをそっくり、その息子に与えた。

息子はソウルに帰り、ふたたび家業を興して裕福に暮らした。

鄭觀察使の奇計ははなはだ奇抜であった。

（『鷓鴣漫録』²⁾）

- 1) 鄭晩錫：1758～1834 純祖のときの大臣。字は成甫，号は過齋，諡号は肅齋。本貫は温陽。知中枢府事の基安の子。十歳で経史をほとんど読みつくし，1783年，文科に及第，1785年，成均館典籍となった後，兵曹参議を経て，東萊府使だったとき，対馬に対する通信書類を偽造した通訳官を摘発して処刑した。1811年，洪景来の乱が起こると，平安道慰撫使として出て行き，觀察使を勤めた。漢城府尹を勤めた後，戸・兵・工・刑・吏曹の判書を勤めた。1829年，右議政となり，1830年，判中枢府事となった。詩文に長けて遺稿若干がある。
- 2) 『鷓鴣漫録』：ソウル大学所蔵の筆写本。2巻2冊。著者は未詳。第1冊の終わりに甲申年間に書き始めて壬辰の年に書き終えたとあり，1884年から1892年に書かれたことがわかる。著者自身が見聞した19世紀後半の社会相を表し，学者的な見識を披歴するより，民譚的な要素が強い。

人の性と情篇（上）

二十六、風流の義宦 金昌義

一人の宦官がいた。年は若かったが、官位は高く、家も裕福だった。果川¹⁾の大路の側にその家はあった。

科挙が行われることになって、ある日の朝、三人の奴を呼んで、

「道の傍らで待って、科挙のために上京する人で、誰であれ、最初に会った人をわが家に招いて来るのだ」

といい、また酒と肴を準備しておくように命じた。

まもなく、嶺南（慶尚道）の一人のソンビが小さな駄馬に乗り、貧弱な行装で、疲れ切った様子で現れた。三人の奴は馬前を塞いで挨拶をし、しばらく主人の家に立ち寄ることを請うた。ソンビは、

「わたくしはお前たちの主人とは一面識もない。今は道を急いでいるのだ」

と断わると、三人の奴は前後を取り囲み、馬を鞭打ち、罪人を連行するようにして連れて行こうとする。ソンビは馬から下りようとするが、それもかなわず、街中に入っていくと、その家は広荘で、厳然として宰相の屋敷のように見える。三人の奴はソンビを馬から下ろし、堂上に引き立てた。ソンビは憤怒して大声でののしって、

「旅の者をどうして引き立て、このように辱しめるのだ」

というと、主人の宦官は、

「いずれわかると思いますが、今日はここでお休みください」

といて、奴たちに、

「馬の荷を下ろし、馬は厩に入れて秣をたっぷりと飼わせろ」

と命じた。奴たちは一時に返事をして命じられたままに仕事をした。

ソンビが、

「人をにわかになれ込んで恥辱を与えた、それだけでも大いに怪訝であり、しかも、その理由もいわず、事を強引に進める、いったいどういうつもりなのか」

というと、主人の宦官はただ微笑して、

「ここで待たれよ、ここで待たれよ」

というばかりで、ソンビは馬を連れて来ようとしてもかなわず、荷を取り

戻そうとしてもかなわず、ただ舌打ちをするだけである。そうこうするうちに日も暮れて、もう出て行こうにも、出て行けない。

客と主人の晩餐が用意され、次々のご馳走の器が運ばれて来るが、ソンビの怒りは収まらず、盤を押し返して箸を着けようとはしない。

主人の宦官がソンビの気持ちをなだめようとして、

「わたくしは客人を恥ずかしめようという気持ちはいささかもなく、ただ、客をもてなすのを好むだけです。客人は何もお食べにならないでは、身体に悪く、病を生じます。ともかくお召し上がりください」

ソンビは初めて怒りを解いて、食事に箸を付けた。

夜がすっかり更けて、銀の燭台に灯りを点し、主人の宦官が、

「客人を寢室に案内しろ」

というと、別堂に案内されたが、金の炉に香が焚かれ、鴛鴦の枕が並べられて、まるで新婚の部屋のようなのである。しばらくすると、そこでも酒と肴が勧められ、ソンビはいよいよいぶかしく思ったが、主人の宦官は、

「どうぞ召し上がれ、召し上がれ」

と杯を干すよう強く勧めた。

膳が下げられると、美しい女性が化粧をほどこし、数人の侍女に付き添われ、戸を開いて入って来た。ソンビはますます不思議で、あわててどう振る舞っていいかわからない。腰が引けて逃げ出したいほどだが、主人の宦官が引き留めて、

「これはこうなるべき人だけがこうなるのです」

といて、自身は戸を開いて外に出て、金の鍵を外から閉ざし、

「今晚はよくお休みください」

といった。

ソンビはわけもわからず、悄然と座っていたが、燈芯も尽き、夜は更け、四方に人跡も絶えた。女人は雲のような鬢をして玉のような肌をにおわせ、

横たわって恥じらいを帯びた姿態はまことに美しい。ゾンビの憤りはすっかり失せ、性欲がようやく持ち上がった。しげしげと見ると、緋緞のチマをまとして酔った顔は、花のように美しい。もう、ゾンビは我慢がならない。

このときはじめて、女の人が口を開いた。

「わたくしのことばを聞いてくだされば、その後はあなたにすっかり身を委ねることにいたします」

ゾンビが、

「いったい、どういうことだ」

と尋ねると、女の人が、

「わたくしの腹をまたいで、大きな声で牛の鳴き声を出してください」というので、ゾンビは、

「それは驚いた。そんなことができるものか。だめだ、だめだ」

といって、女の人から身体を遠ざけた。しかし、また性欲が募って来る。女の人がふたたび、

「わたくしのいう通りになさらなければ、玉が砕けても、雲雨の夢²⁾を結ぶことはできません」

というので、ゾンビは初めて、蚊の鳴くような声で牛の鳴き声を出した。

「たとえ夜中で誰も聞いていないとはいえ、お前が聞いていて、どうしてわたしが恥じないでいられよう」

「牛の鳴き声があまりに低かったので、あなたの命には従うことはできません。もう一度、首を伸ばし大きな声で牛の鳴き声を出してください」

ゾンビはまた怒りだし、

「一度だって、嫌だったのに、どうして二度もできよう。思いの外に、外で辱めを受け、中で馬鹿げた真似をさせられる。なんという災難だ」

といって、口の中でぶつぶつといい、夜が明けるのを待って、扉を蹴って出て行こうと思うが、その決意がゆるむと、また性欲がもたげて、やや大

きな声で牛の鳴き声を出した。

「ああ、恥ずかしい、恥ずかしい」

しかし、女人はまだ、

「牛の声がまだ十分に大きくはありません。もっと大きな声で外でも聞こえるようにしてください」

という。ソンビは哀願するように、

「もう二度も牛の鳴き声の真似をして、恥ずかしくてたまらない」

というと、女人は、

「すでに一度牛の鳴き声をしたからには、二度も三度も同じこと。鶏の鳴き声や犬の吠える声より低いようでは、どうして肝を燃やし、腸を蕩かす、千金のこの身体を差し上げることができましょうか」

と答えた。ソンビはそのことばを聞くと、いよいよ情欲に堪えず、女人の腹にまたがり大きく牛の鳴き声を出した。年老いた婢女がたまたま小便のために外に出て来て、この牛の鳴き声を聞いた。

「こんな真夜中にどうして牛の鳴き声をするのだろう」

ソンビはその声を聞いて、みずから不覚にも絶倒した。

男と女は深く情を交わし、夜が長く続くのを望むばかりであった。

しかし、鶏が鳴き始めて、暁の星が消え始めた。男と女は夜がふたたびやって来て、この縁が長く続けばいいと願った。あれやこれやといい交わしていると、東方はすっかり明るくなってしまった。すると、主人の宦官が鍵を開けて、笑いながら入って来て、

「いい夜を過ごされましたか」

というと、女人は眉をひそめて恥じらい、立ち上って奥に入って行った。

主人の宦官はソンビを「わが新郎殿」と呼び、侍婢に命じて食事を勧めたが、それは新郎の朝飯の卓に異ならず、今まで見たことのない水陸の珍味でいっぱいだった。ソンビの怒りはすっかり解けたものの、しかし、不

信感はまだ残り、このもてなしの理由を尋ねた。

主人の宦官はそれでも、

「ただ客のもてなしを楽しむのです」

というだけで、ついに詳しい話はしない。ソンビの心は杳杳として、納得できないが、主人と客として酒を汲み交わし、ソンビは自分では酔いつぶれたのを知らない。気が付くと、もう夕方である。ソンビは驚き慌て、暇乞いをしようとするが、主人の宦官はこれを許さず、

「すでに夕陽がさし、これから発ってもソウルには着きますまい。今晚もお泊りになるがよい」

というと、ソンビは女人への情愛に引かれ、主人に引き留められるままに、ふたたび泊まることにした。翌朝、ふたたび暇を告げると、主人はまた許さない。ソンビが、

「二夜も陽台の夢³⁾を結ぶことができず幸せでしたが、千里の槐黄の行⁴⁾ははなはだ重いものです。はるか遠くの田舎の者は、あらかじめソウルに入って同門の者に会い、科挙のための文房具をそろえて、かろうじて白紙の状態を免れます。ここに滞在を続ければ、せっかくの素晴らしい因縁が、悪い因縁に変わってしまいます」

というと、主人はいった。

「その他にもまた、科挙を受けるやり方があるのです。しばらく待たれるがよい」

このとき、科挙の当日まで二日しか残っていない。ソンビは一方では疑い、一方では心配もし、逃亡しようかとも考えたが、馬匹がどこにいるかも知らず、私集⁵⁾など試験場で必要なものすべてが荷物として預けてあって、取り出すすべもなく、心の中にいろいろな思いを生じながら、どうすることもできないまま、また一日が過ぎた。

同門の人びとはソンビがこんなところに逗留していることを知らず、す

でにソウルに来ている。ソンビがまだ来ていないので、途中で病を得たのではないかと、心配もし、同情もしている。

ソンビはやむを得ず逗留を続けているが、終夜、まどろむこともなく、暁には起き上がって長くため息をついて、

「旅立つとき、父母の桂の枝を折る願い⁶⁾ ははなはだ懇切であった。ところが今、わたしは空しく逆旅で籠の鳥となって鬱々と過ごしている。これはどういうわけだ」

というと、主人はいった。

「憂うことはない、憂うことはない」

翌朝、主人は試験紙と筆墨を出したが、すべて極上品であった。また、試験場での飲食物もすべて用意して、

「はたしてお気に召したでしょうか」

というと、ソンビはやや喜んで、礼をいい、

「お心づかいは感謝しますが、すでに同門の者たちに遅れて、書き手⁷⁾ もいません。桂の枝を折ることは断念しました。涙を流して清瀾を渡る⁸⁾ ほかはない」

というと、主人は、

「それもまた憂うことはありません。今回の科挙の場所は春塘台⁹⁾ ではありませんか。そこは宮殿周辺ではわれわれ宦官がもっとも勢力をもつところですよ。わたくしのいう通りにすれば、かならず及第します」

といって、伶俐な奴について行かせ、掖隸¹⁰⁾ や寺府¹¹⁾ に伝言を送って、かならずよく書く手際の者を選んで答案紙を書かせるようにし、それを提出する際にはよく周旋するようにくれぐれも依頼したのであった。そして、ソンビにいった。

「他のところではなく、かならずわたしのソウルの家に行ってください。そうすれば、今回の科挙には間違いなく壮元及第します。新恩¹²⁾ として

帰る道では忘れずにこのわが家に立ち寄ってください。わたくしを忘れないでください」

ソンビは主人のいう通りにした。試験場に入って行くと、酒と肴が左右に用意されていた。巨擘¹³⁾の軽快な運筆で代筆によって書かれて、掖隸に渡され、周旋された後、呈券されたのである。

ついで来た宦官の家の者は用が済むと、何も言わずにすぐに帰っていった。ソンビは同門をも見失い、ひとりでどうしていいかわからず、試験場を出て行った。

榜が出て（発表があって）、はたしてソンビは及第した。三日遊街¹⁴⁾をして、まさに帰路についた。主人の宦官はあらかじめ及第を知っていて、盛大に酒と肴を用意し、高々と白い幕を張って、ソンビを待っていた。ソンビが入って行くと、主人は恩花¹⁵⁾を手に取り、喜んで迎えた。唱榜宴¹⁶⁾を開いて、一晚を明かした。そのときになって初めて、主人の宦官は語った。

「あの女子はもともと良家の子女ですが、貧しくなって寄る辺なく、わたくしが引き取ったのです。姿色はあのように美しく、また才芸にも恵まれているのですが、やるせなく、春閨に空しく年老いていくのが、不憫でなりません。先般、夢の中で、黄牛一頭があの子の腹をまたいで、龍に変じて、天高く昇って行くのを見たのです。わたくしの身がこのようなでなければ、子どもをつくって科挙に及第するのを見ることもできましようが、その望みはもとよりありません。たまたま、あなたを客に迎えて、このように事を構えたのです。あの女子はすでにあなたと契りを交わしています。あなたが連れて行くのがよろしいでしょう」

「尊意は感謝しますが、この道中にどうして連れていくことができましようか」

「わたくしが籠を準備しておきました」

家の前で饞別したが、新しい生活の家具や化粧道具も送られた。

ソンビは科挙に及第するとともに 妾まで得て、喜び勇んで嶺南に帰って行った。郷里の人びともみなこれを祝賀した。

その後、ソンビがふたたび宦官の家を訪ねると、宦官は凄然とした顔色をしていった。

「前日と変わらぬ情はあるものの、わたくしは宦官に過ぎず、あなたは名官の地位にあります。交際を断ちましょう。願わくは、冥途でまたお会いすることにしましょう」

そして、永遠に絶交した。

そのソンビの名を明かすことはできない。宦官はすなわち金昌義¹⁷⁾である。詩を善くし、酒を善くし、書を善くし、琴を善くし、画を善くし、棋を善くした。風流男子と称し、早く郷里に帰り、漁と樵をして過ごし、漁樵子とみずから号した。その送別詩にいう。

万物は陰陽を具えるのに、
わが身はひとりそうではない。
十六歳の春に孤閨をかこつ女子が、
日暮れに花の前で泣いている。

（万物具陰陽 独憐自不然
二八春閨女 暮泣向花前）

この一篇の詩を見ても、その詩を善くしたことがわかる。実に義宦というべき人物である。

（『記聞拾遺』¹⁸⁾）

- 1) 果川：京畿道の地名。ソウルの南郊にある。
- 2) 雲雨の夢：男女が同衾することをいう。宋玉の「高唐賦序」に楚王が高唐で遊んで夢の中で神女と同衾して、別れるとき、神女が「旦為行雲，暮為行雨」

といったのに由来する。

- 3) 陽台の夢:男女の契りをいう。陽台は地名で、「雲雨の夢」の由来と同じく、「高唐賦序」に「朝朝暮暮，陽台之下」という句節から。
- 4) 千里の槐黄の行：遠くから科挙に赴く道のをいう。中国で，陰曆七月，槐の花の黄ばむころに試験が行われたのでいう。
- 5) 私集：科挙の試験に赴くとき，必要な詩文などをまとめて書いて置いた手稿。
- 6) 桂の枝を折る願ひ：科挙に及第することをいう。晋の郗詵が進士の試験に及第したのを「わずかに桂の一枝を折ったに過ぎない」といった故事による。「詵对策上第……武帝問曰，卿自以為何如，詵対曰，臣举賢良，对策為天下第一，猶桂林一枝，崑山之片玉，帝笑」（『晋書』郗詵伝）
- 7) 書き手：書に長けた人で科挙の試券に代筆として文字を書き込む人。
- 8) 涙を流して清灞を渡る：清灞は唐の長安の近辺にある川の名前。科挙に落ちた人が涙を流してこの川を渡って帰ったことに由来して，科挙に落ちることをいう。
- 9) 春塘台：昌慶宮の中にある殿舎。ここで行われる科挙を「春塘台試」という。
- 10) 掖隸：掖庭署に所属する官吏や奴隸をいう。
- 11) 寺府：内侍府，宮中で宦官たちが勤務する官府をいう，「内侍」を称する役所は，隋，唐の時代から存在し，高麗以来，朝鮮半島でも存在して，宦官が所属したので，「内侍」は宦官を指すことばにもなる。琉球は別として，日本には宦官がいず，律令制のもとで「内侍司」が置かれるものの，女官の所属する役所であり，尚侍，典侍，掌侍がいて天皇に近侍し，奏請，宣伝のことを行った。天皇に近侍するために，女御・更衣とは別に天皇の側妾の役割りをもつことも多々あった。
- 12) 新恩：新たに科挙に及第した人をいう。
- 13) 巨擘：本来は偉大な儒者の意味であるが，ここでは科挙において文章を代作することを専門にする人間をいう。

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

- 14) 三日遊街：科挙に及第した人が風楽をともない、三日のあいだ、座首（科挙の試験官）や先進者、親戚の家々を訪問する風習。
- 15) 恩花：科挙に及第した者が王から下賜される造花。御賜花ともいう。
- 16) 唱榜宴：科挙に及第したことを祝って行う宴会。
- 17) 金昌義：ここにある以上のことは未詳。
- 18) 『記聞拾遺』：編者未詳。東京大学図書館所蔵の筆写本。

二十七、深深堂閑話

蓀谷¹⁾の深深堂で、主人の申士謙²⁾と清州の黄聖若³⁾が閑談をしていたが、その話は文文山⁴⁾、趙静菴⁵⁾、金河西⁶⁾、権石洲⁷⁾、閔老峯⁸⁾、金文谷⁹⁾、李諧議¹⁰⁾などに及び、すべて女色にかかわることであった。

その一

黄ソンジが話を始めた。

雑書を見ると、文山が科挙に赴いたとき、日が暮れて、とある村にたどり着いた。その村では疫病が蔓延していて、多数の死者が出ていた。客店をのぞいても、かならず三、四の死体があり、泊まることのできる店がない。久しく歩き回って、やっとのことで大きな家に投宿しようとする、大門で応接する者もなく、舎廊に人もいなかったが、死体も見当たらない。鞍装を解いて、馬に秣を飼わせ、舎廊房に登って宿ることにした。

夜も二更におよび、素服の少女が手に灯籠をもってやって来て、舎廊房の窓を開け、じっと見つめては立ち去った。しばらくして、夕食が出て来たが、すこぶる清潔でご馳走であった。文山はこれを食べて、夜が更け、すると、あの素服の少女が二人の侍女を前に立て、灯籠を持たせてやって来て、文山に挨拶をした。文山が恐縮して、

「遠くから来た旅人が寄宿するところもなく、たまたま貴宅に身を投じましたが、寂莫として人もなく、男子もいず、深閨の処女がこのように出て来られて、恐縮すること、しきりです。しかし、男女間の礼節は深重です。一部屋でともに一晚を過ごすことはできません。私は出て行くことにしましょう」というと、少女はそれに対して、

「家を襲った禍は残酷で、死体が山のように積み重なりましたが、一人わたくしだけが一縷の命をつなぎ止めました。公の儀容を拝見しますと、まことに傑出した君子です。きっと人の困難を助ける方と見え、死体の埋葬のをお願いしたいのです。また年弱なこの身をお見捨てにならないでください。わたくしの一身をあなたに委ねようと思うのですが、いかがでしょうか」

といった。文山は、

「積まれた死体の埋葬はいたしましょう。しかし、旅の身で倉卒に婦人を得て行くのは、大いに礼儀に背くことで、どうしてもできません」

と答えると、少女は拝礼をして奥に入ったが、すぐにまたやって来て、

「さきほどお願いしたのは、この身をあなたに委ねることにして、この世からあの世に逝こうとするつもりがなかったからです。しかし、生死は今に迫っています。君子は惻隱の心を起こしてください」

といって、文山の袖に取りすがった。しかし、文山は頑強に拒み通して、夜が明けたのだった。

朝になると、文山は奴婢たちを呼び、その家にいた者たちすべてを動員して、積み重ねられた死体を埋葬した。そして、すぐにその家を出ることにした。

そのとき、素服の少女はいった。

「君子は死んだ人たちには大きな恩恵を施された。きっと応報があり、官途は大いに開かれたものになるでしょう。しかし、生きた人間はついに

顧みることなく、殺してしまわれた。この怨みの報いもきっとお受けになろう。君子は顕達なさろうが、終りをまっとうなさることはあるまい」

文山が馬にまたがって、その家を出るやいなや、その家から泣き叫ぶ声が聞こえた。少女は自殺したのだった。

文山はどうすればよかったのだろうか。

男女のあいだには大きな節義があるが、生死も一大事である。それに処する術は義理の判断に緻密な君子でなければ、いったい誰がよく行い得ようか。文山の話の真否はよくわからないが、この伝わった話だけで判断すると、まず当初から、文山には二つの失がある。君子は一挙手一投足が慎重でなくてはならず、粗忽な振る舞いがあるてはならない。暮れ方になって宿を決めるときに、どうしてその家を不審に思わなかったのか。始めに子細に考えず、男子がいない士族の家に宿を取ったのが間違いの一であり、処女が灯籠をもって中をのぞいたとき、後に何が起こるかを考えることもなく、そのまま居続けて避けることがなかったのも間違いの二である。これは文山が原則を間違ったのである。

処女がふたたび接近したとき、処女の言辞と気配から、すでに生を軽んじているのを察知することができなかつたのか。許諾すれば礼にもとり、許諾しなければ残忍な仕儀となる。もし後日を期して、固く約束を交わし、自殺することなどないようにして、帰路にあらためて話し合い、喪の終わるのを待って、連れて行けばよかったのである。処女がもし孤独で寄り辺なく、一人でいて何か辱めを受けるのを恐れて、駕籠に乗ってついてくれば、それを許せばよかったのである。

このようにしていれば、他日、その処女が自殺するようなことがあっても、文山に罪があるとはいえず、わたくしとしても遺憾とせず、文山も罪を逃れたのである。

その二

趙静菴の年齢は十三、四歳であったが、容貌がはなはだ美しかった。いつも書物を脇に挟んで往来するのを、隣家の娘が盗み見して、深く思慕するようになった。しかし、娘はとうていそれを告白することができない。恋々とする思いのために、ついには病気になってしまった。

少女の父母にとっては一人娘が悲しみ、悶々としているのを見ても、その理由がわからない。父母が、

「お前には何か思い詰めていることがあって、それで病んでいるのではないか」

と尋ねると、少女はうなずくものの、それを話そうとはしない。病が深刻になって初めて、その理由を話した。

父親は隣の静菴の家に行き、これを静菴に話そうとしたが、その端正な容貌を見て、話すのを止めた。静菴の父親に会って、かつ泣き、かつ訴えると、父親は憐れんで、静菴を前に呼び、

「お前のために死のうという人がいれば、お前はこれを生かすことができるか」

と尋ねた。静菴は、

「わたくしと関係のない人であっても、生かすべきは生かすべきで、ましてやわたくしのために死のうという人を、どうして放っておきましょう」と答えた。そこで、父公は事情を話し、娘の父親を指差し、

「この人は官庁の役人としては微賤であっても、その娘というのは処女である。お前が妾として入れるのに、どうして義理に背くことがあろうか。その願いをかなえてやってはどうだろうか」

といった。静菴はそれに対して、

「その女子は父母の命と仲媒のことばによらず、ひそかに男子を覗き見て、淫らな心を起こしました。その咎だけでも、死んでも惜しむに足りま

せん。父上は息子に義をお説きになりながら、どうして淫女をお進めになるのですか」

と答えた。父親には返すことばもなかった。娘の父親は泣きながら、帰って行ったが、娘を直視することができなかった。

その女の病気はいよいよ重くなった。父親は泣きながらまた静菴の家にやって来て、かつ泣き、かついった。

「病勢はいよいよ急で、万に一の僥倖をお願いにきました」

静菴の父もまた泣きながら、静菴に命じたが、静菴はついに聴こうとはしなかった。娘の父親は家に帰って、娘を見ながら、もうかけることばもない。娘は、

「すでに僥倖などないのは、よくわかっています」

といて、顔を袖で覆って、こと切れてしまった。

葬礼を行い、棺が静菴の家の門前を通るとき、重くなって動こうとしない。父親が泣いて静菴に訴えた。

「棺が前に進もうとしません。道令が何か文字を書いてくださいますか」

静菴もこれには涙を流し、下着に文字を書いて、棺を蓋うと、棺はやっとのことで前に進んだ。

ここで、この娘の咎はひそかにのぞき見をしたことにあるだけであるが、静菴には二つの過ちがある。父親の命は不義ではなかったのに、従わなかったことが一つめ、処女を過度に責めて、不憫に思って同情しなかったのが二つめである。

その三

権石洲が山道を行き、とっぷりと日が暮れて、ある大きな瓦屋根の家に投宿しようとした。大門を入っても、人が見えない。声をかけてしばらく

経って、やっと婢女が出て来て、いったいどのような方で、姓氏は何で、どんな用事で来たのかと尋ねて、中に入って行った。やがてふたたび婢女が出て来て、舎廊房の扉を開けて、石洲を招き入れた。

石洲が座ると、婢女が酒と肴の膳を勧めたので、酒を飲み、続いて夕飯が出て来たので、石洲はこれらも食べた。すると、蒲団が敷かれたが、石洲はなに一つ拒絶することはなかった。

夜が更けていった。石洲は詩を吟じ、まだ寝付けない。このとき、老年、中年、そして若年の三人の婦人が婢女の掲げる灯籠の後に立って舎廊房に入って来るではないか。石洲は慌てて座席を下りた。

老婦人がやおら口を開いていった。

「不思議に思わないでください。わたくしたちは権氏の婦人です。あなたもまた権氏でいらっしゃり、たがいに相対することがどうして礼にもとりましょう。安心して座席に座り、わたくしの話を聞いてください。わたくしが権氏の家門に嫁して三十年になりますが、宗族がいるという話しは聞いたことはありません。おおよそ独り子で十余代が続き、わたくしもまた嫁して独り子を産みましたが、その子の妻がこの中年の婦人で、この中年の婦人がまた独り子を産みました。その独り子がこの若年の婦人と結婚しましたが、まだ同衾もしないのに、にわかにな病づいて死んでしまいました。この若い孫の嫁が男女の道も知らないままであるのが不憫でならず、また後継ぎも絶えてしまいます。あなたはこの事情を汲んで、今夕、この処女の孫嫁と同衾して、男女の道を教えてやっていただけにないでしょうか。幸いにも子を得ることができれば、それは権氏で、この家を絶やすこともなく、他の人よりも好都合なのです」

石洲は色を成して、それはならないとことわった。老婦人は涙を流して、「ならないことを知らないわけではありません。この若い寡婦がただただ不憫で、そのならないことをたっってお願ひしているのです」

石洲は頑強に拒んで、老婦人のことばを聞かなかった。年若い婦人がまず立ち上がり、中年の婦人もそれに続き、老婦人も最後に立ち上がったが、なおも懇請した。

「どうしても願いを聴いていただけないのでしょうか」

石洲はついに応じなかった。

三人の婦人は奥に入って行った。年若い婦人は、

「お祖母さまの計画は結構とはいえず、いたずらに恥をかいてしまいました」

といい残して、ついに自刎した。

石洲は科挙を受けたが、及第することなく、ついに士禍でもって死んだ。世の中の人はいずれもこの夫人の祟りではないかといっていた。

石洲の過ちは最初にあったのではないか。舎廊房に案内されると入って行き、酒色を出されると喜んで飲み食いしたのでは、婦人たちはどう考えたであろうか。一度は頼んでみようと考えたに違いない。

その後のことは石洲が正しい。ひとたび結婚すれば、終身、再嫁しないのが婦人としての道理である。もし若い婦人が不覚にもその道理を失っても、君子をはなはだしく責めるのは不当であろう。むしろ、君子としてすでに結婚した婦人と淫行を行えば、後に刀剣が振り回されることになっても、弁明できることであろうか。

その四

金文谷の出遭ったことは静菴の出遭ったことと同じで、その身の処し方もまた静菴と同じであった。だから、今はふたたび議論するまでもない。

李諮議はかつて遠く旅して、ある客店に入り、灯りを点して読書していた。その声は朗々として金石から出たようで、隣の家はひそかにこれ

を聞いて、恋情に堪えなくなった。夜が更けて、女は諮議の部屋に忍び込んで、諮議の前に座り込んだ。年は二十歳前後、李諮議は襟を正して座りなおし、女に尋ねた。

「鬼なのか、人なのか」

女は、

「人です」

と答える。諮議が、

「賤人なのか、貴種なのか」

と尋ねると、

「士官の娘です」

と答える。

「結婚しているのか、していないのか」

と尋ねると、

「まだ処女です」

と答える。諮議はいった。

「たとえ賤人の女であっても、垣根を越えて男子に会ってはならない。ましてや士官の娘ではないか。すみやかに立ち去るがよい。立ち去るがよい」

女は、

「礼儀を知らないわけではありません。女子としての情がまさってどうしようもないのです。今夜は死んでも立ち去るわけにはまいりません」

という。諮議は口を苦くして拒み、ついには叱りつけるが、女は立ち去ろうとはせず、

「わたしが死ぬか生きるかはただ今夜にかかっています。礼儀をいわないでください。わたしがそれを知らないわけではないのです」

というばかりである。

李諮議はどうすることもできず、ついに客店の主人を呼び、その女の父親を呼んでくることになった。女の父親はやって来て大いに驚き、ひどく娘を叱りつけ、ひきずって行った。

女はいった。

「女子の身で、夜更けにこのようなことを仕出かし、すでに大節を失ってしまいました。どうしてもうまっとうな人として生きることを望みましょうか。お父さん、少しお気持ちを静めて、わたしに客人と話をする時間をください。そうでなければ、ここで死んでしまいます」

といって、上がり框にしがみついて、死んでも出て行こうとしなかった。父親も力の限り引きずり出そうとする。女は、

「娘が節義を失うのを目の前にするのは、死ぬのを見るより無残なことなのではないでしょうか」

という。父親はいよいよ怒って、

「このような節義を失うさまを見るより、いっそ死ぬのを見たいものだ」といって、娘はついに舌をかみ切り、頭を門の戸板にぶつけて、最期に、

「客人はまことに立派な方です。しかし、きっと大きな殃に見舞われましょう。わたくしはこれから厲鬼となります」

といって、息を引き取った。

李諮議は、その後というもの、いつもその女が舌をかみ切り、戸板に頭をぶつける姿を夢に見た。そして、その家には夭折の禍があって、諮議は独り身のまま早死にをした。

李諮議は変事に対処する術を知らず、正道に固執して、権道が不足した。仁と智を忘れては大事に至る。もし一毫でも名を立てようという意志があったなら、義を堅く守るあいだに災いを免れることができたのである。

その女が死を覚悟してやって来て、とうてい斥けることのできないの

を理解したなら、店の者をやって女の父親を呼んで、その女の悪行を明らかにするようなことはするべきではなかった。みずから女の家におもむいて事情を話し、女の罪も隠れるように善処して、女の家泊まりもすべきだったのである。そうすれば、女も諮議の後について来て、父親は百端に差配して文章をよくする諮議を婿に迎えたであろう。その女の心も穏やかになって自分の部屋に帰っていったろう。それが最善であった。

もしその女が、

「生きるか死ぬかは今夜にかかっています。客人がわたくしを受け容れずとも、わたくしはすでに客人に身を委ねたのです」

といったなら、その女の父親に、

「わたくしはすでに結婚しています。あなたの娘御はこういっていますが、どうしましょうか。あなたの家門を考えて、娘御が妾になることはよろしいのでしょうか。あなたのご意向はいかがでしょうか。娘御と相談なさってください。わたくしが関与することではありません」

というべきであった。そうすれば、許すか許さないか、死ぬか死なないか、怨むか怨まないかは、もっぱら父親に関わり、李諮議の関せぬことである。しかるに、そのようなことを顧みることなく、客店の人間に娘の父親を呼んで来させ、大きな声を出して騒動になり、父親は娘を殴打し叱責して狼藉たる様子になってしまった。娘が胸中を訴える間もなく、父親が深く考慮する間もなく、膏血が客店の前に飛び散ることになったのである。これは仁者の忍びざるところであり、智者の為さざるところである。

『周易』の「大伝」に「会通するを覩て典礼を行う」とある。

おおよそ変事が生じ、対処するのに困難なときでも、その中でも子細に考えてみれば、かならず通路が開けて出て行くことができるものである。かならず逆に行き、反対のことは行ってはならない。それゆえ、「典礼を行う」というのである。

もし、殺身する以外に道がない場合には、その殺身が典礼であり、通路となるのである。李諮議の会った女が寡婦であれば、李諮議は死んでも許すことができないが、その女子の家を訪ねて行き、その咎を隠して善処すれば、すなわち、別に道理があるわけではなく、それが典礼なのである。もし処女であれば、その女子の父がみずから処するに任せ、その父のことは聴くのが典礼なのである。

その五

老峯・閔相国は酒をたしなみ、執務するときには害を恐れて節制していたが、私に郊外に遊覧するときには痛飲して、夜になるとかならず酔っていた。

あるとき、役所から墓参りに出かけ、山村で某氏の家に至ったが、某氏はかつて裨将を歴任した人で、あらかじめ旨い酒を用意して待っていた。老峯は夜が更けるまで劇飲して、すでにすっかり酔ってしまい、その某氏に、

「お前には処女の妹がいたはずだ。どうして飾り立て化粧でもさせて、わたしに見せようとししないのだ」

というと、某氏は、

「大監に命じられて、どうしてその命に従わないでいましょう」

といい、中に入って行って、母親とも相談して、すぐに妹に化粧をさせて連れて来た。老峯はといえば、すっかり酔って寝込んでしまっている。妹を老峯の側に座らせて、自分は戸の外に出て待った。

鶏が鳴いた。老峯は酔いも覚めて目を覚ましたが、側には化粧をした処女がいる。驚いて、

「わたしはまだ夢を見ているのだろうか。あるいは鬼か。どうして女子がわたしの横にいるのか」

という、外にいた某氏が入って来て、いった。

「大監はにわかには妹を求められました。そこで、母と相談して、妹に化粧をさせて侍らせたのです」

老峯は大いに驚き、起き上がって、いった。

「わたしがそんなことをいう道理があろうか。わたしがたとえ酔っ払っていたとはいえ、どうしてそんな無礼をいおうか。お前は早く妹を連れていけ」

その人は躊躇して、動こうとしない。老峯は怒り出して、

「お前が妹を連れて行かないなら、わたしは夜を冒してでも、この家から出て行こう」

というので、その人は妹を内房の方に連れて行った。

老峯はその人を峻厳に叱りつけた。

「お前はわたしが酔った隙に乗じて、妹を進めて、自分の利益を謀ろうとした。あるいはわたしを陥れようとしたのではないか」

「死んでも、そのようなことはございません」

しかし、老峯はかたくなにその人を信じなかった。

その後、その家ではあえてその女子を嫁がせることはなく、その女子もまた、

「半夜だけでも大監が休まれている側に侍っていた以上、わたしは大監の女です。他の方に嫁ぐことはできません」

といていた。その人が隙を見て、老峯に妹の話をして、

「わたしの妹もすでに年を取りました。大監はどうか憐憫の心をお持ちください」

という、老峯は、

「処女が何を考えていよう。これはみなお前の考えだろう。どうして嫁がせないのだ」

といった。その人は泣きながら、妹の今の様子を訴えたが、老峯は信じようとしなかった。このようなやり取りが何度もあったが、老峯は終始一貫して信用せず、その女子に会おうとしなかった。

ついにその女子は恨を抱いて病づき死んでしまった。

老峯の一生は禍に見舞われることが多く、福が少なかった。禍が生じるときはかならず女鬼の祟りが及んだのではないかという。その後、その女の体魄を老峯の墓の横に移したが、これは老峯の家でもやはり女子を不憫に思ったからである。

老峯は初めも最後も間違っていた。

けだし、人が修養するのは、心を磨いて事物を主宰するためである。公と私、朝と野、そして大と小、広と狭などの別があったとしても、つねに明德をこころがけて、一時であっても昏迷があってはならないのは同じである。いま、老峯は気持ちの緩んだ私の野遊びをして、軽い気持ちで、大酒を飲んで乱言を吐いた。人を誤らせ、自らも誤った。これが始めの間違いである。

田舎の女子がみな礼儀を知らないわけではないが、固有の本性の発露として理解できないものでもない。どうして一線を画して知らんぷりを決め込むのか。詐術だと憶測して、時間が経つままにいいよ意地を張り通した。これが最後の間違いである。

その六

金河西は仁宗¹¹⁾に侍従として仕えたが、いずれ大きな禍変が起こるのを予見して、外任（地方官）の職を請うて、玉果¹²⁾の県監となった。

しばらくして、仁宗が亡くなり、文定王后¹³⁾がわが子の明宗¹⁴⁾を立てると、王後の兄弟の尹元衡¹⁵⁾が国政を執って、仁宗の外叔の尹任¹⁶⁾を殺

害して、自分たちに属さない士類を害した。

河西は仁宗が亡くなったのを知ると、官職を棄てて隠遁し、何度も招請されたが、ついに出て行くことがなかった。

鄭松江¹⁷⁾は若いときから奇特的な気質があり、清廉さが人に抜きん出て、身を処するに厳格であり、先賢の学問にだけ意を注いでいた。あるとき、河西を訪ねて行ったが、河西は酒に酔ってうたた寝をしていた。客人がやって来たと聞いて、河西はやおら起き上がり、二人の侍女を脇にしたがえ花園に出て行った。その風姿はみやびやかで、千鳥足を侍女に支えられながら、座に就くと、談論が風発した。その姿は俗世間から高々と超越していた。

松江は河西の処世を欣然と慕い、それ以後というもの、銘酒と美姫をかならずしも遠ざけなくなった。

ああ、松江のように賢明な人間が酒色を遠ざけていれば、その学問の成就と功績はいかばかりであったろう。どうして河西の過ちを真似などすることがあったろう。残念なことである。

おおよそ、河西はみずから世間を棄てた人間である。酒色で自己を韜晦していたのだが、その害が遠くに及ぶことを知っていただろうか。

古人がその名声と徳望が高ければ、いっそう身を慎もうとしたのは理由があるのである。

(『雪橋別集』)

- 1) 蓀谷：京畿道の地名。ソウルの南郊にある。
- 2) 申士謙：この話にある以上のことは未詳。
- 3) 黄聖若：この話にある以上のことは未詳。
- 4) 文文山：文山は号。文天祥 1236～1283。中国南宋末期の武人であり、政治家。字は宋瑞、または履善。江西省の人。滅亡に向かう宋の臣下として元と戦い、

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

宋の滅亡後は元に仕えるよう勧誘されたが、忠節を守ってついに殺された。その「正気の歌」は有名。

- 5) 趙静菴：静菴は号。趙光祖 1482～1519。中宗のときの性理学者。字は孝直，諡号は文靖。吉再の学統を継ぐ金宏弼の門人で、『小学』『近思録』を基礎として経伝の研究を行った。平素も衣冠を正して端正にふるまい，言行も古の聖人にならって厳粛であったという。士林派の領袖として，中宗の信任を得て，賢良科の実施，昭格署の廃止などさまざまな施策を行ったが，自派の士林を多く登用し，言動が過激に走ったために，勳旧派の激しい反発を受けて己卯の士禍（1519）を招き，一派はことごとく斬罪，彼自身も綾州に流され，その地で賜死した。
- 6) 金河西：河西は号。金麟厚 1510～1560。字は厚之，湛齋，諡号は文正。本貫は蔚山。1540年，別試文科に丙科で及第，弘文館副修撰となった。尹元衡と尹任のあいだの党争に嫌気がさし，1545年，乙巳士禍が起こった後には病を理由に出仕せず，故郷の長城にもどって性理学の研究に励んだ。
- 7) 権石洲：石洲は号。権躡 1569～1612。光海君のときの賢儒。字は汝章，号は石洲，本貫は安東。官途を歩まず，江華島で人びとを教えた。詩才に抜きん出ている，宣祖は彼の詩の数編をいつも書案に置いた。壬辰倭乱が起こると，主和派の大臣の処刑を主張した。光海君の妃の縁戚である柳氏の専横を諷刺する「宮柳詩」を作って帰郷することになり，東大門の外で下賜された酒を飲んで死んだ。
- 8) 閔老峯：老峯は号。閔鼎重 1628～1692。肅宗のときの文臣。字は大受，諡号は文忠。江原道觀察使・閔光薫の息子。1649年，進士に合格，成均館典籍，湖南御史などの要職を歴任，仁祖のときにすでに賜死していた姜嬪（昭顯世子嬪）の無実を上疏して，王にその忠誠心を認められた。1680年には左議政に昇進したが，1689年に張氏が王の寵愛を受けて仁顯王后が廃位になったとき，碧洞に流されて死んだ。仁顯王后は弟の維重の娘である。

- 9) 金文谷：文谷は号。金寿恒 1629～1689。字は久之，諡号は文忠。十八歳で司馬試に合格，二十三歳で謁聖文科に壯元で及第，官途を歩み，六曹の判書を経て右議政・左議政を歴任して，領議政にまで至った。節義によって名が高かった金尚憲の孫として家学を継承して宋時烈などと交遊し，西人が分裂したときに老論の領袖となった。1689年，鎮島に流され，そこで賜死した。三人の息子，夢窩・農巖・三淵は当時の名士であった。
- 10) 李諮議：諮議は東宮に所属する官職名。李諮議が誰を指すのか未詳。
- 11) 仁宗：1515～1545。朝鮮第12代の王。在位は8か月。諱は皓，諡号は榮靖，字は天胤，中宗の長子。母は章敬王后尹氏。没後，異母弟の明宗が即位すると，乙巳士禍が勃発し，自らの外戚（大尹派）は明宗の外戚（小尹派）によって肅清されたが，仁宗の死自体も毒殺説が伝わっている。陵は孝陵。
- 12) 玉果：全羅南道谷城郡にある地名。
- 13) 文定王后：1501～1565。中宗の妃。姓は尹，本貫は坡坪。尹之任の娘。1517年，王妃となった。所生の明宗が即位すると，垂簾聽政を行い，尹元老を海南に流配，尹任などに賜死する，いわゆる乙巳士禍を起こし，尹元老などの親族とともに政権を壟断した。僧の普雨を信任して，仏教を篤実に信仰した。陵は泰陵。
- 14) 明宗：1534～1567（在位 1545～1567）。朝鮮第13代の王，諱は峴，字は対陽。妃は仁順王后沈氏。中宗の第二子であり，仁宗の弟。諡号は恭憲。十二歳で即位して母後の文定王后が垂簾聽政をしたので，実権は文定王后と外戚である尹元衡が握った。尹任は仁宗の母の章敬王后の弟として尹元衡と対立して，尹任の大尹派と尹元衡の小尹派の角逐が熾烈になって，ついに尹元衡が乙巳士禍を起こして尹任一派を肅正，政権を壟断することになった。尹元衡を牽制するために李樑を登用すると，李樑もまた徒党を組んで，党争はやまず，政治は紊乱した。陵は康陵。
- 15) 尹元衡：？～1565。明宗のときの権臣。字は彦平，本貫は坡平。坡山府院君・

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

之任の子で、中宗の継妃である文定王後の弟。1533年、文科に及第、性格は放恣かつ陰險で、文定王后が慶源大君（即位して明宗）を産むと、これを王にするために画策した。それが成ると、乙巳士禍を起し、敵対する大尹派を除去して、みずからの小尹派の勝利に導き、政治を専断した。

- 16) 尹任：1487～1545。字は任之，本貫は坡平，中宗妃の章敬王後の兄。中宗のとき、武科に及第して官職は賛成に至った。尹任は仁宗の外舅として、尹元衡は明宗の外舅として対立するようになり、仁宗が亡くなると、勢いに乗った元衡によって乙巳士禍が勃発して、任は賜死されるに至った。
- 17) 鄭松江：松江は号。鄭澈 1536～1593 宣祖のときの名臣・文人。字は季涵，本貫は延日。金麟厚・奇大升に学んで、1562年、文科に及第。成均館典籍となつて、1567年には李珥とともに湖堂に入った。すでに東西の党争が激化して、鄭澈は西人の領袖となり、東人の李滄一派と争った。1580年には、反対党派に退けられて江原道觀察使となつて出て行き、関東八景を友として過ごした。翌年には朝廷に戻り、右議政にまで昇つたが、東人の勢力が強くしばしば帰郷を余儀なくされた。1592年には壬辰倭乱が起り、平壤の王の下にかけつけて国難に当たつたが、江華島で死んだ。「関東別曲」「星山別曲」「思美人曲」などの歌辞の傑作がある。

二十八、遺訓一言うに易しく、行うに難しい貞節一

進士の任^{イムフイジン}希進は湖南の人である。壬辰の倭乱に際して兵として出て行き、晋州の戦いで死んだ。その家門は代々節義において名が高かつた。

希進の先祖に儒生の某がいた。任某はまだ結婚する前の弱冠の年に郷試に壮元で合格し、会試を受けようとしてソウルに行く道で、長城を通り過ぎるときに、雨に遭つたが、適当な客店もあたりには見つからなかつた。しかたなく、歩き続けて、とある邑にいたつたが、竹藪がうっそうと茂つて、濃い緑の中で朝鮮鶯の鳴き声が聞こえ、まことに絶妙な景致である。あち

こちとまわりを振り返って歩を進め、景色を楽しんで、道の遠近を忘れるほどであった。すると、集落が尽きるところになって、周りを竹垣でめぐらせた家があり、その門にもたれかかって一人の女子が立っている。風に飛んでいく絹綿糸を捕まえようとして、無邪気ににこにここと笑っている。任某はひと目これを見て、心を奪われ、近づいていってことばをかけた。少女は特に怒りもしなかったが、答えもせず、奥の方にいる母親を呼んだ。すると、背中曲がった老女が出て来て、少女にどうしたのかと尋ねた。

「どこからかやって来た両班がしつこくて困ってるのです」

任某ははなはだ難儀してひどく腹が空いているといい、何か飲み食いするものを乞うた。老女は、

「家はたいへん狭苦しく、お客が座る場所もない。娘や、お客さんに冷たい水一碗をさしあげなさい」

といった。少女は返事をして出て行った。任某が、

「あの娘さんは幾つだろうか」

と聞くと、老女は、

「まだ十三歳ですよ」

と答える。任某が、

「まだ嫁がせないのですか」

と尋ねると、老女は

「わたくしがこのような老残の身で、ただこの一人の娘だけが頼りになって、膝下に留めて他所に出そうとは思わないのです」

と答える。任某はいった。

「女子は嫁いで、父母兄弟から遠く離れていくものです。膝下に留めておくのは長い目で見れば、いい考えではありません」

少女が冷たい水を汲んで帰ってきて、二人の話を聞いて、顔色を赤らめ、老女に、

「お母さん、このお客さん、まだどんな方かわからないのに、あまり話さないでください」

という、老女は、

「聞くところは聞くものですよ。それはわたしが決めること。お前は何を心配しているのかね」

と答えた。そこで、任某は郷試で壮元であったことを自慢して、老女の心を動かそうとしたのだが、老女はしばらく沈思した後で、

「壮元というのはどんなものなんですか」

といった。任某は、

「書物を読んで文章の才を争い、自分の名前が金榜（合格者）の筆頭になれば、そのときから文任（国家の文章）を担当して、詔書をつくり、国家の華として第一人者となります。それを壮元というのです」

と答えた。老女が、

「その第一人者というのは何年ごとに出てくるのですか」

と尋ねると、任某が、

「三年です」

と答えた。少女が横で聞いていて、微笑みながら、

「わたしは壮元というくらいなら、千古の第一人者をいうものと思っていたわ。三年に一人出るのなら、それがどうして栄光といえ、そんなに自慢げに話せるのでしょうか」

という、老女は少女を叱りつけ、

「この小娘はごさかしいおしゃべりをして、人にけちをつけるものではない」

という、少女はさらに、

「わたしにどんな関係がありましょう。あの愚かな客人はご病気なんじゃないかしら」

といて、笑いながら立ち去った。

任某はしばらく茫然として立ち尽くしていたが、老女にまた、

「もしお嫌でなければ、結婚の約束の印としてお受け取りください」

といて、頭に刺していた金の簪を抜いて与えると、老女が手で再三再四なでさすって見て、

「これを嗅いでも何の匂いもせず、手に握っても冷たいまま、これはいったい何なのですか」

と尋ねた。任某が、

「それは黄金というものです。寒ければ衣服をつくり、餓えれば食事をつくることのできる、まことに貴宝というべきものです」

と答えた。老女が、

「わが家には田畑が何頃かあり、桑の木が何株かあって、寒さと餓えを心配することはない。このような物はわが家には必要ない。壮元さんにお返ししますよ」

といて、投げつけ、続けて、

「残念なことだ。愚かな若造が、風雅なところはまったくなく、いたずらに財勢でもって人を釣ろうとする」

といい終えると、扉を開けて出て行った。

任某は茫然としてしばらく立っていたが、ため息をついて、立ち去った。

任某はソウルに上って南宮（礼曹）に昇った後、応榜して故郷に帰るとき、ふたたびこの道を通って、老女の家を訪ねた。ところが、病気を口実にして、会おうとしない。その家の内情を隣の家尋ねると、代々の両班の家で張の姓であるが、今は貧しく、叔父の家の傍らに母と娘が相寄り添って過ごしていて、娘はまだ嫁いでいないということである。

任某はその叔父を通して求婚した。母親は当初は妾にするつもりではないかと疑ったが、そうではないとわかって、これを許可した。任某はそこ

で女と結婚して故郷の家に帰っていったのだった。

その女子は聡明で、凡節を知り、任某もはなはだ満足だったが、それから幾年もせず、任某は不幸にも、張氏の腹に一人の子を遺して、死んだ。張氏はその子を撫育して節義を守った。婦道を尽して、その子も成長して子女が多く生まれ、張氏もすでに年齢が八十歳にもなって、孫、曾孫たちが林のように成長した。

死に臨んで、孫や曾孫の夫人ら呼び寄せると、床の下に輪になって侍した。張氏は口を開いていった。

「わたしには言い遺しておきたいことがある。お前たちはちゃんと聞いておくれ」

みなが、

「わかりました」

という、張氏はいった。

「お前たちはこの家の嫁となって、百年を夫と共にして老いれば、それは勿論、この家門の福となる。またたとえ不幸にも、若年で寡婦となったとすれば、自身でよく考えて、節を守る自信があれば節を守り、そうでなければ、尊重に告げて、再嫁するのもまたよい方便です」

み中は驚いて、これは老病で昏迷におちいつてのことばだと考えた。張氏は笑って、

「お前たちはわたしのことばを正気でないことばと聞きましたか。『守節』の二文字はいうには易しいが、行うには難しいものです。わたしはその中で生きて来た人間です。お前たちのためにこれまでのことを話します」

み中は肅然として耳を傾けた。

「わたしが寡婦となったのは、まだ十八歳のときだった。申し訳ばかりの両班の家門に生まれて、儒生のもとに嫁ぎ、この胎の中に一つの肉塊が宿っていたために、あえて他への想いが萌すことはなかったものの、しか

し、明け方に風が吹き、夜半に雨が降りしきり、冷たい壁に向かって寂しい燈火の下で、憂いを禁ずることはまことに難しいことだった。そんなとき、舅の甥が湖西からやって来て、舎廊房に宿っているのを、わたしは屏風のあいだから覗き見て、その美しさに目を奪われ、不覚にも心がときめくのを禁じえなかった。夜になって、家人が熟睡するのを待って、燈火を取って男子の下に行こうとしたが、首をすくめてわが身を恥じ、また身を翻して戻り、心は猿のように暴れまわり、また燈火を取って出て行つては、また恥ずかしく思つて、ため息をついてもどり、そのように何度も行きつ戻りつして、意を決して舎廊房に向かったのだつた。ところが、厨の方で婢女がまだ起きていて話をするこえが聞こえてくる。しかたなく、わたしは部屋に引き返し、燈火を机の上に置いて、疲れ果ててうたた寝をしたのだつた。すると、夢の中で、わたしは舎廊房に入つて行く。某氏はまさに読書をしていて、燈火の下で顔を見合わせ、お互いに思いを述べて、互いに手を取つて寢床の帳の中に入つて行く。すると、帳の中には一人の人が座っているではないか。蓬のように乱れた髪に血を流して、枕を打つて大哭している。これをよく見ると、亡くなった夫ではないか。私は大声を上げて、その自分の声で夢から覚めたのだつた。机の上の燈火を見ると、青白い光を發して燃え、望楼から三鼓を打つ音が聞こえて来た。赤ん坊が乳を求めて襁褓の中で泣きだしている。現実に引き戻されるとともに、悲しみに襲われ、また大いに悔いたものだった。女子の情意というのはどのような境地にいたるかわからないものだ。みずから心を洗い、思いを清めて、初めて良家の節婦として身を処すことができる。もしわたしが厨の婢女の声を聞かなければ、またもし帳の中の亡夫の夢を見なかったなら、どうしてわたしは一生のあいだ潔白の身を保て、地下にいらっしゃる方に羞恥を覚えずにいられたらう。こんなことがあつて、わたしは守節の難しさを身に染みて理解している。だから、お前たちは無理をしてこれを守ること

朝鮮漢文短編小説集（Ⅲ）

はないのです」

そうして、息子たちを呼んでこの内容を書かせて、家法として残すようにいい、笑いながら、死んでいった。

その後、この家は繁栄して、代々、節婦がいて、百年余り閨房は清潔であったという。

（『東野彙輯』）

桃山学院大学 人間文化学会 会則

第1条（名称） 本学会は「桃山学院大学人間文化学会（英語名 St. Andrew's University Association for Research in the Humanities）」と称する。

第2条（目的） 本学会は、人間科学全般および大学教育に関する研究を行い、あわせて会員相互および学外関係者との学術交流を促進することをもって、その目的とする。

第3条（事務局） 本学会の事務局は桃山学院大学内におく。

第4条（事業） 本学会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 学会誌その他の編集
- 2 総会の開催
- 3 研究会・講演会その他集会の開催
- 4 その他本学会の目的を達成するために必要な事業

第5条 本学会の会員資格は次のとおりとする。

- 1 （正会員） 本学会の正会員は、桃山学院大学の専任教員で、本学会の目的に賛同する者。
- 2 （名誉会員） 本学会の正会員であって定年退職した者およびこれに準ずる者。なお、「準ずる者」とは、「選択定年制で退職する者」、「特任教員で退職する者」、「65歳以上70歳以前に自己都合で退職する者」、および、「勤続年数が20年を超えて自己都合で退職する者」のことである。
- 3 （準会員） 本学大学院文学研究科の修了生、大学院生、研究生、および大学院特別研究員。
- 4 正会員は、本学会の総会および第4条に定める各種事業に参画し、本学会の刊行物の配布を受ける。
- 5 名誉会員および準会員は本学会の開催する大会、研究会、講演会等に参加し、また本学会の機関誌などの刊行物の配布を受けることができる。
- 6 （入会） 本学会への入会を希望する者は、本学会役員会の推薦および学会総会の審議で決定する。

（退会） 本学会の退会を希望する者は、本学会役員会に退会届を提出し、学会総会の審議で決定する。

第6条（学会誌） 本学会の学会誌は『人間文化研究』（英語名 Journal of Humanities Research）と称する。

- 2 学会誌の編集は本学会の責任において行い、発行は桃山学院大学総合研究所が行う。
- 3 学会誌の発行は、原則として年2回とする。
- 4 学会誌への投稿規定は、別に定める。

第7条（会費） 正会員は年額3,000円の会費を納入する。

第8条（役員）

- 1 本学会に次の役員をおく。
 - (1) 会長 1名
 - (2) 理事 庶務 1名
編集 1名

会計 1名

(3) 監査 1名

2 役員はすべて総会において正会員の互選により選出し、その任期は原則として2年間とする。

3 会長は本学会を代表し、会務を総括する。

4 理事は学会誌編集責任者、会計責任者、大会庶務担当者とし、会長を補佐して会務を運営する。

5 監査は本学会の会計監査を行う。

第9条（総会）本学会は毎年度2回総会を開催する。

2 会長は、その必要を認めるときは、臨時に総会を招集することができる。

第10条（会計および監査）本学会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

2 監査は毎年度本学会の会計監査を行い、これを総会に報告して承認を得なければならない。

第11条（議決）本学会会則の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この会則は2014年4月1日より施行する。

この会則は2024年4月1日より改訂施行する。

桃山学院大学『人間文化研究』投稿規程

1. (1) 本誌に投稿できる者は、原則として本学会の正会員、名誉会員、準会員とする。ただし、準会員による投稿については、本学会の正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員（合計2名）の審査員による学術的評価を得なければならない。準会員の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会が審議を経て、決定する。
- (2) 本学会の会員以外の者の投稿は、本学会正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員（合計2名）の審査員による学術的評価を得なければならない。会員以外の者の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会が審議を経て、決定する。
- (3) 特別号発行の際、役員会の審議を経て、外部の研究者等に寄稿を依頼することができる。
2. 投稿内容は、論文、研究ノート、翻訳、資料、書誌、書評、その他とし、投稿者は類別を指定して投稿すること。投稿原稿は未発表の原稿に限る。ただし、口頭発表を基に作成した原稿は投稿できる。
3. 原稿はワープロで作成する。原稿の分量は、論文および翻訳で20,000語（欧文の場合は10,000語）、論文以外は12,000語（欧文6,000語）を限度とする。
4. 投稿には英文タイトルを別記し、論文の場合には500語程度の英文抄録を添付すること。論文以外の場合は、英文抄録を付するかどうかは投稿者の意向に委ねる。また、論文、研究ノートには、5語以内のキーワードを記載する。
5. 原稿は完成原稿を提出し、校正に際して大量の修正、追加は認められない。
6. 投稿者による校正は原則として再校までとし、定められた期日内に校正刷りを返却すること。
7. (1) 英文校閲（英文タイトルと英文抄録）は、掲載が決定した論文（正会員、名誉会員、準会員）については、桃山学院大学総合研究所に委託する。
- (2) 会員以外の者の論文は、投稿時には英文校閲を完了していなければならない。なお、英文校閲者の氏名と所属を投稿申込書に明記すること。
- (3) 特別号発行の際に投稿依頼した原稿については、英文校閲（英文タイトルと英文抄録）は桃山学院大学総合研究所に委託する。
8. 準会員、および会員以外の投稿時の審査員には、一定の報酬を支払う（1件につき、5,000円）。
9. 特別号発行の際、外部の研究者等に寄稿依頼を行ったときには、謝礼を支払うことができる。謝礼の額は役員会で決定する。
10. 本誌に掲載された論文等の著作権のうち、「複製権」と「公衆送信権」の行使は、桃山学院大学総合研究所に委託する。
11. 本誌に掲載された論文等については、桃山学院大学学術機関リポジトリに公開することを原則とする。
12. 本規程の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この規程は2014年4月1日より施行する。
この規程は2023年7月31日より改訂施行する。
この規程は2023年9月30日より改訂施行する。

執筆者紹介

(掲載順)

松永俊男 (MATSUNAGA Toshio)	本学名誉教授	科学史
高田里恵子 (TAKADA Rieko)	経営学部教授	ドイツ文学
WAGNER Adrian	国際教養学部准教授	第二言語習得・ 英語教育
小野美智子 (ONO Michiko)	外国語教育センター 特定業務職員	英語教育アドミニストレーション・ 英語学習支援
韓娥凜 (HAN Ahreum)	国際教養学部講師	社会言語学
三井規裕 (MITSUI Noriyasu)	共通教育機構准教授	高等教育・ 教育工学
前川明 (MAEKAWA Akira)	流通科学大学 人間社会学部准教授	キャリア教育・ 若者の雇用政策
梅山秀幸 (UMEYAMA Hideyuki)	本学名誉教授	日本文化史・ 比較文学

人間文化学会役員（2024年度）

会 長 : 有 川 康 二

理 事（編集）：宮 脇 永 吏

理 事（庶務）：釣 井 千 恵

理 事（会計）：南 郷 晃 子

監 事 : 松 澤 俊 二

2024年10月11日発行

人 間 文 化 研 究

第 21 号

編 集 桃 山 学 院 大 学 人 間 文 化 学 会
発 行 桃 山 学 院 大 学 総 合 研 究 所
594-1198 大 阪 府 和 泉 市 ま な び 野 1 番 1 号
TEL. 0725-92-7129

印 刷 所 友 野 印 刷 株 式 会 社
700-0035 岡 山 市 北 区 高 柳 西 町 1 - 23
TEL. 086-255-1101 (代表)

Journal of Humanities Research

St. Andrew's University

No. 21 October 2024

CONTENTS

Articles

- Biological Thought of Geoffroy Saint-Hilaire:
Historical Significance of the "Unity of Plan"
..... MATSUNAGA Toshio (1)
- Second Generation of Taisho Liberalism:
Abe Nosei and Nogami Yaeko, Part 2 TAKADA Rieko (37)
- Second Language Acquisition in Virtual Reality:
A Trial of AI-augmented English Learning
..... WAGNER Adrian (69)
ONO Michiko
- Discourse Strategies in South Korean Election Speeches:
The Creation of Discourse Using Verbal and
Nonverbal Contextualization Cues HAN Ahreum (105)

Note

- Survey on Attitudes of Students Tending to Fall Short of
Earning Credits on University Courses MITSUI Noriyasu (129)
MAEKAWA Akira

Translation

- Chinese Classic Style Novels of Jeoseon Period (III)
Fortune 3 UMEYAMA Hideyuki (145)

~~~~~  
Published by the Research Institute,  
St. Andrew's University

1-1 Manabino, Izumi, Osaka 594-1198, Japan  
~~~~~